川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成三年十月二十五日 印刷
平成三年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七七四号

日川協加盟

No. 774

十一月号

☆新年号特集☆

川柳塔同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。

■締切　11月25日（本社事務所宛）

年賀広告募集

本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の紙上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は左記のとおりですので、よろしくお願いします。

★個　人　一口　二、〇〇〇円
（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　11月25日までに本社事務所へ

〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

Pierre Parchen

Daniel Monshell

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

SUPER OSK

オーエスケーの
紳士服

株式会社オーエスケー
〒540　大阪市中央区南新町1―4―7
(06) 941―8018

石の声

西尾　栞

雑誌は一ヶ月先取りするので、九月に十一月のことを考えなければならない。余命幾許という高齢者には二ヶ月長生きするのか、二ヶ月損するのか、委しくは考えてみよう。

若い時代は生活のために経済的な成功が大変尊いものに思って情熱を傾けてきたが、満八十二歳と八ヶ月ともなると、金銭や物質、事業の拡大は若い時ほどに魅力がない。

それでは何が欲しいか。一番欲しいものは何かというと、後継者のまごころだと思う。塔社を昭和五十七年十月に生々庵から引き継いで今日までやってきたが、果してまごころのある後継者だっただろうかと思うと、晩秋の今日この頃、まことに忸怩たるものがある。

先日の理事会の席上、ある若い人の発言で我々高齢者に対する一言があった。私より二つ上の長老の気色ばまれた発言があった。若い人は酩酊とまでは言えないが、ビールを呑んでいたようだし、自分の言葉に自分で酔うていたようだったから、私は一言も発しなかったが、曾て路郎はある時、「黙れ小松園」という一喝のあったことを思い出していた。十月号の薫風君の書いている「大空のこころ」に、六厘坊のこと井上刀三、黒木莢豆、三好革郎の一部掲載を読んで良い先輩が居てたんだなァと感心した。

私は小さい時から母によく言われたことがある。「殴った夜は寝にくいが、殴られた夜は寝よい」とか、「言いたいことがあれば明日言え。一晩寝るとすっきりする」と教えられてきた。肚をたてて帰ってくると、阿呆になっとき、阿呆になっときとよく言われた。

天の時、地の利、人の和こそ、勝利の道と考えているので、よく走る馬、中途を走る馬、遅く走る馬、それぞれに順序よく見てゆくのが、路郎の「人間陶冶の詩」の根底だと思うているのである。

七月号の二宗吟平さんの「私の句碑」を読んで、流石に吟平さんは偉いお方だなァ、川柳で悟られた立派な方だと尊敬している。

丸うなれまあるうなれと石の声　吟平

塔には立派な後継者がおられるので、私は安心して引退できることを欣んでいる。

立ち読みの頁くってる書庫の前　栞
対談は先祖の筧　ほめる叔父　〃　〃
頬かむりの老友と逢う水車小屋　〃　〃
松茸の箸とる仕草太郎冠者　〃　〃

座右の句
ゆらりゆらりと新しい旅始まりぬ　（太茂津）
私の句
一本の葦の雑談水なごむ　北山好笑

川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　石の声 …… 西尾　栞 …（1）
私は見たのです …… 八木千代 …（2）
川柳塔（同人吟）…… 西尾　栞選 …（4）
自選集 …… （37）
川柳の群像　出口夢詩朗 …… 東野大八 …（42）
■古川柳　柳籠裏三篇研究（九丁～十丁）…… （44）
水煙抄 …… 黒川紫香選 …（46）
秀句鑑賞 ┌同人吟 …… 堀端三男 …（41）
　　└水煙抄 …… 政岡日枝子 …（67）
句評リレー …… 小池しげお・河内月子・小林妻子・阿部柳太 …（68）
銀河系 …… 河内天笑選 …（72）
茴香の花 …… 小出智子選 …（76）
■ひみこさろん「うれしかったこと」…… 佐藤奏月・永田俊子 …（78）
大空のこころ (11) …… 橘高薫風 …（79）

私は見たのです

八木千代

あれは十八歳の秋。ところは中国東北部ハルピン市南崗。今にして思えば、このごろ騒がれている臨死体験と心霊現象とが同時進行という光景を私は見たのです。

よっぽど縁の深い姉妹らしく、この夏も左眼の手術で入院、私も毎日介抱に通いながらその時のことを思い出していたのでしたが、その姉が義兄と三人の幼な児を抱えながら危篤という電報。発信地はこの話の舞台になる北満のハルピン。八十を過ぎた姑と母親に先立たれた孫たちがおれば母は動きもつかず、とうとう伯父の護衛つきで私が看病に行くことになったのです。

玄海灘を越え、朝鮮半島を過ぎ、満洲平野をただただ北へと一路。ようやくハルピンの地を踏みながら意識のあったのは一週間ほど待ち構えていたような腸チフス菌をもらってあとの二か月は市立病院の伝染病棟の二人部屋で喘いでいたという情けなさ。

カルテを退院時に見せられれば、四十二度

「勝　つ」……上田柳影選…(80)
一路集「見　学」……西原艶子選…(80)
「ツアー」……淡路ゆり子選…(81)
初歩教室「借りる」……辻　白渓子…(82)
平成三年度川柳塔社同人総会……(84)
二賞表彰十月本社句会……(86)
第6回川柳塔勉強会……門谷たず子・田中透太・宮崎シマ子…(90)
中国吟行の旅―台北・台中・日月潭……(94)
田中正坊・森中恵美子・天正千梢・奥田みつ子・西出楓楽・東野大八
■各地句会だより 岸和田川柳会……芳地狸村…(99)
各地柳壇（佳句地十選／神谷凡九郎）……(100)
一つの川柳……田中透太…(93)
■句集紹介　田中叶百句集『蟹の泡』……小出智子…(98)
柳界展望……(112)
十一月各地句会案内……(113)
■編集後記……正坊・みつ子・しげお…(114)

座右の句

追うことも追われることもない夫婦　（鬼遊）

私の句

好きな酒飲んで命と仲がよい　吉村一風

三度という高熱が四十日間続き、その間中、死んではいないけれど生きている訳でもなく昏睡のまま夢うつつをさまよいながらの、そんな連日にたしかに見たのです。

淡いグリーンとミルク色の小花でいっぱいの花野。ふしぎに土は全然ありません。その花の雲の中から「一緒に行こう…支度しておいで」って。男なのか女なのか判らないけれど、美しい人。私は従いてゆこうとするのですが、どうしても足が出ないのです。

いつのまにかベッドの下に母が寝床を敷いていまして必死で私の足に絡みつくのです。「明日の夕方こそきっと」と約束させて消えてゆく人。その明日になると、またまた母がベッドの下から現れて「行くな行くな」と。手がちぎれてしまうほど邪魔をします。

そんな繰り返しが十日ほど。遂にその人は諦めて恨みがましく一人で野原のずっと向うに立ち去り、私は約束を破ったことが申し訳なくてお辞儀するばかりでした。

あくる朝からぐんぐん熱がひいて、目も見えてきて手も動いて言葉も言えて、私はいちばん先にベッドの下に声を掛けました。「母さん…」おわかりでしょうが、母は居ませんでした。確かに私のベッドの下で寝起きして看病してくれて、あわや死の一歩手前でこの世に引き戻してくれたのはいったい誰？

ともあれ、せっかく死にそこなったいのち。せめて生きそこなわぬようにと、心してはいるのです。

川柳塔

西尾栞選

米子市　田中亜弥

林檎一つで象とかけひきしています
真実は伏せて泥舟できあがる
逆立ちのできる余裕を持っている
掌の罪がなかなか出てゆかぬ
裏切りは出来ぬが心動いてる
男いろいろ丈夫な夫で恙なし

大阪市　板東倫子

たかが女されど女の女将在り
よく笑う寡婦はワインに酔っている
説明書片手にファジーの洗濯機
老骨のボルトナットがゆるみ出す
御寵愛埃叩きのような犬
レーニン像倒される日に生きている

米子市　林荒介

自転車に今日も昨日も積んでいる
弔いの酒から夜が深くなる
腕枕の中に貨車が辿り着く
押してくれたのも叱ってくれたのも風
鉛筆を噛んでいる相討ちの父
火葬場はみんな烟にしてくれる

竹原市　小島蘭幸

一番最後に速達で来るのはあなた
恩は一度に返さぬことにしています
ぼくのお金でぼくの万年筆を買う
雨が降るやさしい河童ばかりいる
あなたのなかに男をみたという手紙
お隣の電話が鳴っている秋よ

島根県　堀江正朗

人恋し夜中に耳の痒いこと
触感の人生　漫画多過ぎて
指先の鈍さも齢か点字打つ
文明の良さ恐ろしさ白杖に
ごろり寝て見えてた記憶継ぎ合わす

折り合いがとれず笑って席を立つ

島根県　堀江芳子

いつまでも死ねない訳は　おとうさん
ムチ打ちの首寝転んで秋の月
あけすけに言える看護婦さんで好き
話しかけながら器用に編んでるね
抜群の演技おんなの底力
笑ってる周りもみんな笑ってる

大阪市　西出楓楽

安値に尻尾ふるのは敵だろう
家族みな失語症めく孫の留守
忙しい愚痴が長びく立話
写経してなおさら迷い深くする
へそくりの額は言うなと梨の芯
若貴が負けて今夜は早寝する

和歌山市　西山幸

約束へ天はいよいよ高くなる
乗り継いで継いでわたしにまだ着かぬ
坂道の途中で威し銃が鳴る
揺らぐまいとり乱すまいコスモスよ
ひもじさとさもしさで割箸を割る
秋寒し宝籤など買うてみる

堺市　板尾岳人

貧乏と思ったことがない学者
甲斐性はないがベレーがよく似合う
そして秋　父の帽子が置いてある
甲斐性はないが花には水をやり
あちこちに逢いたい人が居て困る

鳥取県　土橋螢

この坂の下で煙草を喫っている
兜虫が交尾しているみてごらん
風雲にまかすいのちを軽くする
平隠に二百十日の菊手入れ
駆け出しの刑事にしっ尾つかまれる

伊丹市　樫谷寿馬

一つの思想が生れて消えたわが半生
ライバルを美しく賞め秋の虫
懐かしく右肩下がりで来た返事
豆殻で豆煮る故事に兄憶う
夜叉の名が好きで見ている太平記

岡山県　嘉数兆代賀

冷奴　胡瓜きゅうりの日がつづき
ある時は惚けたかおで飯を食う
莫迦になることにも馴れた土踏まず
旧きよき時代は消えて街渇く
美しく生きようとする水溜り

鳥取県　西村早苗

手紙を焼くだまされたのが憎い
昨年の匂いが残ってる冬帽子
ホールインワンえらい事をしたもんだ
生タマゴかけるご飯に穴をあけ
とんきょうな声母さんが蛇に会う

下関市　石川　侃流洞

形容詞　風が騒いで取り逃がし
ものの弾みという謝りが気に食わぬ
お手やわらかに願うと白を持つゆとり
猿回しの猿反省も芸のうち
ゴミ戦争火薬の匂いせぬけれど

美禰市　安平次　弘道

余生なお試行錯誤を繰り返す
飽食の街から消えてゆく美談
年金のくらし首輪のあとも消え
椅子取りに敗れ光らぬ靴をはく
本命が消えて慌てる消去法

島根県　小砂　白汀

生るだけは生ったと茄子わるびれず
毒草は毒草なりの自己主張
感度よしされど嵐はもう去った
斐伊川を飲んでおります元気です
流れ去る刻の音かも耳鳴りは

堺市　高橋　千万子

掛け軸を取り替え秋の風を入れ
札束に心包んで置いてくる
OL十年結婚という忘れもの
月をながめて恋した頃の話する
ちょいちょいと嫁はん他人の顔になる

今治市　矢野　佳雲

山を抜くように男が風呂を出る
カットバン昔は親のつばですみ
瓦一枚寄進の寺の屋根仰ぐ
泣きながらゆくのもあろう蟻の列
名前負けきっとしている黄金虫

倉吉市　奥谷　弘朗

人生は読み書き算盤だと教え
親しさか黙って隣に来て座り
良心が強くて政治家には向かず
煩悩にまだ揺れている老いの坂
ぎりぎりの線で妥協を迫られる

笠岡市　松本　忠三

一円の釣を貰っておくとする
立板に水　老妻の衰えず
じいさんも困りはてる目の遣り場
腕を組む妻の歩幅へよさねえか
検診の順階段で追抜かれ

米子市　小西　雄々

雑兵で終りたくない立見席
平和呆け安定剤を飲んでいる
嘘ひとつ言えばひとつの泡が浮く
息抜きをするたび揺れる丸木橋
正面の風を気にする風見鶏

神戸市　中村ゆきを

ワンルーム男が掃除娘留守
妖怪がまだ見え隠れクレムリン
粗大ゴミ燃えないゴミへ語りかけ
飲みに行く「月の砂漠」というドア
逆立ちす明日も自説は曲げぬ肚

柳井市　弘津柳慶

その内に何とかなるさ夢を持ち
お盆と言うに息子と孫は旅に出た
盆提灯もう十年になったのか
つまずいて人の情けが身に沁みて
生真面目なだけが取柄の婿養子

松原市　玉置重人

痩せてます三猿主義ができなくて
身に覚えあってビールの泡も消え
平凡が一番好きな出勤簿
輪の外で輪の中を恋う天の邪鬼
四字塾語男がすこし頼りない

米子市　林瑞枝

遠い絵を美化して書こう放浪記
距離おいた愛かな父母のふたつ星
ロッキングチェア秋の余韻で本を読む
人魚みたい泳ぐひとりの露天風呂
涙脆くなった水甕に水がない

玉野市　小谷仙山

妻の留守妻の便利を知らされる
伝統を磨くのれんの味自慢
成長の順にどんぐり木から落ち
事なかれ主義で拍手はしておこう
暮れの秋胡瓜が臍を曲げている

尼崎市　春城武庫坊

楊貴妃の鼻の高さは知らされず
竿秤　明治の声で返事する
広辞苑のずしりと重い秋の部屋
たっぷりと湯呑二つに茶をそそぐ
二人いるから今日一日が無事終る

尼崎市　春城年代

秋暑し走り続ける消防車
ふと鏡よぎるまさしく長女の目
ひょっとしたらと夫と数える寿命など
書斎には虚しいものを積みすぎる
昔ばなしが多くなったと思う秋

名古屋市　越村枯梢

グルメ遍歴　最たるものは父の脛
駆け落ちもいいものだった回顧録
化けて出るくらいの意地は持っている
一万歩あるいて妻に誉められる
土曜コール娘の声に救われる

松原市　小池しげお

口下手の言うた言葉を信じよう
しあわせでなかった亡母のつげの櫛
プライドが側頭葉で邪魔をする
指切りの小指うたがい深くなる
神棚へパパより偉い通信簿

廿日市市　林野甦光

首が切れる程度に包丁よく磨く
他人の知恵を当にしている覗き癖
おしどりもストレス溜めている機嫌
めぐまれた指の辺りに住む空虚
ゼスチャーでとぼける羅漢一人いる

大阪市　江城修史

敬老敬老一日だけの労りよ
労られ心のなごむ風の町
ちぎれ雲所詮おまえは渡り鳥
秋淋し亡父の忌亡母の忌彼岸花
コスモスよ亡母の匂いとやさしさと

大田市　藤田軒太楼

年金の杖で余生の老いの坂
避難した所へ風が向きを変え
是非論はさておき感情先走り
おでん酒うまく相談まとめあげ
敬老会自慢話にかびが生え

奈良市　宮口笛生

カブト虫がまだ生きている新学期
敬老の日元気なプラン組んでいる
鍬を持つ老後大根太くなる
使い捨て養老院へ拾われる
事故現場十八　十九　二十の死

藤井寺市　吉岡美房

戦争の話は芋を焼きながら
尾を振らぬ男に仮面など要らぬ
平熱になったら母の顔がある
たこ焼きを次の見舞いに頼まれる
遊園地猿の親子に比べられ

倉敷市　小野克枝

真実を追えば奈落が口を開け
家族みな敵に回した北の窓
皺の手にまだ摑みたい欲があり
美しい花盗人を許す朝
物指しではかり切れない母の河

西宮市　林はつ絵

秋風が化粧のあとへ忍びこむ
ホームスティー青い眼の孫一人増え
胸のうちぽろっとこぼすひとりごと
死語と言う孝行がまだうちにある
スケジュールいっぱい老いのそれなりに

豊中市　安藤寿美子

異人館めぐり坂道上り下り
ドアチェーンだけはいつでもかかってる
泥棒を仰天させた九官鳥
阿蘇五岳観音さまのおひるねか
胎教や胎教やとてクラシック

奈良県　上田翠光

明けやらぬ畠に今朝の鐘を聞く
老農の耳和ませて朝の鏡
数珠持たぬ手でよし鐘の音に合わせ
鐘の音に畑打つ鍬の手を休め
よこしまな心そこのけ鐘が鳴る

堺市　藤井一二三

旅はるか金婚の歩をかばい合い（萩原保三郎ご夫妻の金婚を祝う　2句）
彼岸花まだ金婚の燃えにもえ
餅を搗く月の素顔はそのままに
みな利口ばかりで馬鹿が浮き上がり
たしなめるような口調で留守電話

仙台市　川村映輝

農民のエゴに反発パンを食う
腐っても鯛のつもりでいるソ連
脳細胞時時刻刻に減る恐さ
万歩計にも週休二日にし
台風のエゴに予報をまごつかせ

西宮市　奥田みつ子

今年また事なく過ぎた敗戦忌
信じねばならぬと思う愛だろう
嬉しくてだんだん声が高くなる
虫すだく吾が魂を削るごと
影法師時に手強い敵となる

熊本市　永田俊子

逢いにゆくときめきかくすサングラス
褒め合って悲しい距離の嫁姑
雑兵の血は目立たない史書の裏
記憶喪失赤鉛筆を持ち歩く
逆境についてくるのは影法師

京都市　都倉求芽

彼岸会のひしめく中の無縁墓
年輪に苦労した跡残すまい
水着跡消えて叙情派になる女
僅かな道だけど消えない父の地図
ローマ字で読み方を知る京の路

加古川市　吐田公一

愚痴言わぬ老母に学ぶこと多し
他人のめし食べて解って来た世間
虫も殺さん顔して凄いことを言う
紅一点いて歩くのにはずみつき
そっとしておいて下さい他人の目

鳥取県　松下たつみ

席たった人が知ってた裏話
赤トンボ街の俗化を消してくれ
ゆえあって視線がもとに戻らない
野の花へしゃがみこんだは街の女
寄せ書きの一癖ずつのありがたみ

西宮市　門谷たず子

足かばいつつ行く奥入瀬は秋の中（みちのくに旅して　2句）
憧れて来た程でなし青葉域
ほんの微妙なずれが尾を引く嫁姑
共に修羅抜けた夫婦で持つ絆
鬼子母神　親の情けかざくろの実

豊中市　田中正坊

スタートは一番だったと聞いている
本命なきレース始まる永田町
一筆箋で礼状を書くかるい義理
饂飩屋に結界があり一葉忌（十一月二十三日）
どっちもどっちエリツィンとゴルバチョフ

東大阪市　森下愛論

幾世紀昔話を知る地蔵
さて何処へ行こうか朝の靴磨く
老いの眼に刺激が強いカーガール
夜の蝶仮面を付けて身構える
とりあえず笑って妥協だけしとく

松江市　恒松叮紅

負け犬の虚勢と知った日の不快
真相は不透明のまま秋が来る
新しい畳眠れぬ貧乏性
仁術を頼りにしてる聴診器
迫真の演技が欲しい平和ボケ

松江市　舟木与根一

刈跡に残って案山子国憂う
世界地図塗るのを少し待ってみる
ストレスが溜まる旧家の鬼瓦
保険みな満期で余生寒くなる
まだ汚染進んでいない赤とんぼ

松江市　柳楽鶴丸

標札は夫唱　中へ入れば夫随
裏の裏甘いそのまた裏がある
旅をして心の充電しています
ダサイと言うなら僕が着てやろう
昔々人間魚雷がおりました

和歌山市　堀端三男

こころの内も素直に話せない愚直
古希すぎてまだ悪友の吹き溜り
借金を逝くまで嫌い抜いた父
カラフルな薬見せ合う宿浴衣
秋深し浜辺の貝のひとり言

堺市　楊井二南

偽でない証拠に息を吹きかける
不祥事をあの手この手で紛らせる
妻の留守そこはかとなく息苦し
糟糠の妻が時々面を打つ
白足袋を履けば貫禄直ぐに出る

京都市　山本規不風

縁談に得体の知れぬ魔が触れる
結局は売らずに亡父の石灯籠
阿呆の夫婦らしい事実を認められ
血天井のガイドと並ぶ冬牡丹
聞き合せらしい感じの良い美人

鳥取市　両川洋々

風ヒュルル砂丘の夜泣きかも知れぬ
腹の子も食べよ紀子さん梨を剝く
ボスの座へチロリン村がもめている
消しゴムが離せぬ男なら捨てる
飲む打つ買うで一つの恨み消せますか

倉敷市　稲田豊作

今日がだいじ日銭稼ぎに明日はない
酒豪の名馳せて儚い脳卒中
嫁ぐ娘に耐える教えを繰り返す
勤勉に暮らすと亡父の歩幅になる
貧しさを口にせぬ嫁ありがたし

大阪市　河井庸佑

価値観がこんなに違う暮し向き
つまらない遠慮誤解を生んだだけ
好調なだけにくやしい勇み足
思う程相手心に留めていず
裏腹な格言どっち信じよう

守口市　羽原静歩

おばあちゃんがうろうろ代理の参観日（幼稚園）
知恵の輪をくぐってうれしい七五三
七三に手伝う園児の創作展
アルバムに一期一会の顔がある
針のない時計で凄いことを言う

岡山県　二宗吟平

母の声三途の川を呼び戻し
折れ釘の母の便りは温かった
ご縁日母は徹夜で縫うて着せ
悪友の墓石へ酒をかけてやり
待合所知らない人に話しかけ

西条市　片上明水

東京の地図を広げて恐くなり
お相手はわたしを亀と見てのこと
秋の蝶はぐれたように庭を去る
草引きに追われ追われただけの夏
手伝いも無く葬式の布団干す

高知県　赤川菊野

土佐気質裏も表もない暮し
ゆとりなどないが独りで生きてます
女ですあなた次第で変ります
その時も延命医療おことわり
独り言オウムに聞かれた日の不覚

和歌山市　内田結実

青いランプに触れると罪になるふたり
そんなに視つめないでよタイピンの真珠
ペン先が尖ったままの小半日
信号無視仲間はずれに甘んじる
ドアチェーン錆びておんながもどらない

岡山市　川端柳子

向上をせねばと思う齢の数
やさしさよ夢追う女になりました
血も涙もあり過ぎ人に気を許す
大さわぎしてますあなた方いかが
横顔は動かぬままに裏切りぬ

奈良県　田中紀美代

いつの間に親ばか振りが犬に向き
まっとうに生きて太陽と対話する
疎外感知人に会わぬ道を選り
喜怒哀楽　痴呆の姑と二十四時
呆けすすむ気がする週休二日制

大阪市　神夏磯典子

自画像を書くペン先が甘くなる
私とは正反対の友を持ち
落書きにまともなことが書いてある
包丁を研いでる妻が恐ろしい
マンネリに反対側がよく見える

宇部市　平田実男

勇み足出来る若さがうらやまし
行く末をアテンドが待ち呆けが待ち
エリートへ愛社精神笑われる
膝頭孫の重みを嬉しがり
生きている証　血圧上下する

神戸市　山口美穂

残暑に耐える老母の吐息と虫の声
電話のむこうも播州弁らし老母もまた
神に祈り医師を信じて手術台（義弟の手術）
秋桜青春の日の夢よぎる
芸術の秋わたしも湖畔の紅葉描く

高槻市　川島諷云児

実らない願い枕に詰めて寝る
街に灯が点ると治る偏頭痛
運という言葉は父の辞書に無い
結論を急いで火傷してしまう
矢印が消えて戸惑う曲がり角

香川県　松村迷観子

男なら男の顔をくずすまい
言い訳のための言い訳してばれる
甲子園だけが知ってる土の色
我がままを通して居れるのも夫婦
御先祖の訓が効いている家計

寝屋川市　江口度

赤旗降ろす亡びの唄を聞きながら
すみませんと頭取さんがやめただけ
少しずつ手綱ゆるめて娘を育て
妻の留守やりたいことがたんとある
失敗を過去形にしていどむ坂

岸和田市　高須賀金太

横文字が街の素顔を変えて行く
貧乏はいや金持ちはなお嫌だ
すきま風茶碗を投げたことはない
数学科出て買い物は苦手です
渡り鳥帰ってみたら山がない

守口市　野呂右近

信号の赤がつづいて気が変わる
偏屈の男孤独を自認する
若貴に老いの残り血湧かす部屋
残ったら食べると妻は手を付けず
夢持とう白い頁の明日がある

岸和田市　福浦勝晴

何食べてもやっぱりいっち旨いメシ
孤高とは灯台守に荒れる海
挫折してニヒルの壁と対決す
杉良の観劇ジャスミン匂わせて
老いむなし二人に遠いホテルの灯

松原市　佐藤奏月

喋らない九官鳥をいとおしむ
秋からの手紙ふいに逢いとなる
美しい草書だ無理をきいてあげ
何事もなかったように萩が咲く
五日まえ見舞ったままの缶ジュース

町田市　竹内紫錆

一度だけ重圧躱す診断書
発音は一生怪し翻訳家
老いて翻訳　鉛筆も強い芯
二十からポーカーフェイス世を渡る
俳友のショック旧かな正されて

八尾市　宮西弥生

八十まで生きてはゆけない貯金帳
世渡りに馴れてやさしさ欠けている
人の輪の外が好きになってくる
十五夜の月を見てから里ごころ
境界をいつもつくって独りごと

富山市　舟渡杏花

俗名やこだわり続くからす瓜
白旗を数えてやおら立上がる
あげ底の下にもぐった五分の虫
貸して戻らぬ傘とおんなじ傘を買う
天地無用貼られて故郷へ舞い戻る

和歌山市　松原寿子

遠回りした人生の首洗う
ハンドル捌き時々地図に逆ろうて
丁半を打つ訳でなし宝くじ
空想を広げて翔んでいる枕
おやこんな歳だったとはアルバムよ

寝屋川市　稲葉冬葉

姉さんがやさしくなった余命表
とても上手に話題を外す風の街
健気に生きて五分の自尊心
乗り捨てを見ない振りした罪意識
父に遇う少年の瞳は男なり

大和高田市　岸本豊平次

特攻が日本平和の為と遺書
共白髪皇后様の夫婦愛
子にすればおふくろの味か妻の味
姑が才女で嫁にやりしぶる
盆おどり輪の外にいて蚊に刺され

姫路市　人見翠記

柳友の絆は強し高野山
読経の最中極楽の余り風
介護とや清し最高の修行なり
幕揚る心は躍る舞扇
幕降りて溜息残る玉三郎

箕面市　坪田紅葉

気どらずにそのままでいい老いの道
盆がえり宅急便が先につく
強がりを言ってまぎらす薬づけ
瀬戸小島　波をまくらに日が沈む
妹が老人ホームの話する

高石市　浅野房子

南無阿弥陀仏唱えていますあの日から
化野の無縁仏にあるロマン
ためらい傷幾つか残し幕を引く
粉飾の挙句の果ては取りこぼし
結局はひとり生きる事も死ぬ事も

大阪市　大塚節子

あっけない幕切れでした離婚劇
停電の下で米搗く瓶の音
生花の向日葵太陽見失い
揚幕の「暫」の声へ大向う
国会喚問お互い様に触れぬ傷

寝屋川市　岸野　あやめ

夏休み終ればドッと出る疲れ
図書館で怯まず叱る他人の子
試着室の鏡が出した×サイン
千日前に高級料亭あったかナ
草抜きが苦の種だとは贅沢な

宝塚市　丸山　よし津

下戸と知らず祝いに酒を贈られる
里帰り駅前の地図塗り変わる
万年平で歌と司会はプロの芸
誠実な過去が物言う老人会
成るように成って来たから案じない

大阪市　津守　柳伸

湯布院の句碑ほのぼのと阿蘇の景
普賢岳偲んだ阿蘇の灰あらし
鑿跡へタイムスリップさせる涼
恩讐の彼方を偲ぶ蟬しぐれ
鈴虫の音色ひと筆まいらせん

出雲市　園山　多賀子

飾らない言葉が欲しい合歓の花
八十になったと思う眼鏡拭く
文学の小径に惹かれ蟬時雨
人妻に指摘　釦のかけ違い
テストには弱いと罪な慰めか

出雲市　吉岡　きみえ

秋深む度を強めてめがね買う
箸ぽとり落とし現実とり戻す
世の中の酸いも甘いも皺の数
みんなみな好きなことして陽が暮れる
ふるさとの敷居の高さ他人になる

島根県　松本　文子

ボロ自転車漕いで仏の花買いに
その中に泣き声もいる秋の虫
人の知らない病名ひとつ持っている
真っ先に逃げることだけ考える
手を振って歩きひとりもいいもんだ

八尾市　古川　覚然坊

海青くそこに国境のない魚群
頼られて男冥利に精を出し
夏の夜の踊りに身分等言わず
陽が伸びて安易な孤老に戻りかけ
情熱のいっそ両刃の剣となり

八尾市　宮崎　シマ子

浅漬の茄子はだれにも負けぬ色
枝つきの柿は都会の娘に買われ
穫入れて一しお秋の深い過疎
街中の田に立つ案山子サングラス
美しさ誇れば萩もくくられる

八尾市　鷲見　章

あした逢うサヨナラだから弾ませて
禅寺に葷酒を許す日の法事
飽食の檻から消えて行く野性
事故ニュースあとは陽気にコマーシャル
腕相撲孫が手加減してくれる

和歌山市　桜井千秀

リストにはないが摑める藁らしい
ためらって逃がしたものがたんとある
まだ翔べるまだ翔べるとて背筋伸ばす
見せかけの涙乾いてゆく早さ
神様の裁き待ってるもどかしさ

和歌山市　木本朱夏

曼珠沙華燃えて予言は成就する
消化不良のロマン残している男
青春のノート未完の詩を抱く
シングルの腕が家業を傾かせ
タイガース不調胃薬はなせない

和歌山市　福井桂香

ほろほろと月の雫にぬれて待つ
女郎花プライド捨てた訳でなし
単刀直入そんな私で疎まれる
愛のマニュアルを漫画からもらう
凝縮をするものがある日記帳

島根県　榊原秀子

畳拭く今日もいい日であるように
二人いて一人と思う流れ雲
もろこしの葉ずれに亡母の声をきく
約束が反古になっても青い空
ひっそりと咲くから好きな吾亦紅

弘前市　真喜内實

よいことの舞込む予感臍に来る
稲穂みなたくましくなる涼しさよ
平均寿命伸びてるさなかいい野菊
子の五指の動き咲き出る花びらか
大の字でないと眠れぬ僕大人

弘前市　村田善保

追憶の一つに母の背の温み
何もかも忘れて落葉は地に還る
メロドラマ読書の秋にしてくれず
チャンネルを消せばこんなに静かな夜
行く川を見詰め人生振り返る

唐津市　田口虹汀

あと三日親が取り組む夏の友
蟻の群れ指揮者は何処で昼寝する
男らしさ女らしさに有る魅力
環境は良いのに山葵なぜ辛い
臍繰りが溜ると下剤かけに来る

唐津市　久保正敏

お喋りな鴉が蒔いた修羅の種
墓洗う不孝の数を詫びる指
レーニンの像を跨いだ蟻の列
マルクスの広場を走るヌーデスト
ライバルに勝った女を持て余す

唐津市　仁部四郎

平成の美女も襟足白く抜け
月曜の約束白のワイシャツで
秋の酒一首一句で酌み交わし
恋文が小説になる秋の酒
秋の酒テニオハ抜きで誘われる

唐津市　筒井朴竜

縄文か弥生か頭蓋骨へ問う
首の無い人骨謎は吉野ヶ里
狩猟民遺跡に黒曜石矢尻
松浦党の末盧か唐津ッ児の気骨
赤米が出土し農耕民遺蹟

唐津市　浜本義美

知らぬ間に秋がきている土用波
ゴム銃を作れば猫が寄りつかぬ
自由化のあおり案山子が馘になり
台風は余っ程九州好きとみえ
男子マラソン君ヶ代流るスタジアム

唐津市　浜本ちよ

松手入れ庭師の作は気に入らず
敵に塩贈った心道拓く
ブランドを張り込んだとて影同じ
どん底で呑んだ泥水今に活き
美女才女その上美声えこひいき

米子市　石垣花子

置きぐすりくらいでなおる夏の風邪
逆らってもがいて群と流される
老人病棟　喜劇の続き夜更けまで
にぎやかな初盆だった多産系
遠慮するから深爪になっちゃった

米子市　菅井とも子

宍道湖も夜明けの音を待っている
浮いている赤潮だけを責めないで
嫁がせてやっとわかった人の道
ヒール少し切って夫と歩をあわせ
花束も届き金婚らしくなり

米子市　寺沢みど里

積んで崩して九月の晴れ着定まらぬ
老い先へおしゃれ心も足して行く
群れを出て心許ない萩の白
影連れて二つのいのち持ち歩く
終章は丸い言葉で別れよう

米子市　政岡　日枝子

複雑に絡む絆に風通す
想い出を包みあかずの間にしまう
ゴミ置場困る話題が捨ててある
意欲みなうばって朝の雨けむる
たくさんの情け貰った赤とんぼ

米子市　沢田　千春

旧家の話昔の顔になって聞く
火種一つ声をひそめて火消し壺
真実を知って広がる青い海
地球の動くことも忘れて生きている
コーヒー館で無口な男パズルとく

米子市　金山　夕子

八十八の母と頬寄せ月を見る
粘るのが好きな背中を追っかける
テレビ　ラジオもない繁盛のラーメン屋
フルートの音色に左脳まろやかだ
みてらっしゃい叶って高い秋の空

米子市　光井　玲子

夏バテの心に少し塩を振る
秋祭り幼馴染よ寄っといで
減量をみのりの秋に邪魔される
心の襞たたんでからの悔いの数
千両役者の姑にはとてもかなわない

米子市　新　正子

父ちゃんがいるから強い妻でいる
わたしから見れば男が面白い
畳替え若い夫が欲しくなる
印象をぬぐう絹(シルク)のハンカチで
天井にくやしさが浮く負け試合

岸和田市　植山　武助

定年後まだ悪友のままでいる
その肥満貰ってやりたいとも思う
いい位置に辻地蔵がある万歩計
老妻に年々頼る事多く
OB会年齢忘れ馬鹿話

岸和田市　原　さよ子

夏休みすんで戻って来たリズム
ショーウィンド一番先に秋の彩
目薬をさしてまだ読む漫画本
暑がりの癖にクーラー身にこたえ
ひと言を控え仲よくいたいから

岸和田市　古野　ひで

久し振り昔のままの温い友
終章を飾る言葉はとっておく
夏の恋あれは幻想だったかも
悲しみを真っ赤に染めた彼岸花
優勝の男の涙に見るロマン

和歌山市　若宮武雄

すばらしいジョークを溜めていた無口
笑えない定めに堪える鬼瓦
まだ語り尽きないままに回り道
夫婦ゴマ苦を分け合うた日の弾み
癌見舞い軽い話題を二つ三つ

和歌山市　牛尾緑良

夫婦茶碗の差ほどは夫にない威厳
言い訳の長さに不信感を持つ
殺したいほどの女と添っている
損失補塡ください闘病した日々に
公約をつなぐ鎖はすぐ切れる

和歌山市　福本英子

ちょっと隙見せると怖い火消壺
納得いかぬ席で黙って笑っとく
換気扇庶民の秋を思いっきり
落ち鮎の一匹も来ずサンマ焼く
法師蟬クーラー代もあと少し

和歌山市　内芝登志代

淋しくてやがて気楽なループタイ
影だけは私を護衛してくれる
来る方もこられる方も夏地獄
好きな針　私の命ある限り
ライバルと固い握手の好ゲーム

和歌山市　山川克子

完司様ついに私も五十歳
カード嫌いのそれとは別のテレカード
強烈な印象眠れぬ闇に舞う
そうですねまず健康ねそれからね
太郎冠者次郎冠者にも耳うちを

和歌山市　田中輝子

噂にそうてステキな恋をしています
好敵手　話題はいつも新鮮だ
余計だが隣の樹々の繁りすぎ
無口さもバネだとおもう強い人
野の花の一輪がある温い城

和歌山市　山田高夫

飽食のツケを払わす処方箋
童心に還る目で見た赤トンボ
自殺するほどの悩みがあるで無し
人嫌いさりとて一人生きられず
怖いほどツキが回って来たぞろ目

大阪市　本間満津子

北国の人から便りそぞろ秋
遠い子へ夜更けしみじみ秋を書く
来年の約束は無い松茸ご飯
腐葉土となって立派な若木育てたし
憎まれ口を呆けて無いなと喜ばれ

竹原市　森井菁居

急ぎ旅趣味の土鈴はちゃんと買う
時世だな前も後も禁煙車
新幹線降りてビールがまわりだす
一期一会を大切にする旅日記
雑兵に連帯感がしかと有る

呉市　槇田英詩

広い海が見たくて今日も本を読む
玉虫色の友には隙が見せられぬ
叱るのは止そうと爪を丸く切る
外国語にも温い言葉があるだろう
コップ酒がとっても好きな裸銭

出雲市　板垣夢酔

月末が越せるか微熱ある家計
おしゃれして演劇場へ泣きにゆく
枯れ山水翁と媼のようなもの
死にたいに生命線が邪魔をする
補聴器に油断悪口よく聞こえ

姫路市　大原葉香

電線を鳴らし続ける風の乱
通院の日課狂わす四連休
うそなどはみじんも言わぬ空の青
呉越同舟うそとうそとで散る火花
縄のれんにも哲学一つぐらいある

姫路市　丁坪サワ子

飾らない嫁の実家に足が向き
しっかり者の姑に咲いた呆けの花
電話料払わせたい娘のコードレス
河童にもなれず一夏塾の壁
新宗教へ入って狂いだした独楽

姫路市　中塚遊峰

点滴のおかげで命またつなぎ
深夜まで看取るナースの背が光る
再会へ言葉はいらぬ輝く瞳
意地と張り本音つかれた寡婦も古稀
うそのない親子ですぐに口喧嘩

大阪市　藤田頂留子

うたた寝をさそう話術がたくみすぎ
勝ったらサービスするとファンは嬉しいね
定休日こんなに広い商店街
マルクスのギフトばらして一個売り
やな予感ばかり働く向い風

羽曳野市　吉川寿美

魂を売って河童の皿乾く
少しずつ老父の時計が狂い出す
幾度もつなぎ合せて夫婦の絵
対岸の火事を見ているクーデター
窓際の一日ずつの水嵩よ

東大阪市　崎山美子

夜ふかしと朝寝身につく夏休み
夏休み妻子のプラン優先し
方言のやさしさに会う一人旅
一族に上下左右のあるつらさ
一族の掟破るのも若さ

京都市　松川芳子

若き日の涙乾かぬまま老いぬ
ふる里は近くにあって遠きもの
二人三脚確かめ合うている歩幅
誕生日電話の余韻かみしめる
長生きの秘訣は聞かぬ事にする

鳥取県　江原とみお

いろは坂先を越されてばかりいる
疵痕を数えています落葉期
阿弥陀さんの世界も小銭ではゆけぬ
円満な顔で素うどん食っている
策がない死んだ振りでもしていよう

倉敷市　田辺炎六

真実は一つ菩薩の目が綺麗
情けある言葉に明日が見えました
多情仏心苦労楽しむ日を重ね
美しく老いたし金もないくせに
新築の木の香に浸る団扇風

鳥取県　羽津川公乃

虫の音が揃う頃には嫁が来る
老姉妹揃う一夜の窓明り
我慢したケーキは夢で平げる
黒髪が減って女が匂わない
満たされて不便を託つこともある

広島県　藤解静風

稲刈りが終ると里に音がない
特売の卵へペダル踏まされる
幸か不幸か旧いタイプの妻である
多情多感会う人みんな好きになる
真っ白い時間のなかにいる孤独

奈良県　長谷川春蘭

とる度に妻見せに来る茄子トマト
文字摺草なよなよ咲きて老夫婦
洗濯の泡に溶かした小さい罪
子の住める大阪に来てラムネ飲む
終戦日生きてお米の余る日々

大阪市　町田達子

仏像が好き煩悩は詰めたまま
建前も本音も容赦ない鏡
地下街での浦島血圧のせいにする
気が付いた時に言葉の貯蓄など
飛鳥行く古代の風も秋最中

羽曳野市　榎本吐来

ソ党解散歴史が喋る半世紀（ソ党崩壊に思う）
断頭台スターリンからブレジネフ
やみくもに綻びを縫うゴルバチョフ
託された荷物が重いエリツィン
四面楚歌淡い絆にもたれ込む

島根県　栂　みどり

せめて夢楽しくみたい白い秋
にらみ合う三度の食事そのままに
病窓の秋晴れ体育祭の笛太鼓
本箱のはざまに死せる夏の蝶
消灯へ虫と私の夜が長い

鳥取県　西原艶子

同窓会みなしあわせな顔で寄り
生き方はどうあろうとも母であり
順ぐりに送る運命と知るけれど
好きだから歩幅あわせてみたくなる
逢うてきた余韻最終バスが出る

大阪市　北勝美

庭の石　心を画く禅の寺
肝心なとこが聞けない補聴器よ
一筋の道しか知らぬ父の過去
リハビリで記憶戻した毛糸針
お豆さん箸で食べるもリハビリか

高知市　北川竹萌

法師蟬名残り日記に書き止める
直野菜旬を味わう無農薬
亡父の樹の青空高き感謝の目
この道具まだ使えると譲りあい
よい汗の晩酌明日へよく眠り

大阪市　中西兼治郎

車きた自転車来たと孫のもり
一千万今日この頃ははした金
覆水が盆に返ったソビエト
暑かろうが涼しかろうが蟻の列
五右衛門の名句新聞種つきず

広島県　田村新造

ブラゴエと聞くだに嫌な港町（シベリア回想）
船足の重さよノルマ気が重い
栄養失調痩せおとろえて猿に似る
小便も星も凍っていた二月
ふるさとの我が家に夢で灯がともる

竹原市　信本博子

一病を盾にのらりと平和な日
伎芸天マリアの像と同じ目で
高笑い頭を抜ける空しさよ
通過駅心とらえて離さない
真実に触れてうつむくばかりなり

和歌山市　青枝鉄治

豊かさの付けをカルテに攻められる
騒がれて役所は重い腰を上げ
小うるさい男味方に付けておく
音程を下げて言うから湧く疑惑
壺ばかり磨いて世事に疎くいる

大阪市　井上白峰

日進月歩時計の針は戻らない
謙遜の影に自信の見え隠れ
亡父の齢越えてもいまだ無位無冠
髪染めて妻が広げた守備範囲
老いてなお女誇示する紅の彩

寝屋川市　宮尾あいき

葡萄王巨峰たのもし種がある
男はんに出すおたよりは御端書で
遠雷かヘリコプターか老いの耳
春買うたはずの財布がふくらまぬ
呆け防止のお守り入れてある財布

箕面市　椎江清芳

影法師供に頭を下げにゆく
株の損木魚のリズム狂い出す
口紅も乾く家裁の固い椅子
うどん屋の湯気には嘘はないだろう
告白は曇りガラスを拭いて聞く

川西市　松本ただし

肩書きという保護色についた垢
ためらいの終章持たぬキリギリス
三猿のどれかがチョッカイ出してくる
未確認情報の風にさらされる
ささやかなリズム守れと水車小屋

海南市　三宅保州

私の川が濁ってゆく妥協
系協する度に吃水浅くなり
ネクタイを締めて虚像となる私
人間という猛獣を知っている
走っても丸い地球の中のこと

岡山県　小林妻子

ご登城の時間へ慌て仮面つけ
亡父の轍ここで切れてる七年忌
自分史へ髭の自画像書きたがる
本音言う男は棺の中だろう
半分は寝ていてもらいたい会議

羽曳野市　田中透太

満たされて水のやるのを忘れてる
夏帽子恋してならぬ人を恋い
噛み合わぬ話情けが欠けている
サクラサクラまだ友情が続いてる
走らねばならぬ秋風吹きはじめ

鳥取県　土橋　はるお

数え唄今日も元気に竹を踏む
落とした財布に証拠がなくて困っている
葬式の最中にポケットベルが鳴る
野暮な男の飯を永年炊いている
ちょいと腰が曲がって都合よく踊る

西宮市　西口　いわゑ

夕焼雲　夫と歩く河川敷
テレビ消し今日を反すうしています
えんぴつと自問自答する窓辺
コオロギよ忘れることも美学なり
少年は母を美人に描きたがる

鳥取市　小谷　美っ千

今日無事の感謝へ香をたいている
コーヒー碗の口紅そっと拭いておく
よい思い出を重ねて海の絵を描こう
A型で赤い鉛筆手放せぬ
助走路が永遠にある仮の世か

豊中市　吉田　あずき

走馬灯コースを外す知恵も欲し
赤い羽根つけて真面目な顔になる
浮浪者も読書をしてる秋の風
見知らぬ駅のときめきに似る新刊書
太宰読む私も怠惰だが死なぬ

尼崎市　奥山　美智子

いたわって秋の五官を噛みしめる
句読点きっちりつけてある情け
本心を財布の紐が覗かせる
遊びにも熱中せぬと駄目である
他愛ない噂を耳が聞きたがる

岸和田市　岩佐　ダン吉

自由化に案山子ひとことあるらしい
屈辱の日は封印をした日記
ふる里の駅よ風まで味方です
新喜劇みてからそろう歩幅です
退院日めしの看板見て歩き

大阪市　上田　柳影

潔白を根強く固持す萩白し
旅に出る握って死ねぬ金だから
プロセスの中に情けは入れてない
悔い残る一言多き夜の長さ
いくばくもないのに老醜疎まれる

寝屋川市　柴田　英壬子

動く歩道悟空のきんと雲想う
天真らんまん背骨まっすぐ伸びている
みかん色づききっちりと挙式する
まだ在す亡母のお骨に栗おこわ
夕立がざんげ話の腰を折り

岡山県　矢内寿恵子

四隅一つ残しておきます父代り
一言に人生かされて殺されて
一歩控えて身の程を心得る
ささやかな幸せなれど手に余る
つぐないの数だけ背なを曲げて老い

岡山県　千原理瑛

死んだ振り蟬の演技に負けた猫
慢心の男を少し泳がせる
善人の野心なら手を貸そう
妬心から大人のいじめ始まりぬ
長生きをしよう誤解もとけるだろ

八尾市　高杉千歩

母の忌よ家族五人に殖えました
気休めの安定剤が離せない
ジョギングに疲れたらしい影法師
無器用な手つきへ姑のアドバイス
お洒落して神戸枯葉を聴く灯り

吹田市　栗谷春子

馳せ参じましたとやおら秋の風
暑さまた戻れば五体受けて立つ
コーヒーの色じっと見る夏も末
この夏がすぐに恋しいものとなる
幸べえの足音子等はみのがさず

守口市　森川まさお

峠越えるといつか来た町見えてくる
敷石へ座るひとり旅の人
名瀑を遠く眺めて近寄らず
頂上でとても無邪気な顔をする
蝙蝠に似た僧が来る行者道

大阪府　坂口公子

喜びを分けてあしたの温い灯よ
知恵の輪に辟易してる自尊心
煩悩の奥で勝手は許される
朱へ褪せて話題へ遠くいる金魚
苦手から先に退治る箸の先

富田林市　片岡智恵子

結び目にやんわり積る夫婦愛
白魚の指には遠い働く手
逃避行人の情けも風になる
母恋し母のかたちの蝶結び
燻製にされそうたばこ吸う人に

島根県　高野律子

何も彼も忘れるような秋の空
念仏を唱え悪口まだ減らず
肩書の大きい方へ手をつなぐ
兄頓死みんなうらやむ死に模様
七十年生きてドラマは砂の城

竹原市　岩本笑子

行く先のある身を憂いてはならぬ
ボタン付けこれが幸福なんだろう
散歩する犬を待たせて髪を梳き
風の道深い情けを聞き流す

出雲市　久谷まこと

星あかり待ち人はもう戻らない
落葉焚く煙の向う冬の色
下心あるから餌を播いておく
台本に役者根性見せてやる

奈良市　天正千梢

撮らせて下さい羅漢さんにカメラむけ
徳島シャトル波浪警報あまくみて
救命具つける順序はまだ知らず
仕掛人入道雲に乗っている

今治市　越智一水

あいさつは先手を打って丸く生き
肩の力抜けば笑いがふっと出る
母の里甘えるとこと孫が来る
妻も寝たころかと思うひとり旅

十和田市　斉藤劦

祭り馬　欠伸をしてはまた歩き
捩り花　素直に捩れている平和
山は父　昔は侵すものでない
百姓は芸術家だな茄子の艶

唐津市　山口高明

仲秋や男ひとりで埒もない
陸橋で眺める街は他人めき
生疵の絶えぬ息子で頼もしい
無言電話がかかる深夜のノイローゼ

和泉市　西岡洛酔

朝露に善の歩幅は乱れない
自画像にオーデコロン秋を待つ
野心無き明日へ夕焼け赤く燃え
底泳ぐ金魚に秋の深さ見る

松山市　谷真風

大笑いすれば廊下がふりかえり
ちゃいなマーブル遠い思い出近くなる
お宅のお婆さんちゃっかりしていますなと言われ
ホームラン歓喜の拳天を突き

有田市　松井かなめ

玄関にズックがあって夏休み
昼寝も出来ぬ混戦してる市議選挙
盆まいり往きも帰りも土産持ち
捨てようと袋に入れてまたしまい

鳥取県　林露杖

裸婦像の瞳を染めた大夕焼
追い越され取り残されることに馴れ
思い出があるから明日も生きられる
煩悩はバテて食欲だけ盛ん

食欲があるので安堵する微熱
鉛筆の思案に見られた鳩のキス
祥月命日今年も友から来る電話
気温三十七　万歩計に試練のハイキング

高槻市　竹内花代子

夏休み救急箱が軽うなる
減反を強いて文明国と言う
先生も手伝う園児の西瓜割り
寺の鐘遠くで聞いて浄土かな

静岡県　薗田獏沓

感謝する心に争いなどはない
学校が始まり母の荷がおりる
色々なお知恵拝借趣味の友
単車の子帰り安堵のかぎをしめ

岸和田市　清野こう

台風も能登半島へ寄ってゆく
堪忍袋つくろいながら四十年
子の脱線防ぐ母の信号機
待合室　不幸な話に花が咲く

七尾市　松高秀峰

ひもじくても仏の飯は忘れない
自信喪失青空だけが味方かも
髪洗うまだ裏切りは知らぬ髪
揃わないフォークダンスの輪の中に

松江市　竹内寿美子

一人急くきれいな月をふり切って
稲の穂の垂れて返せぬ恩おもう
スーツ着て女きりりと秋深し
ふんふんと素直に聞いていた反旗

大阪市　渡部さと美

俤がよぎり訃報に会う夜明け
上手口真相までの時間帯
落着かぬわけを知ってる鳩時計
虫すだく夜に亡母さん逝ったきり

和歌山市　細川稚代

マイペース崩すと起きる胃酸過多
一日一善孫に教えて恙なし
言うことがいえぬ誤解がとけぬまま
感動のない安穏にある油断

岡山県　松本元江

うつらうつら明日の重さは考えぬ
力説に乗ったとたんに寒くなる
冷蔵庫開けてハテサテ嫁の留守
札入れに重い名刺がはいってる

和歌山県　天満三千代

うぬぼれが男の視野を狭くする
競う気はないがきみなら受けて立つ
同居してしきたり競う嫁姑
困らせる時だけ電話かけてくる

鳥取県　上田俊路

伊丹市　山崎君子

天国で逢いたいなどと彼岸花
無人駅　秋風にのる赤トンボ
長電話　雨がやむまでつづきそう
医者通いのうぜんかづらの下を行く

十和田市　阿部進

ボケた振りしながら敵の裏をかき
花道も油断はできぬ落し穴
追及をかわす策ねる古狸
取っ付きの悪い人だがお人好し

倉敷市　井上富子

御自慢の系図危うし婿養子
女房の手腕で走る火の車
倖せ満載ファミリー旅行のクラクション
防災の日も差なし赤とんぼ

倉吉市　渡辺菩句

屋根でお湯沸くと菅原文太笑う
走り続けて風は息切れしている
下り坂生命線が変ってる
太陽に身を消毒してもらう

米子市　茂理高代

恍惚へ我を重ねる恐怖感
ナースには唯々諾々となる老婆
許された試歩に緑の山が見え
王様の言訳はみなそう思う

米子市　白根ふみ

その昔もてた話はしなさんな
一人居のしじま波音確かなる
波乗りは確かカモメールが届く
島育ち潮の流れに逆らえぬ

守口市　結城君子

お二階の夫におこげをさとされる
松茸の匂いは隣に御座候
柚子の香のにおう弁当嫁自慢
シャネル19お誕生日が同じだけ

豊中市　一瀬福一

角とれた石は流れに逆らわぬ
千代紙に若さがもどる妻の指
極楽も地獄も見せて金を取り
雨乞いに力貸します雨蛙

尼崎市　住谷石舟

肩書きに弱い男の名刺入
あこがれた教師が飲むと泣き上戸
茶の道を継いだ男の座りだこ
肩書きが火中の栗を捨わない

出雲市　竹治ちかし

夢描くだけの絵の具は絶やさない
再会のしあわせ恩師に見る若さ
花咲かすだけの水しか望まない
まだ亡父の足跡がある僕の道

大阪市　塩田新一郎

呑みすぎて一臓一腑腐らせる
大自然法則もあり人もあり
嫁姑に似てるロシアとソビエト
良い嫁ですそやけどそれは表向き

八尾市　吉村一風

産み月の肌まろやかな妻の顔
きれいだと言うたが花の名は知らぬ
花も時期くれば咲くんだ泣くな友
空っぽの心で夢を待っている

大阪府　籾山隆

太陽の真下老人ホーム立つ
穴二つベルトゆるんで退院し
百薬の長は入選したわが句
ざわめきの風を連れてる秋桜

黒石市　相馬一花

万年も乙女のままで水中花
糟糠の妻でも欲しいレオタード
ほろ酔いのくせに酒豪の真似をする
塩からを食べて血圧上げようか

川西市　野村静雄

ライバルと飲む器用さは持ってない
税金が高いと言える仲間入り
お向いも隣も妻が実力者
文楽へ行くご夫婦と立ち話

吹田市　山本希久子

蓑虫も私も揺れる秋の風
降り止まぬ雨はあるまい女道
物心両面忘れ上手になりました
嫁の色我が家も少し若返り

和泉市　岡井やすお

東西があれば南北ある世界
競争を知らず自由へあこがれる
良い試合してもやっぱり負けは負け
フライングのあおりで罰金食う力士

奈良市　米田恭昌

ビタミンA足らぬ苦労の荒れた指
ビタミンが不足で咲いた熱の花
カルシウム不足か妻の低気圧
カラオケで損失補てんしてる下戸

大阪市　橋元美恵

母親はお腹いっぱい食べさせる
子が見てる母のステージ台所
「みんなみな出ていったわね」お父さん
容赦なくテレビが喋る秋の夜

出雲市　石倉芙佐子

友情を女はとかく誤解する
髪ひと筋紅一筆に命こめ
此処へ来た径は知らない菊人形
泣いている小袖は紅の菊づくし

堺市　柿花紀美女

脇役の演技過剰が鼻につき
帰省子に出した浴衣が短すぎ
盆すんで老いには広い部屋となり
ふる里も信号道路が増えて行き

大阪市　冨岡温子

優しい言葉やっぱり待って女です
好きな色やっぱり娘も同じ色
わけ有りの顔が二つも揃て来る
檀家総代寺の話も裏がある

鳥取県　津村八重子

トンボ釣り夕焼雲を追ったまま
文鳥は手にのり世論とく仕種
あの噂やっぱりそうかでもまさか
うれしさが朝の鏡にこぼれてる

島根県　加本義良

異常気象リズムに乗らぬ不整脈
白雲の流れ追うてる未完の絵
夏雲へ七十三の丸を描く
草笛を鳴らせば秋の天高し

岡山県　岩道博友

満員電車に乗る性質が形に合い
コーヒーのお代りをして本音出す
秋播きの適温勤めで日が足りず
人の身に似た人生の落葉焼く

境港市　細木歳栄

お釈迦様横向いててね色即是空
美人ではないがこの花愛らしい
吾亦紅　里では真紅に燃えられぬ
好奇心の塊カア子の一日よ

岡山県　荻野鮫虎狼

山開き神主さんも登山靴
証券も株も私の外に居る
横町に居て新聞の社説欄
責任が無いと判った口軽い

岡山市　井上柳五郎

ノモンハンへ埋めた寄書き戦友戻る
世代交代対話外さる床柱
病みながら友を気遣うたより書き
簡単に酒たばこやめ人もやめ

諫早市　原田メイシュン

労働に遠くサウナに汗ながす
聞き上手忘れも上手で老いていく
ハイハイと女房上手に手綱引く
出しゃばりもせず仲人の聞き上手

倉吉市　淡路ゆり子

何事も上手に忘れ丸く住む
唇を盗みたくなるいい女
横顔に絆の深さ見てしまう
大人には夜の見学よろこばれ

名作を書かれて紙は命持ち
瞑目と居眠りとでは違う背
休日に見るわが街の珍しさ
香を焚き母の来ますを待つ今宵

寝屋川市　堀江光子

空澄みて浮気してますちぎれ雲
セットして一寸浮かれてみたい気も
水割りに肩を抱かれてみる気分
幸せがすぎて人間忘れてる

島根県　藤原鈴江

悔し泣き負けて勝てよとはげまされ
あちこちがきしむ我が家と体温計
うらなりに育って薬がはなされぬ
あいまいな言葉はきらい秋の風

島根県　北川民子

雲行きは悪いが旗は降ろさない
半分の胃袋だって酒は飲む
台風の進路気にする植木鉢
拗ねて見て相手にされぬ年になる

八尾市　山下美津留

千客万来五七五が乱れ出す
夢醒めて結び直した赤い糸
嫁ぎ行くその日の朝の米を研ぐ
友人と便利な言葉にごされる

富田林市　松本今日子

これもまた御縁で菊の新会員
始めてで慣れなれしくも菊の人
お住いを問えば県庁一等地
失保中錆びた鉋を研いでいる

鳥取市　武田帆雀

お天気が待ってくれないコンバイン
割れてから曰く因縁皿が言う
土間に置く胡瓜と虫をきいている
芋のつる昔は昔今はいま

和歌山県　寺田裕美

天職と悟る心に秋稔る
自己満足怠惰の心芽吹き出す
朝毎のみそ汁の味今日の幸
農業不振不正な話にも惹かれ

竹原市　岡本清水

娘二人残して義弟星となる
谷底へ落ちた車が身内とは
男下駄揃えて女ひとり住む
カラオケで唄えないから隅に座す

鳥取県　田村きみ子

ゆうべの答ほしくて仰ぐ昼の月
ためらいの演技にだまされないように
炎天に立つ樹を父として仰ぐ
待つ事に何の疑いなど持たぬ

岡山県　山本玉恵

竹原市　石原淑子

師の遺志を皆で果たした後のうつ
美しき卒寿の母の笑顔かな
気まぐれのあなたを待ってる女郎花
幸福の限界　母とは自分とは

羽咋市　三宅ろ亭

負け雀の一羽しきりに庭伝う
このごろの鬼は笑顔を寄せてくる
新呼吸深呼吸して森に入る
白山の水引いて飲む能登の人

今治市　野村京子

哀しくて鍋磨ききる物語
リンゴは青ぶっきら棒な恋をする
母さんのエプロン句読点がない
一人漕ぐブランコ闇を深くする

河内長野市　井上喜酔

引っ越しの整理へ追われ熱が出る
国宝の如来見上げる喉仏
たっぷりと嫌味を聞かせ電話切れ
敵討ち煙たい姑へ子守させ

八尾市　片上英一

いらっしゃい漢方店の麝香猫
鶏頭はなぜか河内によく似合う
三億円可愛かったなとも思う
踏切を渡る影あり終電車

岡山県　花田たけ志

こっそりとにらんでくれる嬉しい目
雑念に夜半の寝覚めを居座られ
はめられる手を選べない指輪
身に覚えあるので中国不干渉

大阪市　寺井東雲

泣いた数だけ倖せになれますか
還暦でお尻の青が落ちました
一隅を照らす男になりたくて
ボール紙活字が残る再生紙

大阪市　桝本蕗児

夏痩せの妻に荷物は持たされぬ
雨蛙お前を描く青がない
文楽は肩に泪を見せている
悲しさは戦陣訓をまだおぼえ

弘前市　小寺花峯

貴方好みの調味料になる女
透視術覚えた鬼の目が笑う
ワープロの手紙に顔が写らない
風受けた豆腐の角が丸くなる

豊中市　三宅つえ子

寝たきりの父が届ける鈴の音
夏やせの父に仏の姿見る
母の服着て母に会う墓参り
あの土地を持っておればと独り言

寝屋川市　平松かすみ

神様もおろおろしてるカタカナ語
ありがとう六人連れて里がえり
熊楠の唱えたことのエコロジー

西宮市　瀬尾六郎太

油蟬四方八方暑さまき
鉾流し猛暑断ち切る天神さん
この親だ上出来上出来通知表

岸和田市　芳地狸村

紅提灯の情緒に満ちる城下町
だんじりのスリル楽しむ遣り回し
旅に出る思いがつのる病みあがり

鳥取県　谷口次男

一キロがなかなか減らぬ腹を見る
厄介な話と知らず受話器とる
人間が驕っている間は噴火する

大阪市　岡田ふみ

伊那谷の短い夏が惜しまれる
大河ドラマ尊氏好きになる怖さ
旅先の母娘の会話光熱費

出雲市　小玉満江

鎌倉の大仏見上げりゃ夏の雲
切り札は年金がある老いの坂
クーデター三日天下の夢の跡

鳥取県　乾喜与志

ボランティアに凝ってる肩をほぐされる
鈍刀を錆びないように研いでいる
朝市で選り取り見どりする仏花

貝塚市　行天千代

若い気で居ても背中が丸くなる
八十路過ぎてからそれなりに装うて
彼岸花妖婦と言う名が似合いそう

岡山県　池田半仙

不眠症夜半の雨を知らず起き
補聴器は雑音拾うのに困り
トラックにお神輿担ぎ手が足りぬ

河内長野市　植村喜代

その口で油断させても信じない
億単位の話流れる昼下り
私も女心の鬼を暖める

鳥取県　西川和子

試着室如何ですかと鏡言う
如何でしょうちょっとおめかししています
もう一度数え直してから包む

茨木市　堀良江

叱られることわかってて電話する
紀子さまのように手を振りさようなら
相談に寄って悩みを聞かされる

鳥取県　乾　隆風

点滴へいねむりをして姑を看る
枯野からほのぼの母の束ね髪
たそがれる道にほとけの杖拾う

鳥取市　春木圭一郎

冷奴あれば一本軽く飲む
嘘少しまぜて夫婦に明日が来る
億単位不正に慣れて年暮れる

鳥取県　山根八重

手作りを売る店先の赤とんぼ
罪ひとつ消して下さい髪洗う
逢いたくて指輪嵌めたり外したり

出雲市　伊藤寿美

知られては困る話を喋る風
反骨が親のレールをひん曲げる
日本人の三過ぎボクは暇過ぎる

島根県　佐々木芳正

境内の蟬捕りに来る子がいない
伝統の重さへ光る五条袈裟
洗濯は盥が似合う束ね髪

大和都山市　坊農柳弘

写経したその手でハエが打てますか
先に寝た夫の憎いフルムーン
孫三人嬉し忙し七五三

鳥取県　幸家單車

嘘を言う研究鏡でしています
ふる里に錦をかざる大銀杏
案山子までポケットベルを持っている

鳥取市　岩原喬水

敬老の集い童謡なら歌う
電話では叱った母が金送る
執念が熱さ見つめる窯の色

静岡市　安本晃授

墓一基乾いた島に夢を積む
耳もとに過去と未来の風が棲む
漁り火に恋の挽歌か海鳴りか

和歌山県　西口忠雄

今ここで泥をかぶれば済むものを
毒舌家左向いたり右みたり
トンネルを抜けるとカレーが欲しくなる

香川県　木村明人

手ブラで来て土産のほしいゴルバチョフ
アレコレと口を出してる助手の席
気象台と主人は当てになりません

和歌山県　岩崎瑞穂

復元の城は知らない眠る悲話
魂胆が見えすいている献杯で
過疎の里嫁に来る娘は福の神

月参り帰途に食べたい店がある
ときめきも愛も枯れてたフルムーン
老妻はもう顎だけで動かない

大阪市　神保拓生

自動車の洗車がすめば雨になる
下手な字は問うまい心打つ手紙
トリカブト見たくて草花園に行く

鳥取市　美田旋風

歯ごたえのある小言なら噛んで見る
熱下げて氷枕はやせてゆく
遠慮されソフトクリーム汗をかく

鳥取市　前田一枝

我が事のように蔭口つらく聞く
通りゃんせ子の遊び場に子が居ない
笑う日が時々見えるリハビリー

和歌山市　北山好笑

どんな時も氷らぬ港　母の海
口笛で呼んでいたのは月の精
年金にバブルの飛沫降って来る

西宮市　秋元てる

ひらがなの女の部分で君を待つ
悲しいね女は九月の顔を持つ
花占い一人の愛を秘め通す

弘前市　肥後和香子

秋なすを共に食べてる嫁姑
軽重は問わず運命の荷を背負う
京の街　紅殻格子　機の音

大阪市　松永すすむ

九十一歳母の記憶に負けてます
風船をしっかりと持つ肩車
嬉しくてまた寂しくて月仰ぐ

豊中市　辻川慶子

台風が秋の涼風土産にし
金貯めた頃に病気が取りにくる
涼風へ犬も遠吠え忘れてる

大阪市　清水利武

のんびりとねり噛む牛の目がやさし
無責任で困る男の二枚舌
エネルギー燃やす男の夏帽子

出雲市　小白金房子

いねむりも法話の風とありがたい
さつまいも待ってる孫に探り掘り
六十路坂趣味へとペダル軽く踏む

鳥取県　石尾かつ乃

トロ箱で寝てはおれない蛸のセリ
終着の手前で口紅整える
言い訳が解けないままの発車ベル

豊中市　江口明光

振りむいた女の視線もろに受け　島根県　石飛水煙

宿浴衣あてなき街の風に触れ

黄砂降る軍靴で穢した土なるか　鳥取県　黒田くに子

炎えつきて町から消えた流れ星

町角でふり向く癖が一つある

かごめかごめ遠い昔の円舞曲　藤井寺市　中島志洋

石橋を叩いてる間に運が逃げ

健康法教えてくれた友が病み

つまらない芝居している午前様　岸和田市　三輪通彦

病人に告げる嘘なら医師も言う

善し悪しも全て遺伝か血の絆

長生きも罪な気のする大家族　京都市　渡辺圭坊

嵯峨菊を育てて京の秋深し

秋暑し友の柩を送る午後

好景気裏に倒産続く街　豊中市　滝北博史

若い医者に妻母性愛感じてる

妻退院夫婦で般若心経読む

綿菓子が意外な値段七五三

川柳塔鹿野みか月
結成満11周年記念大会

とき　**11月10日**(日)午前9時開場・11時出句締切

ところ　鹿野町立老人福祉センター「しかの和泉荘」
(JR浜村駅下車バス15分)

兼題と選者(各題2句・11時締切)

「息子」　橘高薫風選
「民」　森中恵美子選
「薬」　恒弘衛山選
「青」　金築雨学選
「煮る」　渡辺独歩選
「凄い」　政岡日枝子選
「破る」　門脇かずお選
「時」　森田熊生選

会費　2000円(軽食・発表誌呈)

投句　1000円(**10月31日**消印まで小為替希望)

投句先　〒689−04　鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279
中原諷人方　川柳塔鹿野みか月事務局

主催　川柳塔鹿野みか月

自選集

全山紅葉遺書を書きたくなってくる
天国に核がないとは言い切れぬ
言い訳も厭きてしまった鳩時計
ワルツでも踊ろう柿が熟れている
お静かに虫が求愛しています

波多野五楽庵

秋が来てすっかり約束忘れられ
秋風に夏の噂が消えてゆく
瞼閉じると母なる海が見えて来る
父母の愛が重たい時がある
サービスのつもりが重い荷を持たせ

藤村〆女

胡麻の実が弾けて秋を深くする
賜暇をとり夫婦で稲架組んでいる
お喋りがネタを仕込むとすぐ帰り
真宗の葬儀よ　あんた早よ行かにゃ
蕺草で胸の毒気を抜いてます

久家代仕男

空即是色大文字の灯が赤い
お月さん私存らえ過ぎていませんか
本当の味没骨の中にある
過去には触れず有髪尼の眸がきれい
義経の鎧も見て来た大三島

松川杜的

秋風はそよと病葉よろこばす
老いのパワーで言葉多きを窘める
別荘の門扉　鎖は錆びたまま
モチーフを決める鉛筆削る間に
切瑳琢磨で錆を落とせば底光り

野村太茂津

風穴を二度あけられたのど仏（闘病句）
喉に穴あけたまんまで生かされる
医者さじを投げて元気を出しなさい
シグナルは黄色余生に青はなし
生命線長く闘病まだ続き

有働芳仙

雑念が写経の筆にからみつき
初代が偉大過ぎてあとが続かない
予定があるような無いような旅ごろも
もう一度白紙に戻るすべ探す
焼香の列延々と惜しまれる

本田恵二朗

静一途竿の長さに血が通い
曇り後晴れの涙を溜めている
傘貸して振り向けもせぬ未練雨
てっぺんと思えば寒さ身にしみる
生き抜ける弾み五七五のリズム

水粉千翁

嫁の荷の目立たぬとこに母の愛
嫁入りへ軽四輪で我慢させ
残り香をおいてさっさと嫁にゆき
嫁した子の残り香わびし秋の暮れ
恋という悪魔に娘さらわれる

野田素身郎

老いてなお追い回されている達者
仕事仲間と気が合い会社腰すわる
子の邪魔にならぬ老後の計をたて
生活意欲ガクンと落ちて呆けはじめ
過労死を心配します午前様

金井文秋

おこぜには専守防衛　毒の針
かくしゃくは敬遠呆けは邪魔がられ
石蹴って少年塾の帰り道
腹巻に意地と仕事の虫を飼い
秋風や地蔵の赤いよだれ掛け

月原宵明

若　貴は売らぬなりゆきを見よう
宿敵の家とも知らず聞きあわせ
古希とならざれば六十路を語り得ず
軽蔑の目から同情めく言葉
唇を舐めて尺八いい音色

大矢十郎

米作る汗を悲しくさせないで
しあわせに馴れてしまった風の愚痴
茄子キュウリ癌に効くぞと言うとくれ
捨てるもの何もなかってまた蔵う
捨て犬を抱いた子の目をふり切れず

遠山可住

根来寺の猫のっそりと散歩する
蟷螂の死骸がゆれて秋の蜘蛛
老夫婦悩ます野良の犬と猫
いつまでも子供のような妻の欲
愚痴の無い夫婦惰性を大事にし

児島与呂志

平成の乱メチャクチャでございます
一つ知り一つ忘れるはかなさよ
ふり向けば秋一筋の白い道
思い出の人はあらかた天にいる
欠点はお世辞に弱い人である

工藤甲吉

二十一世紀ビジョンがゆれる高齢化
自然の怒り傍観でなし雲仙岳
黄信号家族の乱れ点滅す
長寿日本その内短命になる予測
高齢者社会としよりの役たんとある

藤井明朗

どこで違ったのかしら青虫のままで
斬られたら白い血を出す青い虫
蒙古斑から青い心を抱くいのち
海のいろをいつも下地に塗っている
地平線に着いたら青い樹になろう

八木千代

長電話　中身は大したことでない
遠慮する躾が出来ていない孫
居眠りが出来る通勤距離を乗る
肩書がないから慌てたりしない
顔立てる言葉は世辞が多すぎる

辻白渓子

肩の凝り知らない妻の肩を見る
たこのこがおますと馴染みのお魚屋
病人に逆らいリンゴ厚くむく
たこ焼きを持ってお午を訪ねてき
三十三回忌忘れていた自責　暑い夏

正本水客

二度の職少うし重い靴を履く
サービスの笑顔なかなか身につかぬ
わたくしも財布も疲れ旅終る
遠慮することも美徳として育ち
髪黒く染めて女を誇張する

小林由多香

思い出しているかのような雨が降る
生きているうちにしておく墓詣り
机の位置くるっと変えて人嫌い
台風が吹きあれている胸の奥
おっとっと変な噂は聞かぬもの

小出智子

ゆっくりも出来んと盃離さない
靴の減りほどに伸びない棒グラフ
負けん気にいまいましいが試歩の杖
八ツ当りやがて自分にはね返り
幻の温もり求めて還る孤児

西田柳宏子

うっとりとさせて静かな風の盆
柳友と飲む酒もよし螢烏賊
渓迫りトロッコ列車夕暮れて
流し合う背のぬくもり感じつつ
ガイドまた違えウロウロするばかり

黒川紫香
（越中八ッ尾）
（魚津交柳宴）
（黒部峡谷）
（宇奈月温泉）
（金沢兼六園）

温かさを大事に白壁長い道
湖面の朝の風が見えます水の色
波止場今日も哀愁の影長くひく
細かく細かく色を重ねて秋を描く
桃の花の明るさゴッホを驚かせ

阿萬萬的
（ユトリロ）
（モネ）
（ピサロ）
（スーラ）

鳥獣戯画いまもいじめは変らない
よくもまあ神の怒りに触れもせず
ガラス戸をすべる雫の流転など
大正生れ怠けることもままならず
新聞の隅まで読んでいる余生

高杉鬼遊

大臣の首にキリトリ線がある
時間調整のジャンボが輪を描き
玄関の大きな壺をのぞきこみ
デパートで男ひきずり回される
ストレスを増やしてゴルフから戻り

河内天笑

富田林市民文化祭

とき **11月3日**（祝）午前11時開場
ところ 富田林市スバルホール
（近鉄南大阪線川西駅下車すぐ）
兼題 「時代」「あこがれ」「素敵」「プラス」「顔色」
選者は、当日出席者の中から決めさせていただきます。
（各題2句・席題なし）
締切 午後1時（欠席投句拝辞）
会費 無料（軽食を用意します）

主催
富田林市教育委員会
後援
富柳会

第33回豊中市民川柳大会

とき **11月23日**（祝）正午開場
ところ 豊中市立中央公民館1階集会室
（阪急宝塚線曽根駅東200m）
おはなし 片岡つとむ氏
席題（当日発表） 友田茶の子選
宿題
「影」 岩井 三窓選
「逆」 春城武庫坊選
「雲」 片岡 湖風選
「岸」 田頭 良子選
「傷」 黒川 紫香選
「朝」 坂本 晴美選
「耳」 住田英比古選
締切 午後1時（各題2句）
会費 1000円（記念品・発表誌進呈）

主催
豊中川柳会

—同人吟

秀句鑑賞

—10月号から

堀端三男

この度、同人吟の秀句鑑賞を命ぜられ、千三百句になんなんとする秀句と対峙した時、この倍以上もある投句の中から、これを選される主幹のご苦労をつくづく感ぜさせられた。全て秀句ばかりであるから、その中から鑑賞する句は、私好みになることはいなめない。何卒ご容赦を願います。

二度の職　判こは小さいほうにする

矢野佳雲

二度の職に付いた人だったら誰にでもある経験。一年半程経験のある小生も、昔を思い出しています。特に役職に付かれた人など感懐が深いのではなかろうか。「小さいほうにする」が生きていると思う。

かくれんぼ母は尻尾を隠さない

松下たつみ

母と子のほほえましい光景が目に浮かぶ。逃げ道を開けて子供を叱る親心が、「頭隠して尻隠さず」とは、似て非なるものであり、親心がひしひしと伝わって来る。

体中のネジをゆるめて母といる

西出楓楽

幾つになっても母程良いものはない。人間無警戒で居られるのは、母と居る時ぐらいだろう。「体中のネジをゆるめて」が面白い。反面、姑と居る時の賢婦人振りが目に浮かぶ。

さりげなく男が米をといでいる

沢田千春

男子厨房に入らずは過去のことで、男女平等が叫ばれ、均等法が施行された昨今では、厨房どころか、男子にさえ育児休暇が云々される世の中である。さりげなくどころかあたりまえのように男が米を研いでいるのである。

ひと呼吸おいて無職と書き終える

藤解静風

私にもこんな時期がありました。飯米百姓をしていたので、職業欄に「農業」と書いて笑われたこともありました。正式書類は勿論のこと、旅行の申込書にさえ職業欄がある。しかし、定退十三年たった今では、ひと呼吸おくどころか堂々？と無職と大書している。

芋粥の頃がロマンは多かった

春木圭一郎

実感です。終戦直後の食糧事情の中では芋粥はご馳走でした。「国のため」「陛下のため」から、子のため、親のため必死に生きた時代です。反面、夢もロマンもありました。お互いに若かったからでしょうか。

本心も後の一つは伏せておく

久谷まこと

切り札は、最後に出すものです。その最後とは、事件の終末か、はたまた逝く時か、人それぞれ異なることと思いますが、何事も余韻を残すことが大切である。

テレビ見ぬ虫も台風知っており

小林妻子

人間諷刺の句。天気予報が発達していない頃は、虫や動物の動きなどで、天変地異の予測をしたと言う。人間が文明に引き回されている時、虫たちは、五官で体感するのだ。

もう強いて生きたいという世でもなし

谷垣史好

人生悟りの句。バブル崩壊、政局不安定と庶民にとっては、楽しい社会とは言えないが、人間長生きすれば、苦労もあるかわり、どんないいことがあるかもわかりません。

にんげんが出来すぎていて出世せず

浜本義美

バランスを崩さぬ真面目さが怖い

岸野あやめ

川柳太平記（162）

川柳の群像

出口夢詩朗

東野大八

「人間、八十余年も生きてみるといろんなことがある。僕の場合など、早くから世の中に出た上、舞台が内地から大陸へ、そしてその間、かつてない戦争という大事件に遭遇しその果ては、祖国の敗戦、わが身も敗亡というような経過で、これをまともに書いたら、中里介山の「大菩薩峠」に匹敵する一大長編になりそうだ。この間、手すさびの川柳は昭和五年に番傘同人になり、関東州大連では番傘川柳社を結成、同人百数十名の参加を得てかなり盛大にやった時代もあった。この頃は一か月二千句も作句した経験があるが、余りにも趣味の多い僕は、句会に出て、何句抜けた、第何位だった、特選賞をもらったなどということについては、さっぱり興味も関心ももたなかった。そんなことから句会も義理で出る程度で、投句など全然その意志がない」（『夢詩朗の本』自家版昭51年刊・序文）

明治26年（一八九三）7月6日福岡県生れ、本名出口高次郎。三人兄弟で、兄と姉がいた。家が小作の百姓というので上の学校も行けず、高小卒業後は講義録で独学、13歳ごろ60キロの米俵も平気で担げる頑健な身体つきから、徴兵検査は甲種合格疑いなしと思い、先手を打って18歳で現役志願、合格して小倉歩兵第14連隊に入隊した。

めでたく兵役をつとめあげ、大正三年20歳で単身上京した。夢詩朗立志伝の始まりだ。その就職第一号は、東京都の芝区役所の臨時雇いで日給50銭。その仕事は種痘調査員。このあと府会議員選挙の運動員となり、顔が知られるようになり、下宿先の主人が区の税務係長だったので、家主組合の書記―やがて一本立ちして自筆の大清相互会の看板を掲げた。

しかし月50円にもなったこの稼業も一年余で辞め、盆で帰省した折、下関の海産物貿易商に入社五年勤めた。将来を見据えた貿易商法の修業というわけで、この体験が大陸での満鉄消費組合で頭角を現わす素地となった。

大正12年の関東大震災後の不況と、折柄の大陸熱の高まりに彼は渡満。関東州大連に上陸第一歩を印した。時に彼29歳。満鉄生活十五年の幕明けである。昭和3年撫順の満鉄消費組合主事で着任した折、地元の邦字新聞『撫順日報』に柳壇（福井天弓選）があり、興募るままに熱心に投句、師匠もないまま「無師坊」と自称したが、選者の天弓が注目、この人の命名で夢詩朗と改める。天弓はこの頃、撫順川柳吟社のリーダーで、柳誌『蛇皮線』を出し、京都の葵吟社と交流があった。この吟社がやがて大阪の『番傘』と合併、夢詩朗はこれが縁で番傘川柳に惹かれ盛んに投句した。

昭和10年、満鉄15年を勤め終ったのと同時に満州生必会社が国策会社として誕生したのを機に、彼は青島を目指し、単独で賢易仲買人として独立した。青島は一八九八年（明治31年）ドイツが支那からの租借地として獲得、十六億マークを投じ、東洋のベルリンとして

営々築き上げた近代都市であった。大正3年の第一次大戦で日本が参戦してこの地を占領、その後の日中戦争で再び日本の手に陥ちた。人口50万、在留邦人2万人、大連と併称される山東半島の海運の要衝として繁栄していた。特にここ青島は中国一の紡績産業の地で、日本系九大紡が進出、加えて雑穀・石炭の輸出港として大連をしのぐ勢いだった。

「青島では面白いように儲けた。その頃、女房子供もいたわけだが、わしが生涯の絶頂期だったよ」と夢詩朗は筆者によく語っていたが、話の通り終戦と同時に、重慶国民軍に引き渡した財産は、一億六千万円の資産評価だったという。

悠々迫らず大悟して強し（敗戦の日）

丸裸よし二十年若返えり

この二句が夢詩朗句帖の終戦吟であった。

「出口夢詩朗氏は、二十三年の在外生活で築いた七千六百万円をすっかり置いて小倉に引き揚げていられる」（『川柳雑誌』昭21・8・1号・柳界情報）。

「なんでこんなコマカイ計算になったんだろうな」と筆者へ苦笑してみせた彼の顔を忘れない。

敗戦引揚げ後の昭和33年愛妻貞代を失っていたが、子供が八人それぞれ成人独立。夢詩朗は、小倉の茅屋で、山本恵都という若い女性の献身的な奉仕をうけながら、豊景書道塾というしがない書道教授を続け、昭和53年6月6日脳溢血で死去した。享年84、妙法端雲院慈温豊景居士。

大連で番傘川柳の芽が育ったのは、昭和4年8月来連した岸本水府の接待に当った宇和川木耳が、昭和12年3月『満州野番傘』を創刊してからだ。ところが昭和13年3月、大連の在来柳誌数誌が合併して『川柳大陸』（石原青竜刀主宰）が発刊されたのに刺戟され、木耳は夢詩朗と合議し、夢詩朗主宰の既存の『大連番傘』と合体し、『川柳大陸』と同じ年月に『満州番傘』を創刊している。この頃の同誌同人の生残りは、現在、番傘同人の奥原雨人ただ一人。

「満州番傘は、大連番傘も立派だったが、この柳誌は、他の柳誌を圧倒するほどの堂々たる番傘系柳人の牙城を誇る柳誌だったが、三年後の昭和16年4月、時局の深刻化す大陸情勢に即応して東亜川柳連盟（大嶋涛明理事長）が結成され、『東亜川柳』誌が発刊された。これは大陸既存の各柳誌のいわば大同団結だったわけだ」（筆者あて雨人書簡）。

「青島へ行っても大連とは商売柄もあり、縁が切れず、特に川柳界にはせっせとパトロンぶりを発揮してカネに糸目をつけなかった。青島でも、川柳の他はなんの趣味もないので出入り商人の社長クラスや、軍の将校連にまで手を広げ、川柳をやらん奴はお出入り禁止。ただしやる奴は一流料亭で芸妓総見の大句会をやったもんだ。このためいつのまにやら百人近くにふえ、青島川柳会をでっちあげたもんだ。大連で満州番傘全満大会をやった折は「初陣のカブトも赤し二十一　水府」の手拭いを特製して全員に配ったもんよ。趣味の川柳ときては、万事徹底して金を使った」とは筆者へのばか話であった。

昭和51年9月北九州平尾台に

ふるさとをおもうまごころここに止め

の夢詩朗句碑のおひろめ川柳会を、川柳大陸同窓会を兼ねて盛大に催し、自家版の夢詩朗句文集『むしろうの本』を全員に配っている。句碑の台石の重さは8トンの銘石。

「いかにも彼らしい大陸的句碑ですな」と参加していた泉淳夫が目を丸くしての言葉が忘れられない。

母のしたとおりついたち十五日　夢詩朗

▼次回は「**光武弦太朗**」

柳籠裏三篇研究（九丁〜十丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

156　**請られて客の来ルのをうるさがり**

佐藤＝前身は吉原の女郎、身請されて新世帯を持ったが、水入らずの生活を乱されるので来客のあることはあまり歓迎できないのであろう。廓に居た時分は、客の来ないのは恥でもあり、辛かったことであったが、現在の心境はまさにその反対であるのが、作者のねらいなのであろう。そうした女心の機微をうがった句と思われる。

女房に成ては客を邪魔にする　藪25

八木＝賛。京伝も遊女を妻にしたそうで、遊女上がりがどのように恥であったのか、別に何ともなかったのか、あるいは自慢だったのか、その辺よくわからぬが、何れにせよ素人の「カミさん」になっては、昔の顔知りの客が来る事は歓迎できまい。

鈴木＝賛。**岡田**＝同。

157　**江戸の清水で飛ぶのは弐百づゝ**

佐藤＝「清水の舞台から飛び下りるつもりで」とは、京都の清水のことであり、大散財をする時の口癖としてよく使われる言葉である。ところで、江戸の清水は上野の山にあり、ここから飛ぶといえば二百を奮発することだとの洒落である。けだし二百とは山下のけころのことか。けころの揚代は、切遊び二百文であったから、単に二百といえば、このけころを意味したのであった。

八木＝けころ、上野広小路山下辺りから浅草へかけて存在した私娼のこと。川柳においては、山下仏店のけころを代表的なものとしている。

七久保＝賛。礎稿のように「けころ」を買って二百の散財をしたのです。

西原＝賛。実際に上野に行って飛び降りてみた。いとも簡単であるが、昔の人はさぞや裾がひらめいたことであろうと思うと、よい花見になったであろう。

鈴木＝賛。けころです。

岡田＝同。

十丁

158　**反物を八彦山ほどつんでおく**

八木＝江戸の呉服屋では三越の前身たる越後屋が断然有名である。八彦山は弥彦山で、越後国西蒲原郡にあり、麓には有名な弥彦神社がある。

本句は、弥彦山で越後屋をきかせた句。越後屋は大変繁盛したので（弥彦）山のように反物を積んであるというのであろう。

七久保＝賛。越後屋と越後の弥彦山と縁語仕立てにしただけの句。
青木＝賛。七久保氏の言われる如く、縁語仕立ての句。
鈴木＝賛。三井八郎右衛門高利は伊勢松坂の出身。いわゆる「江戸店持」の伊勢商人である。
岡田＝同。

159　**切捨にするには高ひ女郎也**

八木＝二代高尾と伊達綱宗の、いわゆる三股の吊るし切りの件と思う。
　主題句は説明の要なしと思うが、身体の目方と同じというような、高い金で請け出した女郎を吊るし切りにするとは勿体ない事だ、の意。

三又はもう堪忍のならぬ所　明三天2
よく振りおったなと舟でむごいこと　天元仁2

西原＝賛。仙台侯と高尾は俗説であるが、余程人口に膾炙したものらしい。
鈴木＝賛。
岡田＝同。

160　**薬湯に人おどかしの刀掛**

八木＝江戸の薬湯は、伊豆、熱海、箱根等から四斗樽に入れ、船で運び、沸かしたものである。また、薬草を煮た薬湯もあり、これは男女混浴であった。当時銭湯に見られた二階の設備はない。衣服棚のあるのは稀で籠を使用した。
　さて句解だが、一つには衣服棚もないような簡略な設備の所に仰々しく人脅かしの刀掛けなんかが置いてある。その不釣り合いの情景を詠んだ。二には薬湯を運ぶのに物騒な山中を通るので、おどしの意味で刀掛けをつけた。
　いずれにしても、刀掛けとは鹿の角のついた頭であろう。
七久保＝礎稿一のように思うが、一考したい。
佐藤＝礎稿で大体分かるが、「鹿の角」のことを刀掛けと表現しただけと考えている。
鈴木＝賛。礎稿の鹿の角のついた頭でよいと思う。それを刀掛けと表現したのでしょう。
岡田＝八丁堀に薬湯あり、ここにだけは刀掛けが設備されていた。八丁堀の同心など、いざ事件というとき、すぐ湯から飛び出し、刀を手にして駈け出さねばならぬ。その用心のため…。江戸でも「江戸七不思議」の一としてここの刀掛けは有名でした。

161　**哥かるた大手をひろげ姑トとり**

八木＝このままでよかろう。素直に鑑賞したい。
七久保＝川柳で歌かるたのものは、大方嫁のかるた上手を詠じた句が多いが、「なにさ、お前などに負けてたまるものか…」とファイト満々に大袈裟な素振りで嫁の前に立ちはだかっているのである。こんな遊戯一つにも嫁と姑の葛藤を垣間見るような気がする。
岩田＝賛。

うたがるた姑かくして火にくべる　傍一40

鈴木＝嫁にとられまいとする姑根性が「大手をひろげ」となった。**岡田**＝同。

京都塔の会　吟行

とき　**11月17日**(日)　午前10時半集合
ところ　地下鉄今出川駅3番出口
行先　相国寺・塔頭・瑞春院（拝観）
　養源院（句会場）
会費　6000円（拝観・食事とも）
兼題　役・読む・主婦

五煙抄

黒川紫香選

花言葉に一輪添えて留守にする　京都市　山海友熙

無理な力を抜けば遠くが見えてくる

庭手入れ遅れて虫が急に増え

下の子には私の好きな嫁が欲し

キッチンは城よ城主の楽しさを　尼崎市　田中薫

後継ぎがなくとも明日の鉋研ぐ

ネクタイをはずしてパパの顔になる

わが恋は角を曲がって行ったきり

消しゴムを上手に使い女翔ぶ

レシートを貰い損ねて切る自腹　鳴門市　八木芳水

雨上り待ってたように電話来る

だめ押しの一矢が引けぬ母でいる

母の振る鈴はひときわ澄んでいる

一日の使い過しの足をもむ

一粒の種にもあった自己主張

雑念が吸い込まれゆく虫の闇　摂津市　木下道子

早耳の妻が駆け出す大バーゲン

船旅の土産が空を飛んでくる

郵便屋さんが素通りをした長い午後

裏切った仲間を気遣うのも仲間　松山市　白石春嶺

作戦を練るコーヒーに味がない

言い勝ってみたが眠れぬ夜を恥じる

踏ん切りがつけば迷ったのが不思議

退院の朝の注射は痛くない

順番でない友の訃に雲駆ける　熊本市　黒田緑

面接のドア押すまでの気が重い

連休に遊びを知らぬ身の置き場

杖曳いて来し方辿るクラス会

恰好の魚をまたも取り逃し

歯車が噛み合うまでの油差し

浜田市　中尾　まゆみ

鈴振って見せよう君に届くなら
少女の頃を呼び起しては日記帳
先生の瞳は蒼い海だろう
真っ白い闇から夢を解き放つ
追伸はせめて笑顔で締めくくり

尼崎市　野瀬　昌子

詳しくは聞かない父の目に涙
胎動を感じて母となる自覚
産声をあげて市民が一人増え
ぜいたくは言うまい父の菜葉服
トローチを持ち歩いてる老いの坂

名古屋市　藤井　高子

それぞれに聞かせてすだく秋の虫
夢の名残りを綴って秋の夜の長さ
心足る日故に鏡晴れている
指切りと呼ぶ体温のある鎖
つまずいた石にはお詫びしておこう

尼崎市　児玉　歌子

屋上の内緒話が飛躍する
目と鼻の先で便利に使われる
ちらちらと上司点数つけている
噴水を背にして別れ話など
締まり屋の財布で余所見などしない

富田林市　池森　子

雑草に学び澄んだ瞳に学ぶ
破れた夢は胸の高さに埋めてある
火祭りの余韻秋風消したがる
海鳴りを逃げて深海魚になった
愛されてとてもやさしい朝のパン

熊本県　大川　幸子

用件の都度声色を変えている
そうねそうねと相槌ばかり打つ
「ゴメンネ、サヨナラ」あっさりした別れ
淋しい時やっぱり空を見てしまう
琴線にふれる名句に酔っている

広島市　流　奈美子

一輪の野菊と温み分かつ瓶
故郷へ飛んでおゆきよ竹とんぼ
潮騒を恋うか魚拓の目がうるむ
賽銭の音人間を浮き彫りに
いい事が続いて少し恐くなる

静岡市　沢田　きん

なんとなく視線へ胸をときめかせ
虹の橋緑の森をひと跨ぎ
ライバルへ女の意地は妥協せず
焼きなすび嫁と茶漬けの昼ごはん
餌を拾い波紋を描く池の鯉

鳥取県　大角正道

松虫の声さわやかに恋をする
幸せに暮らして空の瓶ならぶ
生まれたときから人間は泣いている
門灯が照らす素敵なお客さま
お面かぶって子どものように夢を追う

鳥取県　大角幸代

浜昼顔の小さな海を見にゆこう
彼の文字からやさしさが溢れてる
星の数かぞえていっぽん道辿る
無器用な男の笑顔たのもしい
大きな袋に希望ばかりを詰めている

久留米市　鶴久百万両

秋の樹海へ不倫を一つ捨てにゆく
三日月ほどの良心　赤い羽根を付け
モーツァルトを聴こう聖書を読むまでは
惚ける前には四国遍路の旅に出る
偏差値に触れると肩が凝ってくる

尼崎市　的場十四郎

切り札があるから正面さけている
四捨五入　五入仲間に裏切られ
高らかに歌って調子くずれてる
再起する浜の男に潮満ちる
浜風の甘いロマンにのるカモメ

香川県　川崎ひかり

脇役に所詮はなれぬバラの花
光さえ届かぬ所で咲くスミレ
裏話聞けば親しさ湧いて来る
ライバルの動きが一寸気にかかる

富山県　高畠五月

散歩道いつもの人が来ぬ不安
かたつむり父にそむいて谷を出る
横顔の淋しい父の休肝日
千羽目の鶴の出番がまだこない

鳥取県　西浦小鹿

凍死した魚の涙を知っている
先輩の言葉に棘がみえている
菩提樹の下に小犬と眠りつく
夕暮れにわたしの旗が降りて来る

旭川市　朝倉大柏

作り笑い返すよりない弱味持つ
ゴミだけは隣に負けぬほどに出し
先方も減点法で見てるだろ
焦れている顔に蚊の音まといつき

砂川市　大橋政良

また山へ戻る父子のかたつむり
ふるさとの過疎は駅まで消している
人生いろいろ目なしダルマを一つ買う
櫛の歯の欠けた話を聞かされる.

婆さんの恋人丘の地蔵さん
肩書がつきネクタイを派手にする
急がすな煙草の味が不味くなる
誰よりも待遇のよい妻といる

尼崎市　森安夢之助

叛いてもやがては戻る母の海
音信は風にまかせた放浪記
蟻の列待遇などは考えず
決断にためらいのある曲り角

尼崎市　山本すみ

いい笑顔残しておこう古稀だもの
幸せな風が耳打ちして通る
大の字に寝て明日の句を考える
とりもちに掛かる母さん哀れなり

兵庫県　酒井靖子

もう一人の貴方に触れた日の訣れ
淋しいお方会えば愚痴しか言えないの
独断と偏見時にはそれもいいじゃない
時代の流れ成田離婚もその一つ

和歌山市　田中みね

舶来の松茸買った市場籠
過労死の蟻を見たのはキリギリス
ポケットの石を忘れて寝てしまい
みんないい人で油断をしてしまう

藤井寺市　高田美代子

良縁に父は黙って酒を飲む
約束の小指謀反を考える
噛み合わぬ話どちらも勘違い
横顔が心変りを告げている

河内長野市　柏本靖子

肩が凝る人とさよならして肥える
一番の味方が酌をしてくれる
母さんをまずは味方に僕の恋
ベランダで煙吐いてる男の座

香川県　池内かおり

あこがれの先生がいる部活動
酒の席で撮った一枚武器にされ
井戸端会議の中から貰う五七五
水だけはたしかにうまいふるさとよ

松山市　宮尾みのり

単身赴任別れは覚悟かすみ草
点滴の床で夢みるエアポート
あけすけの喧嘩が温い嫁姑
額から父そっくりに禿げてくる

尼崎市　尾宮弘治

従いて来い後ろ姿の肩が言う
拾われた犬で恩義を忘れない
秋ですよ窓の向こうの雲の私語
孫と見る夢が木馬で揺れている

兵庫県　円増純子

尼崎市　長浜澄子

満点とゆかぬ処遇にトラバーユ
鉄拳を思い出させる父の島
警棒が欠伸している島の昼
借りた本曰く有り気に折ってある

福岡県　井崎ミサ子

失敗を一つ重ねて知恵もつく
一言で心のうずく事もある
民謡を聞いて平静取りもどす
口数の少ない分だけ目がしゃべる

大阪市　勢理客トミ子

タイガース勝って夫の高鼾
名月や地球病んでる荒れている
口止めをする話なら聞きません
おかげさま台風外れた朝のお茶

熊本県　岩切康子

アメダスを信じきれずに水を撒く
休田の雑草嬉しく咲きほこる
畳這う蟻に掃除を強いられる
眠らされ魚は空輸で着く都会

富山市　大西桂子

露草の小径かなしい父母の墓
要領をつかめぬままの西瓜割り
二言目更年期です若い医者
負けておこ地雷はそっと埋めました

富山市　島ひかる

終焉に引くバラ色の幕がある
夜明けまで風と海鳴り聞いている
病む母をユートピアへと誘う亡父
コーヒーの仲間に一人レモンティー

芦屋市　黒田能子

旅に出て少し女を演じてる
冗談でないと気付いて慌ててる
孫が来て暮しにつけるアクセント
職退いた夫の靴が軽くなり

酒田市　永澤裕子

様々なドラマを呑んで茜雲
過去はみな忘れる事に秋の月
人間に戻るピエロの仕舞風呂
代替り四角四面の里の風

岐阜市　渡辺杏村

まつたけの値札眺める余裕でき
新調もお下がりもある七五三
真実はひとつ男は貝になる
新妻が靴音を聞き立ち上がる

大阪市　尾崎黄紅

酔態を詫びた言葉はすぐ忘れ
誓察に用がある日の雨となり
タレントの罪甘やかし甘え過ぎ
長命の僕に長寿の友がいる

伊丹市　小熊江美

つまらぬ意地張って囲いの外にいる
これしきの雨は走らぬ高校生
許したら隣の猫の入りびたり
老犬でドッグフードが大嫌い

和歌山市　堀畑靖子

ハチ公のようにあなたを待っている
ライバルはあなたと名指しされました
助手一人いるなと思う妻の釣り
今度こそやりぬく気ですダイエット

静岡市　柳沢たま

捨て切れぬ帽子昔を語りかけ
天国に続くはるかな虹を見る
茶柱が立って朝から浮かれ気味
風で飛ぶ帽子早くて追いつけず

西宮市　岡本道子

遠景に男おいている未完の絵
ゆがんでるリンゴ愛しく思う時
くしゃみ出て四つ目からは風邪と知り
万華鏡のぞいてうかとだまされる

東予市　小山悠泉

山間で山百合そっと咲いて散る
別れ話ぼんやりと聞く雨の音
残り火をのぞく女の火消つぼ
化粧代妻のパートへ足が出る

尼崎市　佐野六浦

急いでるつもりが足がついてこぬ
虫の良い話の時に来る息子
一泊二日風邪を土産に持ち帰る
廃品へ片目の達磨捨ててある

尼崎市　鈴木良征

歩と銀を握って読みが長くなる
山下りて男は髭を剃りたがる
孫の守りしてからたまり出すつかれ
うっぷんを晴らす空缶見当たらぬ

守口市　森川春子

旅先で土産ばかりが気にかかり
話中ばかりで故障かと思い
絵葉書が旅から帰ってから届き
ディズニーランド予定に入れる夏休み

姫路市　松本一郎

うそーほんと少女の他愛ない会話
童心を夜店に貰う秋祭り
定年後妻に教わることばかり
ミントンの器に紅茶朝の贅

広島市　中村要

正論も年金ほどの軽さなり
買い替えた眼鏡に猫が先ず気づき
バーゲンで酔うてトイレで深呼吸
宿酔の間にすんだクーデター

和歌山市　山口三千子

一泊の旅にも主婦は手を抜けず
結納へ家紋本家で確かめる
掌を離れて毬は自我を出す
親の荷を下ろせば襲う孤独感

和歌山市　玉置当代

雲行きが悪い茶碗を洗う音
受話器持つ手に汗流る昼下がり
紅白のタンスが走る秋日和
お隣に気兼ねしながら秋刀魚焼く

出雲市　原章峰

髪洗う父にやさしい金盥
燃えつきてしまいたい日もある赤信号
亡母の吹く笛は方向指示器かも
六十五歳前進微速くり返す

熊本市　北川一進

タオルにも名前を書いた子沢山
運動会済んで組長やっとすみ
組長になって老人会も知り
石段を孫と数えてやっとこさ

広島市　森田文

見る方がすべった方より痛い顔
くす玉がわれずにみんな口をあけ
働くより他はなかった蟻の私語
盲導犬に挨拶したい気がおこる

米子市　中井ゆき

夕やけのデルタに昔置いて来る
すて切れぬもの押入にためてある
することがあるのに折紙折っている
お茶のみにだれか来ないか雨の午後

佐賀市　古川一徳

聞いてやるだけで効き目のあるベッド
テニオハを変えて噂に尾ひれつく
西方浄土へわたしが先に逝くと決め
悠々自適ポストを覗く癖がつく

米子市　小塩智加恵

昼寝して電話番すら出来ぬ夫
兄嫁と異なる趣味で笑い合う
人様の注いで下さるお茶の味
電線の雀　先生待っている

尼崎市　山田保蔵

宿題はみんな出来たかお父さん
順番とりに病人走るすさまじさ
妻のものばかりが並ぶ棚の上
食事より冷いものと孫娘

唐津市　浜本治幸

ひとまわり小さくなった友見舞う
行く先は告げぬ噂の風を追う
核心に迫れば話題変えてくる
健康を気にして煙草喫ってます

桜井市　小林はつ子

時効にはさせぬ女の記憶力
終章を飾る余白は空けてある
人生は自作自演の風刺劇

出雲市　岸桂子

森は黙って迷う小鳥に宿を貸す
わたくしの背なに当った紙つぶて
赤くなる努力忘れぬ唐辛子

兵庫県　森脇和子

ポケットへ匂い袋も入れて旅
心地よい鼾のリズム宿で聞く
逢うて来た余韻へ走る赤いペン

尼崎市　明壁敏之

盛り場でいつもの香具師がほえている
突然に別れ話を持ってくる
巧妙な口上すぐに効きそうな

京都市　小林英子

大吉に少し油断をしてしまう
フルムーン血圧計が無理と言う
発毛剤効能書を信じよう

貝塚市　池田寿美子

衿もとのボタンを掛けて改まる
年輪のキラリと光るアドバイス
水墨の敷ナフキンにグルメ膳

熊本県　高野宵草

脱皮するように着替えて娘のデート
湯をかければ食える炊事で妻の留守
結納を持って息子についてゆく

尼崎市　吉永伊三郎

日記帳三日坊主で以下余白
シーソーの相手が重い浮世風
一言が過ぎて干される風見鶏

尼崎市　湊修水

安来節バスは出雲にさしかかる
遠まわりしても楢山道に出る
たまさかのふれあい別れがつらくなり

尼崎市　中澤向西

棚作り上だ下だとやかましい
ダンジリの汗がここまで飛んでくる
住み馴れて街では一寸顔がきく

松江市　佐野木みえ

独り言　聞いて下さい水すまし
靴の音　余韻残して遠ざかる
席譲る事に少うし勇気いり

鳥取県　伊吹富恵

こぼれ萩　去りにし人をふと思う
一刻の安らぎ自分史に酔い
思い出が一つずつ減り渦になる

大阪市　亀井円女

年毎に手抜きを詫びる盆供養
アンテナを捨ててごらんよ楽だから
泣かされた判官びいきの甲子園

吹田市　西岡豊

睦まじい夫婦茶碗で朝の粥
風船に孫のほっぺがまるくなる
笑うまで相手になった百面相

和歌山市　森茜

赤ちゃんの目に大空が青く住み
おこぼれを拾う鳩にもいる子分
朝植えた木でこおろぎが鳴いている

大阪市　吉川哲矢

勉強は出来ないけれど優しい子
夏休み本は序文を読んだだけ
児の足の指の間を洗う父

鳥取県　美浦美代子

王様は雑魚の歯ぎしり気付かない
我の強い眉をかくした綿帽子
王様も絵になる時は窮屈だ

寝屋川市　井上すみれ

一人居のテレビの声は大き過ぎ
掃除機に吸わすしかない今日の愚痴
蛙鳴く青田も来年ガレージに

香川県　永峰伽名子

夏休みてんやわんやで日が暮れる
萩焼きの湯呑みにこもる娘の温み
病窓の師が投句へとかりたてる

鳥取県　今本早苗

彼と呼ぶ人をたくさん持っている
ひとりでに大きくなってゆく子ども
数えても数えてもたったこれっぽっち

鳥取県　石谷美恵子

新聞を拾い読みする朝の靴
思い出を一緒に語る靴がある
ほどのよい遠慮ゆかしい人と居る

静岡市　永倉柳華

おいしいと言って料理を食べ残し
いい夢を見よう寝具を干している
愛情を小出しに分けて共白髪

柏市　上鈴木春枝

家計簿へ鉛筆の芯尖らせる
身に覚えあってその後を背なで聞き
お弁当にコロコロ笑うプチトマト

今治市　渡辺南奉

親友の出世を妻に伏せて逢う
行軍をふと思い出す万歩計
有頂天星降る夜はことさらに

願かけに参った寺は修理中
いい話一線おいて聞いてみる
どの橋で別れしようか川の町

出雲市　富田蘭水

口へらず親にさからいとなりの娘
旬はずれ会席膳のみばのよさ
市場籠リンゴの唄を口ずさむ

東大阪市　安永暁子

限界を知ったわたしのエネルギー
せっかちへ落着けという自動ドア
リハビリの恩師へ声がかけられず

島根県　槻谷一葉

蟬の合唱一瞬とまって無の世界
麦茶たく日も僅かなり法師蟬
虫の音が急に拡がる秋がくる

枚方市　森本節子

髪染めて気分転換はかる秋
世の中の渦に歩幅が疲れ出す
コーヒーとパンの朝食馴れました

堺市　船越重子

ひまわりもうなだれていた終戦日
雲隠れしてやりすごす支払日
雷が足踏みはずし落ちて来た

和歌山市　岩本美智子

主導権妻にとられてつつがなし
背のボタン外してくれる人おらず
誕生日花束もろたことがない

河内長野市　大西文次

過ちもすぐに認めた青リンゴ
青空と仲良しだった老母の鍬
転ばぬ先の杖をさがして回り道

岡山県　土居ひでの

強弱の紐で夫婦をつないでる
冗談につけた火種でやけどする
ぜいたくに素肌を夏の浜で焼く

鳥取県　浜田民子

小走りの犬が振り向く散歩道
口下手の息子が手紙とくる見舞
空しさは時間割のない朝がくる

香川県　田中スミエ

予定せぬ家計に義理が割って入り
呼ぶほどに客振り向かず暮れの街
悪いものばかりが欲しい胃の病

香川県　成重放任

ふるさとの夢は美味しい水の中
せせらぎのささやきを聞く土踏まず
潮騒の思い出そっと抱きしめて

静岡市　宇佐美寿美

流れ星老いの願いも聞いて欲し　静岡市　小木久子

お出かけの妻へ洗濯干す夫
寛大におなりと窓の花が言う　羽曳野市　芦田絢子

風鈴と話したくて風送る
ほめ言葉それから肩が凝ってくる
ピンチヒッターと格好つけて使われる　和歌山県　森三枝子

古里の山は大きな声が好き
利口ではないから馬鹿になり切れぬ
赤トンボ案山子の上を行ききする　尼崎市　立谷勇次郎

夢一つ抱いて都会の渦にいる
頑固さが癖字に出てる父の文
魚焼く煙も出せぬ家に住み　池田市　水木博男

夢の無い話ばかりで酔いつぶれ
疲れたと姑には言えぬ里帰り
路地長屋隣もうちの鍵で開く　姫路市　谷清柳

定年の頁めくれば職探し
手相見のお世辞にちょっと救われる
ほろ酔いでひやかしてみる易者の灯　西宮市　菊池トミエ

ぶどう棚食べ放題が無理をする
芋掘ってよろこぶ声の幼稚園
先生は患者待たせて話好き　泉佐野市　真崎浪速子

火と水の干支だが仲の良い夫婦
中元へ暗算妻の消去法
主人と呼ぶまだぎこちない娘の電話　松江市　安食友子

嬌声にワイングラスは逃げだした
言葉じり微震の種になりますよ
きまじめな回転木馬しあわせか　松山市　丹下美津子

杉木立　室生寺の塔ひそと立つ
狸寝入りの耳ぴくぴくといい話
横文字に少々弱い社の彦左　島根県　菅田かつ子

クツワ虫カスタネットを鳴らしてる
夢の中　無色無言の亡母と会い
リラックスせよとは無理な歯科の椅子　静岡市　片平静代

思い出をまだ詰めてある古行李
海水着脱ぐと日焼けがはっきりし
連日の雨で休暇の万歩計

出雲市　島　重昭

途中下車してみたくなる秋の靴
盆の亡母世間話をしてあげる
戦闘準備　朝の髪形変えてみる

池田市　林　すて

涼しさを待った九月も秋淋し
それぞれの生き方のある老い楽し
好きなとこどこでも行ける有難さ

佐賀市　江口　万亀子

サルスベリ夏を知らせて咲きほこり
ポスターのようなリンゴを丸かじり
鼓笛隊ポンポコリンで活気づく

十和田市　阿部　喜久江

ハミングで出掛けて行った万歩計
脱いだ靴見れば躾がよくわかる
動かずに仁王がぐっと睨みつけ

枚方市　中山　おさむ

足切りをされる覚悟の管理職
首位走るチーム解説者が叩く
地酒揃えて故郷が秋を呼んでいる

兵庫県　西井　つや子

もう一つ案山子も増やす良い稔り
天に向く双葉の意地を信じよう
水をやり明日咲くつぼみを数えとく

兵庫県　北川　とみ子

赤鉛筆ばかり減ってく父の汗
騙されていようペン先が喋るまで
特ダネを握った顔で輪に入る

西宮市　平田　香子

髪につけた草の実のわけただされる
吹きすぎて困り切った蟹の泡
招かれざる客と気付いた宴半ば

芦屋市　根来　敬

一匹の虫を殺した　これも罪
なあなあで歩き続けた夫婦道
影法師ついてくるから味方だろう

島根県　松本　聖子

スポーツに国境のない拍手
上弦の月が出ている夜の冷え
残暑です一病そろそろ動きだし

大阪市　森崎　忠禄

片仮名で帰り着けるかされこうべ（シベリア鎮魂記）
国会で欠伸をしてる正直さ
正正堂堂ピンハネと言う消費税

十和田市　小笠原　敏夫

茜雲僕の車を映してる
渓流を歩いて芭蕉気取りでる
発言をしたい会議は眠らない

寝屋川市　宮崎菜月

耳ひとつ口が二つの人もいる
両腕を冷房責めに合う映画
受験生まずは御身を大切に

八尾市　秦正子

ためらいに回転ドアの力瘤
欲望のうずにもまれた補てん株
バスタオル巻いて気取った声を出し

静岡市　大石たき

いい友とつき合う老いの楽しさよ
何となくせわしく過ごす老いの道
年金が増えて仏に礼を言う

静岡市　三浦つね

石灯籠くらしのゆとり見せて立つ
新築の家に泊って寝つかれず
肝心な事を忘れた長電話

福岡県　本田忠男

君が代の歌で日の丸風にあう
再会の異国に燃える陽がきれい
里帰りもてあましてる盆休み

東大阪市　大平太一郎

頑固だが昼寝の父は仏顔
きびきびと父さん朝はリズミカル
お酒よりみな歌に酔う老人会

高槻市　芦田静江

多角経営企業戦士がうろたえる
祇王寺に愛を信じる二人乗り
世渡りの自信吊橋よくゆれる

和歌山市　木村親踏

白足袋にうなじ淋しい喪主の席
あの人も死んでしまった流れ雲
フルムーン旅の間は良い夫婦

新潟県　高野不二

小錦の相手をいつも応援し
はしたまでもうけるような消費税
トライアスロン応援も汗かいている

相生市　中塚礎石

言いにくい言葉が喉を出入りする
院長の回診カルテだけを見る
石仏涙流したあとがある

香川県　工藤吟笑

夕立の宿を貸してる地蔵堂
夕立で一寸息する熱帯夜
幾重もの壁を崩したボスネズミ

岡山県　大石あすなろ

夢一つつかんで少年走り出す
ざわざわと風が伝えて来た噂
つまずいた石に決断せまられる

傾いた旧家を守る鬼瓦
ゴミ捨て場赤とんぼいて安堵する
つまずけば冷たい他人の眼に出会う

岡山県　福原悦子

若しやとも思う日曜日の化粧
とっときのメニューを選ぶ出逢いの日
野心などないが薄紅引いてみる

兵庫県　奥野テル

父さんと同じ考え僕おとな
病院の個室で妻と笑ってる
目をあけてまた一日を生きのびる

鳥取市　大坪天涯

敗戦に流転の人生だった母
スーダラ節遠い日思う走馬灯
通夜の席で聞いた仏の艶話

大阪市　今西静子

義姉からのお酒は遠慮しておこう
お銚子を数えて急に酔っぱらう
片方の下駄だけ石を噛んでいる

鳥取県　鈴木公弘

隅っこで見学してるおふくろさん
雨男ズボン変えても雨が降る
子の声が消えた座敷の夏がゆく

西宮市　牧渕富喜子

ゴシップが隣まで来て匂い出し
闘病記貴重な体書き残し
思い出の日記を焼いて嫁くと決め

岡山県　伏見すみれ

弥次喜多が旅したように旅をする
民謡が上手な妻の弟子でいる
嬉しい日思わずでます河内弁

富田林市　山原昭水

キタキツネ驚きもせずバス眺め
北海道丘陵縫って道は延び
老夫婦　句想は同じ孫の事

熊本県　増田一乗

遠慮して食べると料理味がない
神経痛で行った皆生の湯が溢れ
付き合いへ上手に遠慮使い分け

鳥取県　小西五十鈴

親子旅「よかったなー」と佐田岬
励ましの心身にしむ詩の友
花鋏持てば心の憂さも晴れ

岡山県　後安江山

亡夫の像確かなこころのよりどころ
クロアゲハ誰にも気付かれないように
夏場所のときめき野良まで持ち歩き

兵庫県　倉垣恵美

謙遜を鵜呑みにされた発火点　和歌山市　小倉アサ

秋茄子をもたれて食べる姑と嫁
平等に受けた拳が合致する　静岡市　浅子まつゑ

火砕流人の幸せ押し流し
もう逢えぬ人が忘れたハンカチーフ
但し書付けて妥協を待って居る　岡山県　牧野秀香

やさしさを野菊露草夏草に
コオロギの短い命唄に果て
サーカスを見て来た孫の話す顔　静岡市　中西雅

予報より漁師の予言たしかです
厄年をとっくに過ぎて厄に逢い
絵日記も終りに近い陽やけの子　岡山県　福原辰江

肩先のふるえ一人で噛みしめる
遠慮などせずに帰った千鳥足
束の間の逢う瀬へ光る星二つ　熊本市　遠山夏生

移り気が秋のネクタイ売場でも
出勤簿から演出の幕開く
血が出ないなら傷つけてよいかペン　桜井市　脇本とき

旅心湧かせるような秋の風
これ以上せめても無駄とあきらめる
時々は歯車合わぬ若い娘と　大阪市　清水絹子

お早うお帰り亡姑の声して送り出す
お隣も阪神らしいドアの音
正露丸の世話にもならず子の帰国（イギリス留学）　香川県　田中ふみ

結婚後四年別居の変物よ（医博の息子夫婦）
金貯めて師の紹介でオンタリオ（癌研究所）
医学誌が地球の裏へ定期便　豊中市　田中道胤

伊勢参り土産赤福変りない
額に入れて子の絵を飾る父の部屋
クラシック聴いて見ようか虫の声　堺市　桜井荘次

下心秘めて気さくに来る笑顔
オットットこたえられないコップ酒
二枚目の舌で修羅場を切り抜ける　松江市　松浦登志子

夏終り里の庭から音消える
恋占いハートがでるまでカード切る
見学のコースに組んでる土産店

寝屋川市　豊福路子

雑魚の子は雑魚さのんびり泳ごうよ
マスコット抱いてあしたを考える

香川県　辻上よしみ

嫁に来て家と一緒に古くなり
知らぬ顔されて心の奥が見え

岡山県　森下正子

かんしゃく玉ぐっと掴んで耐えて居る
竹トンボどこまで行ったか日が沈む

岡山県　後安ふさえ

一日を張り切る老人運動会
バス旅行マイクを避ける場所がない

藤井寺市　田中孝子

君なればこそ短詩の旅情味深く
再会の約束もなく風の辻

今治市　越智・青園

針の穴通り夜なべを思いつき
ガス切ってそれから電話長くなり

米子市　木村はるえ

さよならと視野から消えて過去の人
今日もまた敵を増やして昏れて行く

静岡市　増田扶美

避暑期去り宿の主は碁の稽古
水撒きのホース綺麗な虹を見せ

唐津市　入江喜久亨

秋風に追われ笹舟見えかくれ
おじいちゃん眼鏡外した顔がいい

茨木市　藤井正雄

旅立ちは散髪からの日程表
親切は地図を持ち出す交番所

今治市　渡邊伊津志

大声で弱さをカバーしてる肩
新築のドアのノブが錆びている

大阪市　小糸昭子

真夜中の雨は歩道を磨きたて
診察に行った夫を待ちわびる

岡山県　富坂志重

倖せを詰めるふくろに底がない
とっさには返事の出来ぬ孫の数

広島県　森川抜智

角隠しやっぱり角があらわれた
一番よい年賀状は孫の絵だ

豊中市　松岡久留美

石段を登りつめれば母が待つ
石臼で豆ひく母の背のまるさ

香川県　植田チカエ

時折は心の内を星に告げ
目が覚める程にかまれた蚊をつぶす

婿殿は下戸で相手になりませぬ　島根県　武島ちよえ

商戦にまんまと乗った卵の日　唐津市　福島紀一

揚げ花火儚い恋のように消え
どたん場でガム噛んでいる余裕かな　岡山県　江口有一朗

一言が多いばかりに苦労する
一隅を照らす心を磨かねば　羽曳野市　徳山みつこ

子が巣立ち鍵がきしんできた夫婦
じいちゃんは機嫌のよい児を抱きたがり　松江市　浦辺静江

帰郷した家族を囲む月の夜
美しく街道飾る夾竹桃　豊中市　みきわきみ

余生とや夏はノータイ半ズボン
銀行も証券もした依怙贔屓　寝屋川市　北岡波留吉

赤信号にきっちり止る千鳥足
市民講座で充電してる知恵袋　大阪市　喜多佐津乃

地蔵盆腕白な子も踊ってる
石蹴りやお手玉の音覚えてる　鳥取県　山本正光

運動会　練習したのに雨となる
御意見はと言われみんな腕をくみ　島根県　福間博利

平凡の中に自由の幸がある
トンネルをくぐれば旅の暮れ近し　鳥取市　谷口百合子

会える日を暦につけて待っている
退屈をさせない男側にいる　鳥取県　山内芳江

正直に泳ぎ過ぎてる遠回り
人相見の出まかせ信じ悩んでる　和歌山県　上岡正直

マイホームローンすんだら次は墓地
病院の待ち合い室のなじみ顔　藤井寺市　楠昭子

桐一葉　夏ふり返り振り返り
元の名刺離さず持っていて孤独　寝屋川市　太田とし子

旗色が悪い出番に母がいる
ライバルを上司が決める棒グラフ　米子市　服部朗子

手を叩き悦ぶ亡母を思い出す
いましめの切ない波が寄せてくる

兵庫県　玉田三重

車好きローンといつも走っている
何時までも父の面です孫はなし

桜井市　脇本とき

旅心わかせるような秋の風
毎日が別居のような同居して

唐津市　山口ふさ子

三食もテレビに合わす独り者
子の服が小さくなって秋支度

奈良市　米田芳子

ピンボケの道を今だに歩いてる
若貴へ黄色い声の国技館

大阪市　川原章久

着くたびに土産が増えるバスツアー
食うために呆けてる暇なぞあるもんか

唐津市　野崎ハル

さわがしい保育園より国会は
降る雨は同じ所に溜る水

羽曳野市　山本たけし

古里へ名水飲みに墓詣り
訪れれば味噌屋になっていた母校

姫路市　福島姫女

喉乾きうだる残暑に口利けず
品の良い言葉ばかりじゃくたびれる

枚方市　濱田良知

無礼講に乗ったばかりに馬鹿にされ
赤のれんあかの他人の愚痴を聞き

鳥取市　加藤二代

キラキラとわたし恋して翔んでます
青リンゴ恋知ってから赤く炎え

岡山県　杉本伊久栄

佐渡オケサ唄にひかれて北陸路
ちぎれ雲今日も訃報を聞かされる

豊中市　井上直次

胸のバラ後援会では低い腰
おいとまのチャンス電話のベルが鳴る

東大阪市　松山隆

戴いた義理が息子とくいちがい
うまい血をたらふく吸った蚊の惨死

神戸市　岩田信義

おみくじの凶を結んで折れた枝
絵日傘を回して思い出確かめる

大阪市　山北三三三

風吹けばすぐに風鈴喋り出す
神様の絵は流石だと思う虹

大阪市　家村高雄

タクシーに近道教え断わられ
見切りつけ転職商売図に当る

宇部市　中村三良

かんぐりはよそうトマトの笑い声
夜叉の面隠しておてもやん踊る

八戸市　島田昭治

口きかぬ妻のストにはお手を上げ
包み紙しわを伸ばして戦中派

唐津市　野田旭恒

赤とんぼ余命予知して高く翔び
よそゆきの顔に合わせた三面鏡

池田市　木村一笛

足腰はもうあきまへん七十路です
むせび泣く軍歌の中で酔いしおれ

兵庫県　中野とよ子

長いものに巻かれて椅子が一つ出来
初恋がわくわくさせた青春譜

箕面市　岩津ようじ

おもちゃ箱ぶちまけたようソ連邦
ハッとさすジョーク小学生の孫

大阪市　武田昌三

給料は倍増左遷は貯める腹
編み棒の手を休めずに噂聞く

寝屋川市　坂上高栄

趣味が増え余生等とは言えません
隊列が応援席に脱帽する

熊本市　立道善太郎

三部経そこそこにしていい話
三月十日断酒五年の誕生日

島根県　岩田三和

おじいちゃん来たよお祭おこづかい
猿でさえ躾きっちりしているぞ

高知市　桑名知華子

よく笑う母にだんだんなってくる
子育てに母からもらうアドバイス

和歌山市　山田博章

手づかみの子にうまいかと聞いてやり
挙げた手に責任がある多数決

和歌山県　三原三究

冗談が通ぜず妻に叱られる
言葉とはうらはら反旗ひるがえす

鳥取県　橋谷静江

朝寝坊してから先が忙しい
居心地が良いのか野良猫住みついた

姫路市　服部一典

女子差別　女性の方が強いのに
薬指　指輪はずしてデートする

明石市　小川酔月

お父さんカセットテープのお経です
お祭りに孫の浴衣がよくにあい

腹の虫しきりにないて食べる秋　鳥取県　中西智恵子

裏口で何やら決めて幕をあけ　大阪市　乾哲静

損失補てん次は競馬かパチンコや

一日一句老いの生き甲斐覚えけり　静岡市　大村正雄

偶然に視線が合って手信号

つば広の帽子知ってる夏の恋　泉佐野市　大工静子

墓参にも姉かぶりする日和です

くるみ餅兄嫁冷たい目で迎え　藤井寺市　菊地繁男

相談へ分別顔して腕を組み

友情は荒い言葉が温かい　姫路市　山崎治夢

飛行船ゆっくりゆっくり消えて行く

婆さんが三人寄れば孫自慢　姫路市　福本好花

ＪＲ駅のトイレに紙がない

俎板のタクアン一切れ夫つまむ　泉南市　坂根流水

お浄土にお帰りなったと坊主言い

玉葱の小屋も極楽こおろぎが　富田林市　浦田トシヱ

満月が素肌見ている熱帯夜

暑さにもめげずに咲いてるさるすべり　池田市　岡本吉太郎

毛糸玉次は何をと目を細め

鯨保護少し効きすぎ瀬戸内へ　和歌山市　榎原公子

母泣いて父怒り娘が帰らない

止り木でコップ合わせて開いた幕　倉吉市　田中八太郎

難民の哀れを唱え口に酒

割勘に下戸は内心割り切れず　大阪市　平井露芳

ジンベエザメさすが大将供を連れ（海遊館）

三部経三回休んで今終り　静岡市　青柳金吾

千億は0が何個か知らなんだ

マイペース以来ストレス消えました　奈良市　井上大

夏を呼び夏を連れ去る甲子園

海部さんゆめ保養地へ行くまいぞ　羽曳野市　福田悦子

百までは三十年もあると母

運動会カールルイスに似た走り

鳥取市　近藤秋星

逢えるかもしれないきょうは十三夜
生き恥をばらまきながら生きている

橿原市　西本保夫

日の丸の弁当見ると出る軍歌
仲の良い夫婦で年齢の差喰い違い

島根県　兒玉幸子

夏休み終る黒ん坊勢揃い
秋まつり孫を待ってる里の母

島根県　中居武士

塩味でグルメ甲乙つけてゆき
ちちははの墓で縁談肚を決め

唐津市　山門幸夫

現世をひと目見せたい散った戦友
気負い過ぎリタイアロ惜しゴール前

鳥取市　谷口侑里

螢には電池が何処に孫が聞く
思い出の亡母は若くて美しい

鳥取県　久野野草

家計簿の補てん年金当てにされ
真夜中に落ちてる財布拾わない

唐津市　山下剛司

結納で嫁ぐときまり淋しさよ
祝福を受ける娘のはれやかさ

岡山県　平田たけよ

たのもしい言葉に長生きしたくなる
婆ちゃんが達者で世話をやきすぎる

唐津市文化祭参加

川柳塔唐津支部9周年大会

とき　11月17日(日)午前10時開場・11時20分開会
投句締切　11時50分

ところ　唐津市東城内「城内閣」

おはなし　西田柳宏子氏

兼題　(各題二句)
「袖」　浜本ちよ選
「泡」　河内天笑選
「歌う」　古川日曜選
「OL」　山口高明選
「カード」　樋渡義一選
「英雄」　黒川紫香選
「九」　田口虹汀選

会費　2000円(昼食・大会誌呈)

連絡先　久保正敏　☎0955-73-2471
仁部四郎　☎0955-73-2262

主催　川柳塔唐津支部

—水煙抄

秀句鑑賞

—10月号から

政岡日枝子

コンチキチン高層ビルの谷間より

木下道子

つんとすましこんだ高層ビル街の何所の辻から聞こえてくるのか、コンコンチキチキコンチキチン。お祭り好き人間がこの中にまぎれこんで踊っています。きっと明日への生きる糧となっているのでしょう。

売り声は竿の長さほど響き

勢理客　トミ子

『物干し竿！さおだけ！』

『きんぎょーえ！金魚！』

この独特の呼び声に、ついて歩いた遠い日が思い出されると言って郷愁にひたるのは、私の勝手であって、今を一生懸命生きている人の姿を思うのが本当だろう。

選手よりファンが燃えてるタイガース

井上　大

そうなんです。何年か前、私の街でも六甲おろしが吹きあれたことがあります。この句もファンの私たちが主人公になっているところが気に入りました。

柔らかいタッチに老母が満たされる

服部朗子

これからは、老いと闘っていかねばならぬ人がどんどんふえてくる。やさしい言葉、親切な態度、老人の身になって考えてあげる。おとしよりへの無言の感謝が目に見えるようです。

笑ってるうちに逃げ道ふさがれる

朝倉大柏

笑うことすら忘れて人の道をふさいだりする人は、淋しい人生を送るんでしょうね。だって笑うことは大切な事だし、楽しい事ですもの。新しい道を探す旅の始まりだと思うことにいたしましょう。

よく化けた後で虚しくなるピエロ

池森子

今までにもピエロにはたくさん出逢った。私だって捨て身になってピエロを演じたことも……。だが、ピエロになったからこそ、丸く治まったことも。ピエロに泪は似合わない。明日はいっそう華やかなピエロになりましょう。

子の傷の訳は聞かないことにする

山田博章

目に見える手足の傷ではない。傷の句も今までに相当詠まれているが、子の傷に青春の疼きが見えたからです。そしてその時代を通りこしてきた私たちもまた、その青春の憂愁の中に痛むものを持っていたからにほかなりません。自分だけが生涯、その傷の痛みを思い出すのです。青春のロマンが内蔵されている句。

結論がまだ出ぬ梨の皮をむく

浜田民子

結論が出るまでの沈黙の刻。その重苦しさを破るように、女は白い指で梨をむいていく。出してほしくない結論かも知れぬ。薄く薄く、そして、ゆっくりと梨の皮はむかれていく。秋の夜は長く、沈黙は深い。

言いかえす言葉を溜める喉仏

松本一郎

喉仏であろうと、みぞおちであろうと、言葉を溜めると硬くなるそうです。硬くなるということは、健康上よくありません。溜めないで呑んでしまって、気の流れに沿って身体の外に出してやりましょう。そうすれば人を許せるようになりますよ。

句評リレー

七・八・九月号から

小池しげお
河内月子
小林妻子
阿部柳太

山の幸　女に別な顔があり

松下たつみ

しげお　女の別な顔、上五の山の幸で一息入れて読んでみたり、海と山、男と女の顔。軽率な句評をすると作者に申し訳ないので、皆さんへ回すことにする。

月子　女も旨いものが大好き、それに旅へ出るとなおさら。「別な顔があり」を具体的な言葉にされたらよかったのでは。車社会の今では山の上でも鯛のお造りで飲めますね。

妻子　山の幸と別な顔、関係がなさすぎます。別な顔は男こそ家庭、会社と毎日使い分けていますよ。ただ、山の幸がひっかかります。この句は、原点から発想の誤りだと思う。

柳太　山の幸という大きなものと、女の別の顔とは女性の繊細さを示しているものと見ますが、いまひとつ具体性に欠けているようで、残念だと思います。

しげお　みなさんのおっしゃるとおり、もう少し何かがあればと思います。

月子　「山の幸」は山菜のことでしょうか。だとすれば受けとり方も変ってきますが、やはり句は相手に通じなければダメなので折角、句が生れても、他人様に愛される句にしたいものです。

妻子　この句「男に別な顔」にしたら、あんなお方にこんなところがなどと想いも広がってゆくし、男はみんな別な顔を持っているもので実感句となって普通の川柳になります。「女に別な顔」だったので、取り上げられたものと思います。

柳太　みなさんの評も、相撲で申せばいま一歩の踏み込みが足らないというところですね。しかしながら〝山の幸〟と〝女の別な顔〟の着想は、たいへん優れたものを持っており、これからの作者に期待を大きくかけたいと思います。

影法師　今日は私の前を行く

小谷仙山

しげお　影法師は前になったり、後になったり、横になったりするが、師の影を踏まずと後ろの影が多い中で、今日の私は翔んでいる。私より先に影の私が駈けて行く。

月子　「影法師」を私は奥様と思ったのですが、やはりご自分の影ですか。だとするとしげおさんのおっしゃるとおりに前にも後ろにも横にもなりますので、少しぼやけた句になりましたね。私の前で何かをしてくれたら面白いのですが。

妻子　この句はきっちりと説明していますね。毎日のくらしの中では、こんな気持ちの日もありますが、下五「前を行く」でなしに、今少し言葉を選る必要があるのではないでしょうか。影法師などとうまい言葉を使いなが

らイマイチという感じ。

柳太　影法師といえば、常に後ろにあるものときめがちですが、前でみたとは成程と感じ入りました。人間の曖昧さの中にひそむ意外さというよりも、一種の人生への厳しさを教えられました。

しげお　月子さんのおっしゃる奥様、妻とした場合の影法師も面白い。下五の「前を行く」とぼやかしてあるのも、影法師だからでしょう。

月子　文字の使い方にも留意したいものですね。「私」よりも、平仮名の「わたし」がよかったのでは。作者はご自分にとてもきびしい一面を持っておられるように感じました。

妻子　三人の方が立派な句と評され、私ひとり納得がいかぬ句と思っていても、それは想いの相違と不勉強もさることながら、意外性はもっと外のところにあると思います。

柳太　作品の鑑賞は、それぞれ違いがあって当然です。

失礼ですが人が転ぶと面白い

亀井円女

しげお　失礼ですがと言いきってあるのが面白い。人が転ぶのは多分、軽い失敗でしょう。軽みが効いて上五の話し言葉と、下五に人間味が出ている。完敗の場合は失礼すぎる。

月子　たのしい句ですね。人間の本音でしょうし、転んでからどうするのだろうとその先を考えてしまう私ですが、少しでしゃ焼きでしょうか。

妻子　人が転ぶ状態は、とても幅広いものです。子供が転ぶのは毎日ですが、大人が転ぶのは面白い転びなど余りないものです。倒産したりするのもその一部ですし、台所で目の回るほど忙しい主婦が転ぶなどは面白いのでしょうか。

柳太　〝悲劇は喜劇に通ず〟とありますが、上五の「失礼ですが」と切り出したあたり、句全体をソフトにしていて好感が持てます。作者の手腕を高く評価いたします。

しげお　軽みがあって、とてもたのしい川柳ですね。

月子　ちょっとした失敗でしょうから余り深く考えぬことにします。私も時々転ぶのできっと誰かに面白がられているでしょう。

妻子　柳太さんに言われてみると、川柳ってこんなものかとも思います。人間は口先は上手ばかり並べても、想いの本音はせせら笑っているものですね。柳太先輩に敬服。

柳太　真の人間性を深く直視する句が最近少なくなりつつあります。そのような中で、読みびとをして思わず自分を振り返らす力をこの作品は持っております。月子、妻子さんのおっしゃるとおり、もう少し作風に新味を加えれば、なお一段の光彩を放つ句になると思います。次に生れてくる作品を心待ちにしております。

煩悩や飛天に白き脹ら脛

鷲見章

しげお　女の色気、年をとっても気だけは若い私も、飛び付いてしまいました。好きな女性のとっても白いふくらはぎが、煩悩を一掃してくれました。飛天が句を引立てています。

月子　さすがに男性の句ですね。でも年齢的な感覚も、うちの息子たちの彼女も今流行のミニスカートなどで、「飛天に」の「に」が「の」ではいけませんか。

妻子　貪瞋痴心身を悩ます三毒なれど、人間飛天でなくても、男の夏の目を楽しませてくれるものは沢山ありますが、さてまとめてみると物にならないものです。この句、耕花

さんにでも聞かせてあげたい。どこかで聞いたようではあるが、さすがに上手い句。

柳太　信者のすべては、煩悩の集りと申してよいでしょう。真っ白な御足だけでなく、胸もとや襟足にも、信者の心を乱す要素を仏さまは見せておられますが、〝飛天のふくらはぎ〟とは恐れ入りました。

しげお　煩悩という課題吟が出れば、おそらく秀句に上るでしょう。女性のすらっとした長い足、ミニスカートになればなおさら悩ましい。「に」と「の」とのことは、どうでしょう。原句でもいいのではないでしょうか。

月子　しげおさんに桶突いて申し訳ありませんが、この場合は、「に」より「の」の方が適切ではないでしょうか。リズムのよい句ですね。

妻子　こんな面白い句は、出来たら目を見はるものですね。見習いたいものです。

柳太　飛天の周りには、多くの仏さまが上下においでのことと思われます。そのような情景の中での〝飛天の脹ら脛〟とすれば、「に」より「の」の方が視野が広まり、より豊かなものになると思いますが、如何でしょう。川柳を通じて、仏さまの仲間になれる、これがほんとうに私の好きな句の一つであります。

裏道でいくど拾った哲学書

流　奈美子

しげお　悟りの人生句。エリートでもないし、無学でもないが、学歴はない。体験から生まれた哲学、まとめ方が好きです。句調が気にならない。

月子　生きるための哲学なら、どなたでもお持ちと存じますが、この句の「哲学書」は少々重たいように感じます。私は柔らかい表現が好きな方なのでゴメン。

妻子　最近の川柳ではこんな句風の川柳が肩を並べていますが、作者を全く知らない者が句評する場合は、ただ一般論しか書けない。いろいろと上手に評をしておられるが、作者自身がそんなに沢山の想いで作句したのではないと思う。

柳太　裏道というのも暗いし、哲学書がより重く暗いと感じさせます。両者のうちどちらか、明るくリズミカルのものがほしかったですね。

しげお　なるほど「哲学書」は少し重たいに同感です。悟りの句として読ませていただいたので、明るさ暗さまで気にしなかった。

月子　五・七・五とお行儀よく並んではいますが、やはり発展性に欠けるところがあるので措しいですね。雑詠の場合、自分の句を作られた方がいいでしょう。

妻子　皆さん「哲学書」は重いという評ですね。私は重いのか硬いのか分かりません。また、裏道でそんなにたびたびそのようなものを拾う理由が分かりかねます。

柳太　私の重いと申したのは、哲学書の本自体の重さではなく、哲学書の文字からくる重圧感です。この哲学書とは、私は人生哲学と解してよいと思います。とすれば、この作品は人生への悟りの句であると高く評価をいたします。

戻り橋　女はすっと鬼になる

安藤　寿美子

しげお　帰る道すがら一瞬鬼になった女心をきれいに表現している。「戻り橋」「すっと」はさすが。予想しなかった出来事だったのでしょう。

月子　何かがあって鬼になったのでしょうか。いろいろなシーンを想像しましたが、私は「すっと」は鬼にも蛇にも天女にもなれな

いので、少し時間をください。

妻子　句調に何のこだわりもありません。歯切れのよい言葉を並べたこんな句をいつも見せられますが、「女は」と言う表現は、全体の女像になります。女全部が鬼にはならないと思う。「テニオハ」の問題ではないですか。

柳太　戻り橋は未練橋と申しますが、その未練が変じて鬼となるにしては、月子さんの申されるように、もう少し三味線でいう間の手がほしかったですね。川柳にはいつの場合でも、間が必要だと思います。

しげお　柳太さんのおっしゃるとおり未練橋ですね。だから女は鬼になることがある。すっと鬼になったところに、川柳味があるように思いますが…。

月子　未練橋ならもう少し女のやさしさが伝わる句にしてほしかったと思います。それとも変り身の早い人でしょうか。妻子さんの「テニオハ」にも同感。

妻子　鬼になってもまだ後を追う男もおりますが、この句はやっぱり組立てがおかしい。倦怠期なら鬼にもなるでしょうし、未練橋なら橋の上でもつれ合っているでしょう。

柳太　一幅の芝居絵をこの作品から想像をさせ、男女の織りなす綾まで繰り広げる魅力を持っています。それがこの句の生命の表現だと美しくみたいですね。

針箱の前に座ると海が風ぐ

小野克枝

しげお　針刺しよりも、この場合はやはり針箱、いつも女の身近にあって繕うたり縫い上げたり、家事・育児それに夫の世話まで、妻・母・女としての役目を十分果たした安堵感かと視野を広げさせる。

月子　ボタンを付けるか、ゴムひもを取り替えるくらいの私の針箱は大変気の毒ですが、克枝さんのお針箱は幸せですね。きっと分身かも知れません。下五がよく効いています。

妻子　何も私らの言う言葉はありません。こんな句が作れたらと思うだけ。何もかも知りつくしての先輩の句、ただただうまい。

柳太　今の若い日本の娘たちに見せたい作品ですね。ソ連の共産党の解体、国内での株式補てん問題など、忘れさせる力を作品は持っています。ただし針箱に時代を感じるのは、私ひとりかも知れませんね。もっと新しいものをというのは、欲でしょうか。

しげお　お針箱は幸せ、女の分身、とてもいいですね。下五が効いていて、時代感が気にならないのは齢だからでしょうか。

月子　外国の針箱のことはよく知りませんが、パッチワークししゅうなど、今でも女性の手仕事として世界のあちこちで盛んなので針箱は立派に生きてると思います。これから先もきっと。

妻子　女の希望とは裏腹に、現実はきびしいものですね。

柳太　明治・大正・昭和・平成との四世代を生き抜いてこられた母には、風ぐ日のあまりにも少なかったことを、いまは亡き母の姿を思い出し、悔いております。今は座ることすら少ない日々となって椅子となり、座ることに耐えてきた女の姿を針箱で喜びを象徴されたあたり、女性作家ならではと思いました。

「くすの木」第3回川柳大会

とき　11月7日（木）午後1時締切

ところ　摂津市総合福祉会館

宿題　「木」　奥山　晴生選
「仲よし」　西田柳宏子選
「時事雑詠」　三川　美佐選
「雑詠」　森中恵美子選

会費　1000円（合同句集・記念品呈）

銀河系

河内天笑選

和歌山市　桜井千秀

むき出しに言うて信用してもらう
眼鏡はずして読めて来た下心
好き嫌い抑えストレス溜めている

奈良市　井上大

蟬だけが生きてるような炎天下
自家菜園中味に自信ない西瓜
補てんにもピンからキリがあるリスト

富田林市　藤田泰子

負けそうで心の鬼と手を結ぶ
戯れの接吻も良し紙コップ

米子市　八木千代

いいのかしらわたし一人のエレベーター
太郎とは他人のままで死ぬつもり

羽曳野市　徳山みつこ

高砂やお色直しもほどほどに
モスクワも永田もファジー秋の風

和歌山市　後藤正子

葡萄棚みている遠い日があふれて
言い切ってからの坂道だと思う

和歌山市　堀端三男

九月の浜辺麦わら帽が埋まってる
さよならの四文字に想い込めている

和歌山市　古久保和子

看板のようにブランド着て歩く
真っ白な点字本から虹を読む

寝屋川市　宮尾あいき

老いの部屋うぬぼれ鏡おいてある
しまい風呂のんびりおしと虫の声

和泉市　中川楓

デュエットの夫の泥はかぶっとく
風上の父を越えたは背丈だけ

羽曳野市　吉川寿美

やんわりと妻に歯止めをかけられる
暗誦番号ほどの情につながれる

和歌山市　木本朱夏

三枚にわたしをおろす秋の刑
バス待っている間に謀叛心消える

鳥取県　土橋はるお

エッチな写真入れた財布を子が覗く
よく動く男でいさみ足もある

青森市　工藤甲吉

失礼なことをズケズケ　リポーター
喪の家の前もねぶたはラッセラー

静岡市　小木久子

スペアキー預けてあなた信じます
見つめられ少しどきどきしてしまう

姫路市　丁坪サワ子

年金で上手に遊ぶおとしより
そこまでは甘くなかった自己嫌悪

箕面市　岩津ようじ

年寄りを看る年よりが先に逝き
都合のよい誤解　訂正せずにおく

大阪市　亀井円女

Gパンのはけぬお腹がうらめしい
お亡母さん貰いましたよ無料パス

鳥取市　岩原喬水

聞こえない筈だが咳が返事する
遠慮などしない女が食減らす

豊中市　田中正坊

起承転結　告別式で打つコンマ
ひこうきのビラを拾ったことがある

京都市　松川杜的

アンパンが紙の袋を恋しがる
フルムーン湖畔の宿に決めました

羽曳野市　芦田絢子

向日葵をミニにするから陽が怒る
スニーカー　ナップザックのフルムーン

寝屋川市　江口度

学校へ行きたくなった夏休み
満月も映してみせる甲子園

茨木市　堀　良江
天下り当り前だというように

松山市　谷　真風
敬老の日だ恍惚でいようかな

岡山県　小林　妻子
この川もわたしも流れ続けてる

鳥取県　石谷　美恵子
遠慮したことへ意外な風が吹く

今治市　月原　宵明
気晴らしに女　洗濯機を回す

和歌山市　内芝　登志代
思いきり翔んだ女の羽根が折れ

松江市　竹内　寿美子
驟雨くるテトラポットにわたくしに

和歌山市　山川　克子
昼の月あの諍いは何だった

鳥取県　西浦　小鹿
残されたコップの底に嘘が見え

米子市　金山　夕子
ボチボチと死んだふりして策を練る

河内長野市　植村　喜代
同窓会みんな薬を出して飲み

米子市　沢田　千春
古い帽子だけれどかぶれば楽しくて

米子市　林　荒介
穴を掘り十年先を考える

砂川市　大橋　政良
てのひらに超一流の火の匂い

広島市　流　奈美子
漫画文字すこし脱線する時間

西宮市　奥田　みつ子
大河滔々おんなじ水は流れ来ず

八尾市　高杉　千歩
目を閉じてファジーな風と枯野道

岡山県　松本　元江
ゆっくりと彩をうつして季はめぐる

寝屋川市　堀江　光子
一枚のカードにあった落し穴

藤井寺市　高田　美代子
一泊二日妻がちょいちょい家出する

鳥取県　江原　とみお
どこの国へ行っても覗く裏通り

堺市　山本　半銭
夕闇は後へもどれぬ暗さだな

米子市　小塩　智加恵
行く先に早回りする犬が居る

今治市　渡辺　南奉
決断が鈍い男であたたかい

寝屋川市　稲葉　冬葉
子離れが出来てシナリオ書き換える

和歌山県　三原　三究
ばつ悪さ大阪弁で切り抜ける

宇部市　中村　三良
アドリブは苦手律義な猿回し

今治市　矢野　佳雲
作り笑いしてストレスを貯めている

出雲市　板垣　夢酔
養蜂のように祭りを追う露店

兵庫県　倉垣　恵美
亡夫よ遺品の牛を売りました

唐津市　福島　紀一
昼の月声をかけたくなってくる

熊本県　立道　善太郎
チンプンカンプンでも有難いけさころも

鳥取県　美浦　美代子
王様に雑魚の歯ぎしり届かない

鳥取市　小谷　美っ千
鉛筆を削ることからはじまった

大阪市　渡部　さと美
動物の世界の自然死がまぶし

米子市　中井　ゆき
伎芸天の火は美しい手にあった

奈良市　米田　恭昌
親譲り瀬戸際までの怠け癖

大阪市　稲本　凡子
この胸に捕虜のくらしが遠のかぬ

岡山県　池田　半仙
青信号でも安全を確かめる

箕面市　椎江　清芳
海女の指真珠をはめたことがない

八尾市　片上　英一
エコール・ド・パリ展秋の風はこぶ

豊中市　安藤　寿美子
遊び方知らない夫をもてあまし

静岡市　青柳金吾
スタイルはどうであろうとこの達者

川西市　松本ただし
空き瓶のように転がりニュース聞く

熊本市　遠山夏生
面取れば守銭奴 株屋 銀行屋

倉吉市　渡辺菩句
バケツの海からぶんぶんを助け出す

大阪府　籾山隆
平成に尾上縫という女傑

羽曳野市　福原悦子
勿体ないと思うが許すビールかけ

鳥取県　西原艶子
ぼろぼろになってこの世にしがみつき

鳥取市　武田帆雀
足二本投げて女房の旅話

兵庫県　遠山可住
秋の風ああ冷房を放たれる

鳥取県　上田俊路
義理返しさっぱり縁が遠くなる

岡山県　福原辰江
楽しさ満載鈍行で余生行き

兵庫県　酒井靖子
どっしりと構えてグチぬ鬼瓦

弘前市　村田善保
忠告の言葉を一つ温める

唐津市　筒井朴竜
盛り上がる曳山お旅所のビデオ撮り

大阪市　藤田頂留子
歳月に流してもらうわだかまり

枚方市　山崎彩子
美術館ツアーの客の閑の声

唐津市　山口高明
喚問はすまい藪から蛇が出る

西宮市　西口いわゑ
影法師に背のびするなと叱られる

七尾市　松高秀峰
余白には本音を吐いた一句添え

宝塚市　丸山よし津
カタカナの野菜は苦手煮含める

鳥取県　大角幸代
消化不良でビールまで嚙んでいる

寝屋川市　平松かすみ
手帖持つ癖が続いていて達者

唐津市　仁部四郎
まばたきを時計の方がしたのかな

岸和田市　植山武助
子がなくて夫婦の会話子供めく

香川県　辻上よしみ
手の中の小さい倖せいつまでも

熊本県　高野宵草
見学をされている手がまたとちり

倉敷市　田辺炎六
台風が近づき動かない金魚

名古屋市　藤井高子
過剰包装されて届いた玉手箱

和歌山市　田中みね
モナリザの笑みに秘め事見透かされ

唐津市　野田旭恒
頂上を極める石にかじりつく

東大阪市　今岡貞人
一病を抱いて世間が見えてくる

堺市　猪子れい
保守の波三日天下のクーデター

香川県　木村明人
息子盗る嫁をせっせとさがしてる

唐津市　山口ふさ子
匂いだけくれてお隣バーベキュー

京都市　山本規不風
生涯の月給ローンの家にかけ

鳥取県　谷口次男
真実を言えば友情こわれそう

和歌山市　松崎幸子
タンポポも噂も風に乗りやすい

唐津市　野崎ハル
誰も来ぬ盆は仏と水入らず

倉吉市　最上和枝
唇を嚙めば闘志が目を覚ます

和歌山市　青枝鉄治
雲つかむ話の中にあるロマン

兵庫県　北川とみ子
追い風にすなおに乗って行く噂

唐津市　浜本ちよ
日本の醤油世界の味を決め

茨木市　藤井　正雄

損得の損には尾ひれついてくる

寝屋川市　岸野　あやめ

本当は阿呆　肝っ玉女将さん

弘前市　真喜内　實

おはようの大声にまた叱咤され

倉敷市　井上　富子

恋人のノックを待っているワイン

香川県　川崎　ひかり

巣立ちゆくヒナを拍手で送り出す

和歌山県　西口　忠雄

きっかけはお尻を向けただけのこと

大阪市　津守　柳伸

独り住居へ松たけのお裾分け

大阪市　桝本　蕗児

老人の恋には薔薇の刺がある

有田市　松井　かなめ

河川改修鮎も鰻も住みにくい

岸和田市　三輪　通彦

成人式をお盆にすます過疎の村

大阪市　尾崎　黄紅

米寿まで死ねぬ規約の米寿会

寝屋川市　太田　とし子

フレッシュな装い後家になってから

和歌山市　田中　輝子

親離れ子離れつづく鍵の束

米子市　林　瑞枝

晩秋の背中で竹の爆ぜる音

尼崎市　春城　武庫坊

気分転換激辛カレー食べてみる

岡山県　矢内　寿恵子

ミスひとつ女だからは許されぬ

静岡市　沢田　きん

古着また出してはしまう終戦日

大阪市　塩田　新一郎

何いろに染めてみようか古希の秋

出雲市　富田　蘭水

人肌を恋うるが勇気もってない

大阪市　板東　倫子

忘れ傘貰いに行って飲み直し

守口市　森川　まさお

行列の前に大きな人がいる

尼崎市　住谷　石舟

いっぱしの病人さんで検査漬け

唐津市　久保　正敏

イントロが長くて女アカンベー

岡山県　伏見　すみれ

お墓だけ残しふるさと遠くなり

大阪市　井上　白峰

輪の外に別な自分の顔がある

鳥取県　伊吹　富恵

明日に向き今日のエラーにこだわらぬ

兵庫県　玉田　三重

輪をかけた噂ばなしが走りだす

旭川市　朝倉　大柏

呼び捨てにされてひととき若返り

静岡市　永倉　柳華

新聞は読むが忘れる癖がある

唐津市　山門　幸夫

元帥も大将も女将には負けた

弘前市　波多野　五楽庵

ヘッドホーン世界の音が騒がしい

出雲市　竹治　ちかし

まだ答出せず四十の坂を行く

藤井寺市　菊地　繁男

迎え火の煙の先で蛾が踊り

広島市　中村　要

妻の泣くドラマ夫が茶を入れる

米子市　茂理　高代

子の迎えバラ千本に代えがたし

和歌山市　堀畑　靖子

木もれ陽のやさしさが好き君が好き

和歌山市　福本　英子

熱っぽく斜め横からくる視線

兵庫県　奥野　テル

美しい言葉を満たす母の壺

大阪市　川原　章久

渋くとも待てば熟柿となる夫婦

鳥取市　谷口　侑里

伝言板いらいら待った字が尖り

▼投句は、川柳塔用箋またはハガキに**3句**、毎月**15日**までに川柳塔社事務所へお送りください。

女性コーナー

黄香の花

小出智子選

動物園過去を拾いに行ってくる　松原市　佐藤　奏月

百日紅姉の病も癒えはじめ

名月や母に電話がしたくなる　島根県　松本　文子

鍋を焦がして哀しみを見つづける

わたくしのけじめに包丁研いでいる

手鏡にまだ美しくなる野心

出る幕を待ってる皺を誤魔化して　鳥取県　小西五十鈴

髪を梳く胸のしこりの解けるまで　松江市　浦辺　静江

八年目柿には青い実がたわわ　姫路市　福本　好花

萩こぼれはじめて消えてゆく自信　鳥取県　久野　野草

色々あってわたしを解剖しています　富田林市　藤田　泰子

玉葱をむいて証の見えぬまま　和歌山市　西山　幸

旅の味しっかり舌におぼえさす　和歌山市　木本　朱夏

ふる里に向ってラッパ吹いている　貝塚市　池田寿美子

クーラーを止めたら虫が鳴いている　堺　市　高橋千万子

たかが古稀夢も見たいし翔びもする　兵庫県　中野とよ子

水鏡ゆれて明日が定まらぬ　和歌山市　山口三千子

花火の街を泣いてそれから夏嫌い　大阪市　亀井　円女

疲れかな上手な嘘がつけません　米子市　寺沢みど里

富田林市　池　森子

大阪市　西出　楓楽

恋に似た余白に秋が溶けてゆく　和歌山市　後藤　正子

すんだ事笑い話に出来ました　和泉市　中川　楓

等身大の鏡に写す恥ばかり　藤井寺市　高田美代子

気晴らしに芙容蟹でも作ろうか　羽曳野市　芦田　絢子

自分に嘘をつかないでいたい夜　大阪市　鈴木　節子

吾が魔性なげいてみても彼岸花　出雲市　石倉芙佐子

老夫婦多忙懐古の誘いなど　尼崎市　春城　年代

真心を尽くせば萩の花こぼる　兵庫県　倉垣　恵美

虹をたすように口紅引いてみる　名古屋市　藤井　高子

句読点ひとりよがりはほどほどに　堺　市　桜沢あか里

老いかかる二人に花が絶やせない　大阪市　渡部さと美

鬼になるカード一枚離さない　松江市　竹内すみこ

終の部屋どれも未完のものばかり　西宮市　林　はつ絵

一枚のカードも持たず無事くらす　大阪市　本間満津子

負けたこと認めたくない秋なすび　茨木市　堀　良江

サイクルを子犬ごときに崩される　大阪市　山田　妙子

大正生まれの女自由の絵そらごと　和歌山市　福本　英子

アルバムのアバンチュールに苦笑する　松江市　安食　友子

白旗をあげて積荷を軽くする　宝塚市　丸山よし津

老醜を互いに許し茶がうまい　大阪市　上江洌勝子

明日の命思わず花の種を穫る　西宮市　奥田みつ子

やさしさを辿ればにぎり飯の塩　米子市　政岡日枝子

踏み迷うことは覚悟の芒原　寝屋川市　堀江　光子

思い出にすとんとはまる夕茜　岡山県　山本　玉恵

励まし合う友とぶらんこ漕いでいる　和歌山市　田中　輝子

六十路坂軽いつづらも重くなる　豊中市　辻川　慶子
身の内を吹く秋風とふたりぼっち　西宮市　西口いわゑ
金婚式夫婦で染めた色を見せ　寝屋川市　井上すみれ
ハンカチを買っただけの秋でした　大阪市　橋本　美恵
別人のような夫の影も好き　京都市　山海　友熙
鬼灯の熟れる頃には逢えるだろ　米子市　茂理　高代
正確に刻む夫の腹時計　堺　市　宮本かりん
アクセルを踏んで女も強くなる　和歌山市　古久保和子
お付合い一線二線引きながら　神戸市　能津　さち
泣きぐせが取れない母のお針箱　和歌山市　堀畑　靖子
マニキュアを吹いてときめくものがある　西宮市　門谷たず子
波瀾万丈と思ってたのは自分だけ　吹田市　栗谷　春子
ただ一人歩くに惜しい萩の道　枚方市　森本　節子
雷の太鼓に追われペダル踏む　岡山県　富坂　志重
一郎の初着を孫に取っておく　米子市　新　正子
旅先の母娘の会話世帯じみ　大阪市　岡田　ふみ
聞き耳を立てると神の声がする　和歌山市　桜井　千秀
子につけがまわらぬように四苦八苦　寝屋川市　豊福　路子
合鍵が合うから夢を追いすぎる　富田林市　片岡智恵子
風呂敷いっぱい程の知恵持ち歩く　米子市　林　瑞枝
お供えに美味しいことも付加え　寝屋川市　平松かすみ
追憶が夕べの風に乗ってくる　岡山県　千原　理瑛
二畝の畑に母は夢を蒔き　羽曳野市　福田　悦子
真っ白いエプロンちゃんと子を躾け　和歌山市　内芝登志代
スカートが足にさわやか秋になる　寝屋川市　宮崎　菜月

鉛筆があなたの名前だけ覚え　鳥取市　小谷美っ千
来年の夏も踊っているだろう　堺　市　山本　半銭
移り香を部屋に残して娘が巣立ち　和歌山市　田中　みね
おはじきのように錠剤数えてる　出雲市　園山多賀子
書き替えが出来るエンピツいつも持つ　大阪市　神夏磯典子
旧仮名で力を貸してくれる母　柏　市　上鈴木春枝
真ん中に母が座った誕生日　姫路市　丁坪サワ子
嫁った娘の便りを待っているポスト　和歌山市　玉置　当代
秋風に誘われているバスツアー　有田市　生馬芙美子
成り行きに任せることも処世術　大阪市　津守　柳伸
秋めいてやっと落ち着く紅の彩　和歌山県　小倉　アサ
新婚の中に一組フルムーン　守口市　結城　君子
風呂敷へ秋を包んで母が来る　岡山県　土居ひでの

ゴシックの**一句目**、動物園には子供達との思い出は沢山落ちている。わが子を巣立たせて夫婦きりの生活を実感する作者の、やれやれというより一入寂しい秋。**二句目**、ありふれた着想ながら「名月や」によって句を引き立たせた。月に母を想う、その母が健在なことは掛替えのない幸せなこと。**三句目**、包丁を研いでけじめとするとはきっぱりとした作者の心意気。明け暮れを大切にしている証。**四句目**、女は何歳になっても女である。この場合の「野心」という大袈裟さがこの句のポイント。**五句目**、何とも開き直った表現ながら嫌味がなく、人柄を感じさせる。前句と同様、女性には少なくなったと言われるユーモアのある楽しい句を作られた。

次回（1月号）から選者の交替により左記の投句先に変わります。

◇

投句先　〒683　米子市花園町14　八　木　千　代

ひみつさろん

カンスカケタカ

佐藤奏月

私の故郷は、熊本の片田舎である。大阪へ出て来て、かれこれ三十年になろうと言うのに、いまだに大阪の喧騒には馴染めない。

六月の某日、A子さんに誘われ、女性四人で紫陽花を観に行った時のことである。私の外は、大阪生れの大阪育ち、都会っ子である。

当日天気予報は雨、曇天を見上げ、傘を持って出かける。十一時過ぎ、目的地、河内長野の「茶花の里」に着く。天気予報は外れて薄日が差し、樹々の緑が素晴らしく美しい。

お抹茶を頂き、一息入れる。「紫陽花谷」へ向かうべくお茶席を立つ。その時である。突然、頭上から「カンスカケタカ」と、時鳥が鳴きだしたのである。まるで私達を歓迎するかのように。

故郷では、時鳥の鳴き方を「カンスカケタカ」と聞く。「カンス」とは「缶子」のことである。この時期、昼時になると「ああ時鳥が鳴いてるよ。お茶をかけたか」と、母によく言われたものである。

ふいに、A子さんが「これ本物かしら、テープじゃないの」。「まさか」。目を凝らして見ても緑は深く、鳥の姿は見当らない。人間達の思惑を余所に、「カンスカケタカ、カンスカケタカ」と、谷間に響く声は正しく本物である。故郷でも時鳥の姿を見ることはまれであったことも同時に思い出していた。

紫陽花は、杉木立の坂道がだらだらとつづく中に、慎ましやかに咲いていた。

うれしかったこと

永田俊子

うれしかったことと言えば、私事になって恐縮ですが二つあります。それは、外地から引揚げの時と川柳塔賞を頂いた時です。もとの満州国新京で終戦を迎え、翌年引揚げるまでじっと身をひそめ、隣組同士で助け合って暮した一年、そして幾度か銃声を聞きながら、雨が降れば水びたしの無蓋車に座ることも出来ず、傘をさしてしゃがみ、身をよせ合ったことなど、敗戦の痛みをいやと言うほど味わいました。

肩に食いこむリュックを背負って、引揚げの貨物船の狭い急な板梯子を上った時、上の方から船員さんが「ご苦労さんでした」と言って引き上げてもらった手の温みとありがたさに思わず涙がこぼれました。「ああ、これで日本へ帰れる。生きていてよかった」と、この時の感激は忘れることができません。戦後、外地で暮した時の言い知れぬ不安や今までの疲れがどっと出て気がゆるみ、座りこんでしまったのです。

その後、永らえて今日に至り、川柳のご縁により先生方や皆様のおかげと全くの幸運で思いがけなく川柳塔賞まで頂いた時は、これまた天にも上るくらいうれしく、夢なら醒めるなよと願ったことでした。一地方の小人数の句会に永年浸っていた井の中の蛙が大海を知り、毎月の柳誌に目を見張っている次第で、川柳のご縁のありがたさを思い、川柳を続けていてよかったと思っています。そして二つの大きな喜びを与えて下さった神様へ深い感謝を捧げたいと思います。

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (11)

橘高薫風

年改まり路郎数え年40歳の『川柳雑誌』は奥付に大正十六年一月一日発行とあるが昭和二年になったのだ。年号までが変ったのである。その年頭の路郎の筆「遊戯以上」には次のように真摯な内容のくだけた一文がある。

「芸術の道を踏み外すものが二つある。それは猥褻と技巧だ。そのうちでも技巧の方が一層悪い」。トルストイの日記にこのように書いてあるんだ。これを読んだ僕は一応は感心したが、川柳家として其の外にもう一つ増やして三つにしたいのだ。君は何を増やすと思う。それは「遊戯衝動」だ。解ったかね。これをよせて三つにするんだ。勿論川柳は僕にとって芸術なんだから「芸術の道を云々」の文字を「川柳の道を云々」に取り換えて言って見るとこうなる。

「川柳の道を踏み外すものが三つある。それは猥褻と技巧と遊戯衝動だ。そのうちでも遊戯衝動が一層悪い」。どうだ、面白いだろう。猥褻が川柳を毒することはいうまでもない話であって、今も昔も問題とするまでもなかろう。

次に技巧だが、これは大いに論ずるだけのものはあるが、これは他日詳しく話すとして至極簡単に話すに止めておこう。技巧は無技巧の技巧まで行かなければ駄目だ。意識してする程度の技巧は結局トルストイの惧れる技巧だ。初心者は技巧の練習ということさえ学ばねばならないのだから仕方がないさ。万葉と古今と新古今とを並べて見たって技巧が必ずしも芸術的価値を高めるというものではないということが理解出来るだろう。

いよいよ僕の言わんとする「遊戯衝動」だがね。僕の川柳は芸術であり遊戯以上なんだ。

だから芸術衝動によるものでなければならないという異見を持っている。これは僕の異見というよりも、当然そうあるべきものだから深く説明するまでもなかろう。ところが、遊戯衝動によってのみ作句している作家の方が多数なんだから情けない話さ。そして彼等は自分達の句が遊戯衝動の句であるということすらも考えて見た事がないのだから頗ぶる滑稽な話なんだ。僕等が川柳は詩だと言えば彼等もまた同じように詩だと言っているんだが、右の始末だから、詩とは何んぞやと聞かれたら参ってしまう口なんだ。しかし、中には正直なのがいて、「私は芸術家ではありません。随って私達の作る川柳が芸術であるとは思っていません。けれども川柳が芸術とやら言うものだったら儲けものであります。」というのも真っ直すぎて滑稽さ。芸術衝動なくして生れる芸術があってたまるものですか。

そうではないかね、君。

僕が川柳を社会に認めさせるための『川柳雑誌』を出した時に、川柳の社会化なんてと嗤った連中じゃないか。

世の中って妙なものさ。主義も主張もないと、賑やかそうな処へ首を突っ込んでゆくからね。もともと彼等も同じ川柳の流れを汲んでいるのだから、おかしな態度をしたからとて憎めない僕ではあるが、もっと遊戯気分を棄てて本真剣になって従いて来なくては駄目だ。

これで大体は解ったろう。解ったら君もへんてこな享楽派の句なんか止して、ほんとの川柳の道にいそしむことだ。芸術は何んと言っても精進あるのみだからね。

もう帰るのかね。じゃ又来たまえ。

勝つ

上田柳影選

負けて勝つコツも教えて嫁がせる　寿恵子
言い勝って一人さみしい膳につく　美子
勘違いしないで勝ったのは私　狸村
父を越えても勝ったとは思わない　富喜子
負けて勝つことも覚えて米を研ぐ　諷云児
弁護士をつけても勝つと限らない　清芳
金バッジ勝ちとるまでの低姿勢　通彦
カレンダー阪神が勝った日の丸印　杜的
欠茶碗美食に勝る幸を盛る　白峰
お隣に勝ちたい蟻の列に入る　正子
勝つことに慣れ人間を見失う　南奉
自らを裁く鏡に無い勝ち目　アサ
勝つことの苦しさを知るダルマの目　重人
日銭追う男は体で勝負する　ひでの
汗淋漓勝者は多く語らない　章
本当の勝利者庶民かもしれぬ　圭一郎
ちょっとだけ泣いた女に負けました　螢
ライバルに勝つネクタイの色を選る　はるお
病に勝つためしっかり食べている　典子
言い勝って眠れぬ夜を持て余す　彩子
よっ程の自信鼻差で勝ちつづけ　度
金星の波乱歓声と溜め息と　洛酔

勝因はまさに努力という戦　みね
足音でもう勝ち負けを覚られる　しげお
勝ち負けは念頭にない蝸牛　富恵
妻に勝つなど考えたことがない　佳雲
勝算満満余裕のふところ手　愛論
足袋脱いで第二の勝負する女　豊
言い勝ってただむなしさが残る老い　道胤
好敵へ勝ちたい夢を抱いた汗　和子
譲ることおぼえてからの勝ちいくさ　よし津
負けて勝つことを教えてくれた亡母　倫子
勝訴手に長い道のり噛みしめる　寿美
勝ちはみな姑にゆずっている平和　辰江
負けて勝つ黒字日本は平和です　勝美
勝つだけのニュース信じた日の不覚　杏村
負けて勝つ母の優しい片えくぼ　規不風
佳
勝敗の外で静かな風に会う　文子
負けて勝つ母は黙って鍋磨く　玉恵
勝って来て干場で踊るユニホーム　京子
誘惑に勝って淋しい女傘　希久子
勝算がついた男の爪楊枝　鉄治
人
勝ち負けの無い人生で日日好日　たず子
地
長寿法聞けばいつでも負けてます　千歩
天
ひたすらに勝つと信じた芋の蔓　吐田公一
軸
宮仕え勝つにも序列考える

見学

西原艶子選

見学がどれだけ役に立ったやら　抜智
先生の声がやさしい参観日　重人
ヤジウマになり見学の列にいる　緑良
生きすぎて社会見学まだ足りぬ　ふさ子
貰うものもろて見学すぐ帰り　三男
見学をして諦めたマイホーム　倫子
見学後静かな暮し揺れている　公子
見学の造幣局で眠くなる　規不風
見学で一味違う酒もらう　シマ子
温泉で何を見学する心算　新一郎
見学のハンドマイクが騒がしい　しげお
見学はカタログばかりもろてくる　薫
見学の女しゃべってばかりいる　蕗児
見学へ錆びた脳みそ研ぎに行く　富恵
見学は二の次　撮ってばかりいる　忠雄
見学で子を見直した頑張ろう　太一郎
ロボットの動く工場へ目を見張り　新造
見学はしても手の出ぬマイホーム　サワ子
見学という名で消化する予算　正敏
自信無い子の手もあがる参観日　白峰
税金を払い都庁舎見て歩く　螢
見学の裸婦像ばかり夢に出る　公弘

見学はほどほどにして酌む地酒　鉄治
見学にジゲの訛りで答えている　はるお
事後対策ばかり見学する政治　寿恵子
見学のはずがこってりしごかれる　諷云児
レポートを書く見学だから見逃せぬ　勝美
見学で老いの脳波を入れ替える　大柏
見学の目に焼付いた核の影　高夫
見学した五百羅漢に父がいた　京子
見学へ一寸すましたイヤリング　和子
見学のコースにとってある余白　ちかし
見学に法話もあった福祉バス　豊
ハイテクの見学夢をふくらます　旋風
見学に思わぬ知識貰いうけ　芳水
見学の眼が冴える好きな道　たつみ
見学に読めない文字をほめている　とし子

佳

木登りが下手で見学だけにする　雄々
見学の人が来るから光らせる　たず子
見学の卵ひよこに脱皮する　アサ
見学を嫌う無口な漆塗り　公一
見学はみな合点の顔をする　雪明

人

見学の一つ憶えの知恵で買い　可住

地

見学で摑んだ藁は離さない　多賀子

天

見学者だから核心衝いてくる　三宅保州

軸

緊張をほぐす見学者の笑い

ツアー

淡路ゆり子選

ガイドの旗ばかり見て来たフルムーン　公一
カラオケも稽古しましたバスツアー　富恵
パックツアー結局何を見たかしら　やすお
新しいわたしを見つけたツアーです　恵美
贅沢に馴れ切っているツアー客　理瑛
ツアー旅行添乗員にある誤算　勝美
研修という名のツアーで羽根のばす　恭昌
きょうの客ガイド泣かせのバスツアー　よし津
積み立てたツアーで京の雨にぬれ　悠泉
ハイミスがツアーで恋を稔らせる　ふさ子
残り火を燃やすツアーの旅枕　虹汀
ツアーを組んで梨狩りに来ませんか　公弘
梨狩りのツアーへ食事抜いて行く　正子
バスツアーバックミラーが曇ってる　重昭
猫います日帰りツアー選ってます　良江
どこででもおくれる人がいるツアー　杏村
ツアーにも利息しっかりついている　次男
海外ツアー終えて畳とそばの味　希久子

隆

血と汗の開拓みちをバスで行く　シマ子
三日目にそれぞれ自我も出たツアー　京子
楢山のツアーの中にいる私　智加恵
三途の川ツアーがあれば下見する　死土産なぞとツアー組んでいる　弘朗
ツアー馴れ身回り品も軽くする　忠男
ツアーまた蟹の値段をかき乱す　夢酔
いらだちを押えてツアーの群れといる　愛論
御一行様と大きく面映ゆし　あずき
墓参りも兼ねてツアーに参加する　杜的
まだ生きるつもりツアー貯金する　文子
海外ツアーに目標がありミシン踏む　静子
商魂は霊園予約のバスツアー　倫子
団体のツアー羊の群れに似て　保州
老妻を杖とも頼みバスツアー　紀一
古の歴史に触れるバスツアー　高栄
良妻も賢母も捨てたバスツアー　鉄治
ツアーで行く旅がきらいな山頭火　正敏
いい女に逢えそうツアー予約する　螢

佳

日本人の品位問われているツアー　有一朗
芋掘りのツアーが街で人気です　正子
バスツアーこんなにみんな歌が好き　三男
バスツアー此処も癒着の土産店　正敏
ツアーの夜仮面外して飲みあかす　彩子

人

数珠の手が一日せわし京ツアー　明水

地

瓦一枚寄進ツアーを和ませる　たつみ

天

十字架の海が見たくて来たツアー　小西雄々

軸

しあわせを拾って歩く遍路ツアー

初歩教室

題 ― 借りる

辻　白渓子

今月の題「借りる」は、着想の範囲が広く作りやすかったように思いますが、明るい句が少なかったのが残念です。題の関係で仕方がないことと思いますが、あえて明るい句を作るように挑戦するのも、勉強ではないでしょうか。

借りて来たご恩忘れてすみません　善太郎
（手土産を提げ借りたもの返しに来）

借り物に合う服がない太りすぎ　章　久
（借りたいが姉のサイズが小さすぎ）

借りやすいムードがなぜかある人で　哲　矢
（借りやすいムードを善人持っている）

しきたりで迷って祖母の知恵借りる　静　子
（町内のしきたり祖母の知恵を借り）

借りるだけ借りて野となれ山となれ　治　夢
（踏み倒す気で借りていた訳でない）

知恵借りに行ってない知恵しぼられる　洋
（知恵借りに行く無駄足を繰返す）

ゆきづまりやっぱり老母の知恵借りる　ひかり
（年寄りの知恵を借りてる行きづまり）

客が来て裏で隣りに茶を借りる　忠　男
（お隣の新茶を借りた不意の客）

借りた本返すに耐えぬ手垢あり　幸　夫
（借りた本表紙を拭いて返しとく）

ほめられて借りて来たとはよう言わず　志　重
（借りている衣装と知らずほめておく）

知恵を借り的を外して矢も折る　三　重
（借りた知恵通りに的に当らない）

新世帯親から借りると決めており　一　乗
（生活費親から遠慮せず借りる）

校長を借りもの競走入れてある　隆
（校長を借りて走らすプログラム）

借りた家移る時には鳥に聞け　タ　ミ
（鳥が軒借りて空屋に巣を作る）

借りるまで低い頭が後は反り　辰　男
（借りるのに頭を低くした演技）

借りた本返す日迄に読み切れず　姫　女
（本借りて返す期日がとうに過ぎ）

色直し借りたにしてはよく似合い　晋
（借り着だがぴったりと合う色直し）

孫からの借金倍の利子がつき　ト　キ
（高い利子承知で孫の貯金借り）

借り上手人の心が見え隠れ　太一郎
（おだてたり泣き事言うた借り上手）

借りた金さいそくされて腹を立て　マサヱ
（金借りていたのが催促されてばれ）

借りるだけ借りて返す気などは無い　義　男
（借りるのはうまいが中々返さない）

隣同志醤油借りたり貸せもする　侑　里
（ベル押して隣　醤油借りにくる）

親友の借りる車で事故起し　幟
（親友に車を借りて事故に合う）

借り物の知恵言いわけに立往生　金　吾
（借りる時の知恵悪友に頼り切る）

寺参り茶店で借りる竹の杖　ますみ
（杖借りて寺へ土産屋距離があり）

老いてなお人の情を借りて住む　すみれ
（路地奥で福祉の情け借りて生き）

借りに行く話は夫婦でなすり合い　好　花
（借りに行く使いを夫婦ゆずり合い）

俄か雨ママの店から傘借りる　春　風
（顔の効くお店でママの傘を借り）

借りる身を貸す身になって恩に着る　高　栄
（借りる身になって気易く用立てる）

この金は借りぬと決めたふところ手　敬
（判押してまでは借りたくないお金）

身に合わぬモーニング借りて席連ね　繁　男
（モーニング借り窮屈な席に居る）

すみません一寸お電話拝借と　秀　香
（拝借の電話でデート打ち合わせ）

難問に九十翁に知恵借りる　ふさ子
（年寄りの知恵借り恥を掻かず済む）
頂戴のお流れ知恵も借るつもり　保夫
（お流れをもらうついでに知恵を借り）
柏手を打って神にも借りをする　一枝
（願い事叶って神に借りが出来）
義理人情借りて返えして丸く生き　とし子
（借り貸しをきっちり守り姉妹）
借りてでも座ってみたい蓮の花　ひかる
（蓮の花一度は借りて座りたい）
神様に借りた命をもてあそぶ　清柳
（神様に借りた命を鍛えあげ）
同窓会借りた百円思い出し　博章
（煙草代借りたまんまのクラス会）
借り物レースが縁でゴールイン　富喜子
（借り物のレースが縁と言う夫婦）
駅前の放置自転車無断借り　君江
（鍵のない放置自転車一寸借り）
借ることが上手で背中丸くなり　知華子
（借り上手背中をいつも丸くする）
借りた物返す気はなし知らぬ顔　よしみ
（借りたまま済ます気話題すぐそらす）
借りに来た一万円が言い出せず　和枝
（一万円ぐらいと借りる方が思う）
借金をしてまで飲んでる碌でなし　高雄
（借金で飲めるお酒はたかが知れ）

豪邸も借り家も同じ秋の虫　志華子
（豪邸とおんなじ虫を聞く借家）
借衣装で式場埋める拍手受け　美代子
（借衣装見事果した司会ぶり）
借りて来た猫もこっそり爪を研ぐ　はる子
（猫の手も借りたい程に店流行る）
借り物のタイを気にした酒の味　忠治
（ネクタイを借りてお洒落がデートする）
国宝の塔借りている燕来る　幸枝
（国宝の塔をねぐらに借りた鳩）
俄雨傘お借りしてからの縁　円女
（そもそものご縁は傘を借りてから）
涙払う手は観音に借りに行く　彩子
（観音のお慈悲を借りて涙拭く）
世渡りの智慧を時々借りに行く　絢子
（世渡りの知恵を恩師を訪うて借り）
マイホーム夢を間借りで共稼ぎ　民子
（マイホームの夢持ち間借りする夫婦）
年寄りへちょっと借りたい知恵袋　みつこ
（知恵借りる年寄りが居て慌てない）
名言集訓話のネタを借りてくる　和子
（名言を借りてまとめている訓話）
人生の借りが返せず生きている　純子
（人生の借りを返した立直り）
借りた傘天気つづきでついおくれ　喜代子
（雨降らぬから忘れてた借りた傘）

借りて来た猫で一日暮れました　とよ子
（借りて来た猫がいたずらして困る）
借景を生かす都会のマイホーム　方子
（マンションの借景京は素晴らしい）
借り物の念珠にぎって法話聞く　隆雄
（数珠借りて真面目になって法話聞く）
借りに行き手土産だけが捕虜となり　忠禄
（借金は断り土産受取られ）
レンタカー見知らぬ街のラブホテル　春枝
（レンタカー借りて不倫のラブホテル）
盆休みツアーの合間に愛車借り　明吉
（盆休みツアーに出た子の車借り）
借家して四十年は早く過ぎ　春子
（四十年借家で通し平で辞め）
借りる金も貸す金もなし平和です　暁子
（貸し借りがなくて余生を孫と住む）
友達と言うてみそ米借りにくる　友熙
（友達のつもり気安く借りる米）

私の句

駅長の手も借りている車椅子　白渓子

◇

題「**売場**」　**11月15日**締切（1月号発表）
題「散歩」　12月15日締切（2月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3—19
辻　白渓子

平成三年度川柳塔社同人総会

10月6日（日）　大阪府中小企業文化会館

平成3年度の川柳塔社同人総会は10月6日午後2時から大阪府中小企業文化会館で56名の役員・同人が出席して開かれた。

総会は西田柳宏子氏の司会で始まり、橘高薫風理事長の開会の辞、西尾栞主幹のあいさつの後、栞主幹を議長に選出して議事に入った。はじめに春城武庫坊氏が平成2年度の貸借対照表・収支計算書を掲示して決算報告を行い、松川杜的氏が会計監査報告、川島諷云児氏が同人・誌友の現状について述べた。

続いて藤井一二三氏が別項要旨の事業経過報告を行い、参加同人からさらに同人・誌友の拡大をめざして努力する発言があり、野村太茂津氏から来年の全日本川柳和歌山大会への協力を要請、原独仙氏（出雲市・理事）の参与依嘱を含めて全議案が満場の拍手で採択され、黒川紫香氏の閉会の辞で幕を閉じた。

さらに閉会後、午後3時から同人総会出席者有志が会館地下の食堂で、二賞受賞者と遠来の同人を囲んで祝賀パーティーを行った。

■事業経過報告

（事　業）

2年10月6日　川柳塔碑へ新たに22名を合祀する供養を高野山奥の院霊園で挙行

同　10月7日　同人総会（大阪市立労働会館）

同　11月11日　川柳塔鹿野みか月結成10周年記念大会（山紫苑）

3年1月15日　新年おめでとう会（大成閣）

同　3月3日　川柳大阪創立50周年記念大会（府立労働センター）

3年4月21日　遙山亭忌追善ならびに、いずも川柳会創立65周年記念大会（出雲生活センターラピタ）

同　5月13日　西宮北口川柳会200号記念句会（西宮市中央公民館）

同　6月23日　第1回島根川柳塔まつり（松江温泉ホテル白鳥）

同　7月8日　第27回路郎忌本社句会

同　8月25日　第15回茗人忌川柳大会（鳥取ホテル・ニューいなば）

同　9月8日　竹原川柳会創立35周年・句集「竹の子」発刊・山内静水追悼川柳大会（竹原市大広苑）

同　9月24日　川柳塔勉強会（富山えんぴつ社と合同句会）

同　9月24日　「台北・日月潭の旅」実施

その他

。新常任理事による職制（各部構成）を決定

。路郎賞選考委員を正本水客から阿萬萬的へ

。平成2年度の一路賞選者は、久保正敏・小林由多香・西出楓楽が担当、各地柳壇賞選者は小島蘭幸・久家代仕男・藤井一二三が担当

（受　賞）

奥田みつ子　平成2年度路郎賞
栗谷　春子　同　準優秀作第1席
春城　年代　同　〃　第2席
野村　京子　平成2年度川柳塔賞
石尾かつ乃　同　準優秀作第1席
清水　絹子　同　〃　第2席
新家　完司　平成2年度銀河系賞
佐藤　奏月　同　茴香の花賞
西出　楓楽　同　月間賞永久保持
田中　正坊　同　一路賞
春城武庫坊　同　各地柳壇賞
西尾　栞　八尾市民文化賞
飯田　悦郎　八尾市民文化功労賞
遠山　可住　兵庫県篠山町文化功労賞
原　独仙　川柳塔社から永年の功績に対し感謝状を贈呈

（句集発刊）

両川　洋々　句集「枕木の詩」
工藤　甲吉　〃「北の貌」
北川　竹萌　〃「藁　稽」
翠　洋　会　合同句集「すいよう」II
大阪市交通局川柳部　「私が詠んだ大阪」
千原理瑛・松本元江　合同句集「風と花」
高須賀金太　句集「夫婦傘」
園山多賀子　〃「二人道中」
佐藤　奏月　句集「草千里」
田中　叶　〃「蟹の泡」

（句碑建立）

中島生々庵　2・12・22　淡路島・国青庵
千原　理瑛
松本　元江　3・5・15　岡山県大原町武蔵の里

（物故者）

山内　静水　（平成3・3・5）
岸本　木魚　（平成3・8・8）

■新同人

尼れいじ（出雲市）石尾かつ乃（鳥取県）石飛水煙（島根県）伊藤寿美（出雲市）伊藤芳正（島根県）稲本凡子（大阪市）乾隆風（鳥取県）岩原喬水（鳥取市）上田俊路（鳥取県）上田柳影（大阪市）梅田宣司（伊丹市）太田幸枝（鳥取県）岡本吉太郎（池田市）片上英一（八尾市）加本義良（島根県）北山好笑（和歌山市）木村明人（香川県）黒田くに子（鳥取県）佐々木芳正（鳥取県）住谷石舟（尼崎市）高杉千歩（八尾市）滝北博史（豊中市）武田帆雀（鳥取市）田中薫（尼崎市）中島志洋（藤井寺市）西川和子（鳥取県）西原艶子（鳥取県）野村京子（今治市）春木圭一郎（鳥取市）肥後和香子（弘前市）福田多可志（鳥取県）藤井正雄（茨木市）古川覚然坊（八尾市）坊農柳弘（大和郡山市）前田一枝（鳥取市）美田旋風（鳥取市）三宅つえ子（豊中市）籾山隆（大阪府）楊井二南（堺市）山内房子（竹原市）山根八重（鳥取県）山本希久子（吹田市）吉村一風（八尾市）＝43名

（同人総会出席者）

栞・諷云児・幸・凡九郎・柳宏子・覚然坊・忠禄・重人・太茂津・笛生・武庫坊・薫風・敏・劦・一風・三郎・籾山隆・たつみ・白渓子・鬼遊・透太・可住・小路・しげお・蘭幸清水・柳弘・奏月・素身郎・悦郎・智子・規不風・吸江・一二三・シマ子・東雲・文秋・杜的・芳子・冬葉・正坊・悟郎・二南・勝晴萬的・楓楽・ダン吉・吐来・雀踊子・美津留紫香・いわる・きみえ・松本文子・美房・みつ子　（56名）

川柳塔社常任理事会（9月2日）

▽田中薫・岡本吉太郎・藤井正雄・梅田宣司4氏の同人推薦を承認。
▽会計部から同人総会に報告する平成2年度決算の貸借対照表・収支計算書を文書で提案、承認。
▽本社句会への投句存続の可否につき検討。
▽二賞選考の基準について検討。

平成3年度二賞表彰
本社 十月句会

10月6日(日)午後5時半
大阪府中小企業文化会館

同人総会の終る前後から、引続きの台風による秋雨前線活発化で激しい雨になった。そのせいか、昨年よりやや少ない96名の出席であったが、遠来の人も多く、贈呈用の花束が往き交う華やいだ雰囲気あふれる二賞表彰句会となった。

定刻に西田柳宏子氏の司会により開会。今年は受賞者六名全員出席で、森崎忠禄（大阪市）高田美代子（藤井寺市）松下たつみ（鳥取県）吉岡きみえ（出雲市）高杉千歩（八尾市）斉藤劦（十和田市）各氏の順に、西尾栞主幹から賞状、楯、記念品、それぞれの所属句会から花束などが贈られた。

初出席は、斉藤劦（十和田市）吉川哲矢（大阪市）森崎忠禄（同市）秋元てる（西宮市）の4氏。

おはなしは吉岡美房氏で、おなじみ刑事もの「太陽にほえろ」シリーズ第三弾。三十五年間警察へ勤務した氏ならではのうちあけ話や裏話であった。警察官たちが3Kならぬ6Kといわれる厳しい労働条件で、我々を守るために働いている現実を聞き、大変感動させられた。

月間賞ははるばる竹原市から出席の小島蘭幸氏。

（進行—柳宏子）（受付—みつ子・いわゑ）
（清記—楓楽）（記録—射月芳・みつ子）

席題「北」　斉藤　劦　選

北の駅立つと詩人の顔になる　ダン吉
北国へ最後の旅はとっておく　(松)文子
決断は最終列車で北へ行く　哲矢
北へ往く列車に喪服持って乗る　三男
北からの便り待ってるスキー靴　紫香
早ばやと北の柳友から雪便り　(福)英子
北の友から白い便りがもう届く　美代子
十和田湖の伝説　雪は降りしきる　奏月
北の島に残したひとの花の種　規不風
なんとなくひとりぼっちで北へ行く　紫香
北の海　亡父の叫びが聞えくる　いわゑ
雪を見に風船北へ北へとぶ　シマ子
渡り鳥　北の便りを持ってくる　智子
北国の女でじわーっと燃えてくる　太茂津
地酒よし唄もまたよし北の国　杜的
北の果てドラマになった波の音　白渓子
転落のその後を北に住むおんな　規不風
窓際に北風耐える椅子がある　狸村
北国を訪ねた風邪が治らない　二南
北風を避けて通るも老いの坂　勝美
北風にうまいラーメン食わす店　萬的
北風に乗って父から来たより　美房
頑としてやさしい父の北まくら　小路
北風にそろそろ痛む後遺症　文秋
へそ曲りのお地蔵さんで北を向く　素身郎
北からの便り悲しいリンゴ落ち　東雲
北風がどこかでそむく子守唄　悦郎
北からの便りりんごの悲鳴きく　奏月
北からの珍客　長靴はいて来る　可住
北方領土　返せ返せと地の叫び　芳子
北国になお北のあり流氷よ　薫風
最はての北へ慕情を捨ててくる　一風
北陸を歩いて春の帽子買う　悦郎
澄んだ目の少女に逢うた北の町　正坊
佳
北国の良さをりんごに尋ねよう　幸
北国の饒舌　悲しい本を書く　友熙
コートを一枚入れておく北の旅　智子
いく曲りしても北からぬけ出せぬ　千歩
北の画布　真赤に染めるななかまど　透太
人
通訳が欲しい訛りの北の旅　笛生
地
北風に負けぬさざんか立ち向う　透太
天
寒立馬もねぶたの貌も北の意地　薫風
軸
雪のんのん北のこけしは眠たがり　劦

兼題「自　然」　宮崎　シマ子　選

定規では画けぬ自然の設計図　信　義
美しい愛を自然に吸い寄せる　螢
名所一つ増えて自然が一つ消え　温　子
そう考えるのが自然と思う爪を切る　敬
古里に母は自然に茶のお粥　喜　風
足の運び声も自然と観世流　一二三
寝たきりに故郷の自然は子守唄　て　る
ごく自然に亡夫の傍に行くつもり　て　る

二賞受賞者と選者

お陽さまに逆らわぬよう生きている　智　子
意地捨ててそれから自然友にする　三　男
シャボン玉の中の自然は美しい　蘭　幸
自然美の星座と語る夜もすがら　小　路
律義だな彼岸を告げる曼珠沙華　満　州
一坪の庭も蟻には大自然　恭　昌
つくろうても自然とわかる内輪もめ　トメ子
庭石を自然にかえす苔の花　しげお
自然体　何処からでも来いという構え　杜　的
神も科学も四季の自然に逆らえず　美代子
不自然な形で座る反抗期　みつ子
健やかに過疎の自然に母老いて　章
奥入瀬の秋に心の錆おとす　たず子
成り行きも自然に任す年の功　柳宏子
自然破壊　神のしっぺがきっとくる　隆
自然が好き猫は家出をくりかえす　奏　月
自然から学ぶ恐さも優しさも　千　秀
文無しになって自然と仲良しに　(福)英　子
死果累々りんご台風うらみます　吸　江
えらい自然　残ってますな青大将　寿美子
大自然に抱かれて欠伸ばかりする　年　代
どんぐりが転がる山が好きで行く　きみえ
思い上りのツケを自然が持ってくる　一二三
丸洗いしたい汚れの自然界　隆
自然にも情けは欲しい火砕流　哲　矢
農に嫁し自然の風と住み馴れる　たず子
老農の皺へゆったり四季巡る　可　住
自然との約束があり木を植える　芳　子
牛の眼に悲し自然が減ってくる　蕗　児

人
海荒れて昨日の誓い嘘となる　吸　江
地
騙してもだましても自然笑ろている　可　住
天
うぶ声に自然と顔も親になる　一　風
軸
自然林　斧のこわさを知らずのび　シマ子

兼題「救　う」　安藤　寿美子　選

空缶を拾えば地球救えるか　栞
救えないことが神にもあるらしい　奏　月
私を救う小石を積んでいる　(新)正　子
ストレスを救ってくれる書林浴　正　坊
十円玉の賽銭　救われそうにない　一二三
若いのが救いなにより背を押し　憲太郎
SOSあなたへ狼煙あげている　(松)文　子
百円で人を救った気の募金　保　州
大らかな海の素顔に救われる　勝　晴
救うのは結局自分だと悟る　射月芳
十月の蚊が気の毒で叩けない　(新)正　子
せめてもの救いやさしい妻がいる　憲太郎
一本のザイルで友を支えてる　隆
一秒がとっても長い救急車　柳宏子
土壇場で妻の度胸に救われる　透　太
救われた日を捨犬は忘れない　しげお
救う自信がないから見ない振りをする　年　代
何気ない一言だけど救われる　昭　子
泣きに来て海の広さに救われる　たず子

日本を救うだなんてよう言うわ　ダン吉
くどくどと救い求める嘘並べ　愛論
止り木で敵のジョークに救われる　露児
失言が救う会議の行きづまり　みつ子
せめてもの救い嫁はんよう来たな　忠禄
救われてそれから甘く見た世間　哲矢
一本の藁にも見切りつけられる　千秀
感謝状ほしくて救うた訳でない　白渓子
救われた昔忘れぬ白兎　千秀
神様が救うてくれるまで待てぬ　蘭幸
はぐれ凧　救う手だてを見失う　寿子
君が代を唄うと僕は救われる　岳人
わたくしを救う言葉がまだ見えぬ　(松)文子

佳

困ったら帰れと母が言うてくれ　シマ子
救われるたびに芝居がうまくなり　奏月
救世主に見えた日もある高利貸し　頂留子
ときどきは魂売って救われる　楓楽
二度ばかり妻に救出されました　ダン吉

人

救う手はないが花など活けてあげ　智子

地

妻ひとり救えぬお粥炊きながら　可住

天

谷底へ降りてきたのはクモの糸　朱夏

軸

ワシントン条約　太郎が救った亀もいる　寿美子

兼題「それぞれ」　神谷　凡九郎　選

振り出しにそれぞれ戻る気はあるが　太茂津
それぞれが象を触ってきたらしい　しげお
それぞれの過去を見つめて遠花火　勝晴
それぞれの言い分と言ういたみ分け　敬
それぞれの胸に確かな鈴の音　年代
雑踏の中におんなじ顔がない　重人
飾り気もなく影それぞれに冬木立　栞
それぞれに思い合ってるずれている　規不風
それぞれに生き方があり稲を刈る　笛生
それぞれにカラスも帰る巣へ帰る　昭子
別姓でそれぞれ好きなことしてる　露児
それぞれにわが道を行く核家族　吸江
それぞれが上手になった一輪車　奏月
それぞれが凭れ木ほしい核家族　(福)英子
それぞれの長所を捜す師と出会い　満州
それぞれが平和で唄を歌ってる　きみえ
それぞれの意見先立つものがない　憲太郎
それぞれの呼吸のあった日の譜面　寿子
それぞれの時間で食べる朝ごはん　朱夏
それぞれに別れ住んでも親子の目　規不風
それぞれに花を持寄り草木染め　劦
多産系それぞれ結婚できました　敏
それぞれが夫婦ではない踊りの輪　悦郎
ひとつひとつの灯がある秋がある個室　蘭幸
それぞれの立場で吃水線を持つ　楓楽
一家言もってそれぞれ生きている　度
それぞれの気がかりがある朝のパン　薫
それぞれに約束のある指たちよ　いわゑ
慰めもそれぞれあって他人様　柳伸

佳

それぞれの傷跡　生きてきた証　千秀
行先がそれぞれ違う核家族　度
それぞれの立場があって樹をゆする　楓楽
それぞれの過去美しき顔の皺　みつ子
子が巣立ち夫婦それぞれ部屋を持ち　薫風

人

それぞれの都合で親が二人住む　美房

地

それぞれが傷なめ合っている夫婦　敏

天

臍繰りはそれぞれ仲のよい夫婦　杜的

軸

アンタやネ意見それぞれ聞いてたノ　凡九郎

兼題「人　気」　辻　白渓子　選

人気チーム負けて売れないスポーツ紙　みつ子
老母はまだ田中絹代を忘れない　(松)文子
過労死する程の仕事が来る人気　文秋
途中下車させる人気の一ぱい屋　小路
過信した人気足もとすくわれる　朱夏
芸よりも脱いで人気のあるスター　志洋
じゃんじゃん街　売れっ子作家の昼の酒　勝晴
週刊誌の的にされている人気　雀踊子
人気ある歌手で場末を忘れない　哲矢
人知れぬ苦労があった人気者　年代
人気者どのチャンネルも顔を出し　芳子

人気者になろうと飴玉を配る　幸
開業医　気さくと若さで人気とる　清水
人気者またピエロ役買って出る　恭昌
奥さんの人気ではやる小商い　たず子
先代の人気が重い七光　絹子
スキャンダル人気をあおる事もある　正坊
下積みの苦労実った人気者　鬼遊
スターリンほどの人気も倒される　杜的
下手でよし素人芸にある人気　螢
信じきるほどの人気がありますか　ただし
瓢箪がはじけてぱっと出た人気　美房
つくられた人気で鼻が曲りそう　文秋
花火のような人気で終らせないように　三男
若貴の人気　相撲史変えてゆく　寿美
マスコミのレール走っている人気　千秀
ものまねで人気　自分の顔がない　萬的
ものまねが出て来て再燃する人気　絹子
拾うてきた仔犬が人気一人じめ　紫香
人気出て親衛隊がつきまとう　一風
週刊誌あくどいネタで人気とり　佳
オープンカーの人気を拝む母がいる　栞
人気絶頂　叱ってくれる人がない　太茂津
のし袋　人気のほどでない中味　栞
流し目で人気を保つひともいる　蕗児
強すぎて人気もひとつ湧いてこず　素身郎
人　昭子
水玉の人気　派閥に弱かった
地

汚れ役でいつも人気に飢えている　幸
人気出た日から渾名がついている　天
軸
人気あるうちに引退考える　しげお

兼題「栄える」　**西尾　栞選**

栄転と裏腹にある過労死よ　透太
太平記　栄枯盛衰世の習い　白渓子
真ん中に昔栄えた川がある　正坊
業績が栄えたらしい窓明り　劦
繁栄の国にバブルの落し穴　二南
栄光の肩が崩せぬ鬼瓦　(小)英子
週休二日いよいよ塾が栄えそう　可住
栄えてる家で仲よい嫁姑　満州
仏壇を大事にしてる栄えてる　楓楽
駅前が栄え方角間違える　重人
栄えると言わねば寄付が集まらぬ　白渓子
今はドブ川　昔栄えた廓あと　二南
パチンコは栄える戦争風化する　萬的
不愛想な店が栄えている律義　勝晴
栄えてるぐらいの便りしておこう　小路
下請を泣かして栄えなんとする　憲太郎
砂漠の下に昔栄えた町がある　度
栄枯盛衰　人間らしく生きるだけ　螢
出土品　栄華をしのぶ鬼やんま　高栄
栄光の座から転んだ勇み足　昭子
栄達の身なれど妻に病まれては　眉水
行列は御座候の味を知り　笛生

栄えてる国へ難民船が着く　文秋
栄えても一人淋しくゆくだろう　悦郎
栄えたは「牛の涎」の座右訓　雀踊子
凡庸の殿で栄える城下町　信義
栄えてる証拠にゴミがたんと出る　(新)正子
デモクラシーの上で胡座をかく栄え　寿美
ゼロからの栄えを子等に伝えよう　冬葉
栄達の鍵　三男にリレーされ　可住
駅前が栄え駅裏さびれだす　奏月
一族の栄えたころの蔵の跡　年代
佳
たかが麺　路地に栄える隠し味　章
極道が帰りのれんを染め替える　岳人
街は繁栄　水と空気がまずくなる　武庫坊
栄耀栄華　語りはじめた平家琵琶　英一
つわものの栄えた跡は風が哭く　楓楽
人
栄進も栄枯も知らぬ父の鍬　千秀
地
平家蟹　栄華の末の物語　絹子
天

塩で栄えた頃のはなしをする柱　蘭幸
軸
順風満帆　栄誉たたえる良い言葉　栞

松下たつみさん
吉岡きみえさん
ご両名からそれぞれ金一封を拝受
いたしました　川柳塔社

第6回川柳塔勉強会

えんぴつ社と合同で

- 9月24日—26日
- 越中八尾—魚津—宇奈月

おなじみの方々、それにふあうすと社の田中好啓、鳥本泰両先生のご参加も得て総員三十七名、みな期待に胸ふくらませて、バスに乗りこむ。

9時24分出発、車は新御堂筋から名神高速に入り快適に走る。その間、紫香団長の挨拶、またこのたびの旅行をお世話下さった諷云児さんの説明などがあった。

そのうちに岳人さんの提案で車中の句会ということになった。「とびっきり」という題が出て、思わぬ作句に苦しむ羽目とはなった。しかし、そこは皆さんベテランばかりのことゆえ…。

大津サービスエリアで小休止の後、本場の越中おわら節の名調子、それに美しい踊り、また坂の町八尾（やつお）の説明などのビデオで楽しませて頂く。

昼食後、車は一路、北へ北へとひた走り、50分もすると、日本海が見えてきた。間もなく先刻の席題の披講が始まる。選は泰先生、いろいろな「とびっきり」が出たが、「とびっきり優しい眉は老母を描く　鷲見章」が秀句となり、岳人さんからのトロフィーを獲得された。

その間、車は富山県に入り、八尾へとひた走る。やがて薄墨色の八尾の町を左手に見て静かに流れる井田川を前にした今夜の宿「おわら観光リゾートホテル」に着く。

時間もゆっくりあって、旅装を解いてから露天風呂で手足を伸ばす。琴の音も低く流れて旅情満点、バスの疲れもふっとんでしまった。6時から宴会、山海のご馳走にアルコールも少々入って皆さんご機嫌、カラオケも出て得意の喉を競い合う。

この後、館内のお祭り広場で待望のおわら節を見せて頂く。この踊りは、9月1日から3日間夜を徹して踊る。台風のシーズンに、風神雷神の魂を鎮める祈願のための踊りである由。三味線と尺八小太鼓に笛や胡弓の鳴り物、ことに胡弓の何とも言えぬ哀調を帯びた音色を伴奏に、素晴らしいおわら節を聞かせて頂き、ただただうっとりと聞きほれる。

男性の凜々しさの中にも優雅さを秘めた美しい線、女性の雅やかな優しい柔らかな手振

待望のおわら節

門谷　たず子

第1日

9月24日、うす曇りではあるが、涼しく爽やかな朝を迎えた。新大阪駅朝9時集合、前日から宵立ちの鳥取・島根からのご一行、また和歌山からの

り、数ある盆踊りの中でも、これほど気品と哀調の中に優雅さを持つ踊りは、他には見られぬものと思われた。それだけに踊りの手がとても難しく、なかなか覚えきれなかったが、中には踊り手の後について、輪の中に入って踊る人もあって、楽しく八尾の夜は更けていった。

編笠の内みな美しき風の盆

合同勉強会開く

田中　透太

第2日

台風のニュースを気にしながら25日の朝を迎えた。どうやら台風もお天気も大丈夫。8時半、風の盆の余情が残る八尾を全員元気で出発、勉強会のメインエベントである川柳えんぴつ社と川柳塔社の合同句会開催地の魚津へ。

えんぴつ社の方々の出迎えを受けて会場に着いた一行は、魚津の美味しいお茶でくつろいだ後、脇坂正夢さんから魚津の三大名物―蜃気楼・蛍いか・埋没林を紹介しながら歓迎の挨拶。紫香団長のお礼の言葉、そして出席者の紹介の後、事前投句「えんぴつ」野村太茂津選の披講に入った。当日の出席者は、えんぴつ社18名、川柳塔社37名、入選句43句で天位は諷云児氏であった（入選句別項）。

この後、新鮮な魚に舌鼓を打ちながら昼食。手厚いもてなしで懇親のひとときを過した。誌上を借りてえんぴつ社の皆様に心からお礼申し上げる。

午後1時半、名残りつきない魚津を出発。右に立山連峰、左に富山の海を眺めながら宇奈月、黒部へ。宇奈月に着いた一行は想影橋の袂でバスを降り、トロッコ電車の発車までの間、思い思いに周辺を散策、旅情に浸った。

2時40分、トロッコ電車が動き出した。欅平まで往復3時間、山の上から谷底まで千米以上ある渓谷に沿い、山合いを縫うように走り続ける車窓からは、切り立った断崖絶壁、それに霧が立ちこめ墨絵のような幽玄の景色。紅葉には少し早かったが、初めての人はドキドキ、ハラハラしながら日本最大の渓谷美を満喫。定刻から少し遅れて全員無事、2日目の宿の延対寺荘に着いた。

宇奈月の夜は、歌に自信のある方々が男心と女心を歌いあげた。ふあうすとの鳥本泰さんが昨夜についで意表を衝いた「酋長の娘」の踊りを披露し、射月芳さんがテレテレコールで登場、テルテル坊主の歌を編曲した破調でユーモラスな歌い振りに満場は抱腹絶倒し楽しい宴の幕をおろした。

外は夜来の雨に濡れ、夜更けの街を散策できなかったが、想い出の旅の一夜を過した。

旅の夜の縁となった風の盆
面影を重ね黒部の駅に佇つ

来年もよろしく

宮崎　シマ子

第3日

26日朝は昨夜来の雨、台風19号が近づいているので仕方がない。小雨の中を露天風呂にゆくと昨夜は暗くて分からなかったが、立山連峰に連なる山がかぶさるように目の前にある。ああいいなあ、ここでもう少しゆっくりしたいと思った。出発時間が30分早くなったが、車に乗る時には雨は止んだので、私を含めて皆さん何と精進の良いお方ばかりと感心した。車の席も入れ替り別の方が前後左右に来られ、一段と親しさが増した。

第1日目に続いて席題「面影」が出て、さあ大変、また苦しむのかと思ったのは私だけだったのだろうか。帰路の車は意外に早く、加賀百万石城下町に到着したが、見学予定の金箔工芸館、友禅工場はともに休館で、残念

だった。いい物を買うつもりでお金も沢山持っていたのに…。お休みのない武家屋敷と兼六園を見学、宏大・幽邃・人力・蒼古水泉・眺望、何度見ても素晴らしい公園の芝生に、どうまぎれ込んで来たのか曼珠沙華が五、六本真赤に燃えていて、その花に黒い蝶が一匹止まっていた。その自然がかもし出す美しさ、可憐さは琴路灯籠よりも、雁行橋よりも一番の見所だった。誰かが芝生の中へ片足入れてパチリ、兼六園の近くで昼食、名残惜しい金沢を後に一路大阪に向う。途中、西インターレストハウスでの休憩、車を降りる度に土産が増えていたが、ここでは一段と多くなったように思われる。再び車の人になり、「面影」の披講が始まる。選者は岳人さん、佳句がつぎつぎ出て来たが、車がゆれるので書きとれなかった。

面影がまだたち切れぬ花鋏　鷲見　章

第1日目も今日もまた章さんの句が天になった。車の後の方には川柳にもお酒にも強いお歴々が居られ、章さんはきっとイジメられていたのでしょうか。こうして3日間の旅は楽しく終わりました。

いつも句会では目礼だけの方々とお喋りしたり、隣に並んで食事をしたり、同じ部屋だったり、教えたり教えられたりで、ほんとうにありがとうございました。

兼題『えんぴつ』　野村　太茂津　選

書き直し出来るえんぴつだから好き　京　子
大穴を狙い鉛筆勝負する　白渓子
鉛筆を噛んでくやしい日の日記　美　房
えんぴつは削れぬ子だが期待する　一　風
試験場ただ鉛筆の走る音　光　子
6Bのえんぴつで書く自己主張　森　子
えんぴつの芯が自由へ首を出す　規不風
赤えんぴつ今日の予想に血が騒ぐ　一二三
大きな虹色鉛筆でぬりつづけ　あき津
えんぴつに似た人生を送る日日　桂
えんぴつで書かれた父の古日記　保　子
稲作のえんぴつメモが役に立ち　かをり
エピソード鉛筆まるくなってくる　きみえ
えんぴつの芯尖らせている妬心　房　子
鉛筆もノートも入れて柩打つ　隆
エンピツの芯尖らせる正義感　章
コラム書くえんぴつの芯あたためる　透　太
自画像を描くえんぴつが丸くなる　たず子
えんぴつの手紙は母の温かさ　江　美
えんぴつと仲良くなって急な秋　岳　人
えんぴつ画古いノートの君の顔　て　る
鉛筆から職場の臭い消えている　美代子
鉛筆で机を叩き起こされる　紫　香
鉛筆がまだ覚えてる肥後守　射月芳
鉛筆の呟きを聞くモノトーン　歌　子
えんぴつの震え止まらぬ文を書く　美津留
ただ事でないエンピツの走り書き　しげお
えんぴつを削ると森の精になる　英壬子
色鉛筆みな一本の芯がある　英　一
エンピツが走る自信に満ちた顔　〆　女

佳

赤エンピツで先生百点くれはった　シマ子
八つ当たりえんぴつ矢鱈削られる　利　明
定まらぬ意見えんぴつよく折れる　利　夫
耳にはさまれえんぴつも一思案　正　夢
エンピツの意地消されても消されても　満　江
えんぴつの母のくせ字が温かい　篤　子
えんぴつの自負脇役に徹し切る　杏　花
えんぴつのいのちに骨を接いでやる　好　啓
わたくしへ赤えんぴつを離さない　はつ絵
約束のないえんぴつがころげ出す　好　啓

人

真実はえんぴつ書きのメモにある　よし津

地

プライドを持ってえんぴつ強くなる　文　子

天

えんぴつの芯が妥協を許さない　諷云児

軸

生煮えの言葉えんぴつ掠れだす

一つの川柳

田中透太

川柳を理不尽を斬る剣とし　　淑子

本誌の昭和58年3月号「愛染帖」に載った故田中淑子さんの句である。最近のバブル経済の破綻で発覚した銀行、証券金融の庶民を馬鹿にした不正を見る時、思わずドカンと一発、〝怒れ世相を斬る川柳大集合〟と叫びたくなる。

川柳から批判精神が抜ければ気の抜けたビールと同じ。川柳が短歌や俳句と同様に文芸であり続けようとするなら、この特質を失ってはならないと思われる。なぜなら、川柳は二百三十年前、風雅を好み、上流階級の教養と文芸として庶民から遊離した短歌や俳句に対し、庶民のレジスタンスのはけ口として前句付から生れたからである。しかしその後、「狂句」として横道にそれ、明治に至った。

近代川柳は、古川柳の文芸価値を評価しながら、低俗なレトリックとなったのを「狂句百年の負債を返せ」「初期の柳多留へ還れ」を旗印とする新興川柳運動として出発。以来、古川柳の伝承的三要素を基調に、人間諷詠の詩として様々な傾向に味付けされて今日に至っている。その中には反戦川柳作家、鶴彬の

暁を抱いて闇にいる蕾
　手と足をもいだ丸太にしてかへし

などの命をかけた川柳がある。故に、彼は特高警察の手で捕えられ、昭和13年9月14日、若冠二十九歳で獄死した。

現代の川柳で感じることを一言でいえば、社会性と諷刺と機智に富むユーモアが希薄になり、穿ちや軽味の句も減り、反面、詩性や余韻のある句、ペーソスと情と愛を詠んだ句が多くなった。それは近年、女性作家が急増したことや経済の繁栄などの社会的現実の川柳への反映と思われる。しかし、それとは裏腹に、人間疎外や過労死、経済のひずみと環境破壊の拡大と進行、人類の死活問題である核兵器、原発事故など、私たちをとりまく状況は厳しく、決して楽観を許さない。むしろ社会主義国の崩壊をも加えて、正に激動の時代を迎えたと言えよう。

そこで、私は冒頭の淑子さんの句に触れた白岩文衛氏の一文をどうしても紹介しておきたい。と言うのは、彼女はこの句を作った時、既に病床にあり、間もなく不帰の人となった。夫であった現本誌編集長の田中正坊氏の親友であった文衛氏は、三か月後の六月号に次のような淑子さんへの追悼文を書いている。

「文芸的価値が低いといわれようとも、消える句とさげすまれようとも、世の理不尽に私は斬りつけずにはいられぬ、という、どこが病人かと思われる激しい気魄に私は仰天し深く反省させられた。川柳は身辺瑣事を巧みに表現して足れりとするレトリックではないのだ。心に燃えたものをまっ正直に告白する小さな詩なんだ、と、柳歴一年にも満たぬ淑子さんに、私は川柳の原点を教えられた」

時事吟から川柳に入った私は、この七月で九年になる。淑子さんの句が胸に焼きついて離れなかったのは、そのせいかも知れない。

麻生路郎は、川柳は人間陶冶の詩であると言い、だから私にとって川柳することは単なる趣味ではなくて、人生をいかに生きるかということを知るためであると、著書『川柳とは何か』の「自序」で記している。

この文を綴っている今日八月十五日は、終戦の日である。「リンゴの歌」と「青い山脈」が青春歌だった私たち戦中派は、再び〝わだつみの声〟を聞かないためにも、淑子さんの句の遺志を受け継いでいかなければならない。

中国吟行の旅

9月24日～27日

台北・台中・日月潭

台湾の四日間

田中正坊

川柳塔社恒例の中国吟行は今回、趣向を変えて故宮博物院の見学をメインとする台湾ツアーを実施、9月24日から27日までの4日間にわたって行ってまいりました。一行は東野大八、橘高薫風、宮口笛生、天正千梢、山崎君子、赤川菊野、奥田みつ子、西出楓楽、山本希久子、春城武庫坊・年代夫妻、田中正坊・千代子夫妻と番傘の奥原雨人、森中恵美子、杉森節子さんの16名でした。

第1日は午前10時30分、日本アジア航空のEG211便で出発、現地時間の午前11時50分、台北市の中正国際空港に到着し、戦前、日本で学校教育を受けたという東南旅行社のガイド、陳錫福さんに迎えられてバスで南下し、金色に輝く布袋尊像のある宝覚禅寺など台中市内を観光し、リゾートとして知られる日月潭に着き、折からの満月が湖面に照り映える風光を観賞して中信大飯店でツアー第1夜の夢をむすびました。

第2日は午前8時、ホテルを出発して孔子や関羽・岳飛を祀る文武廟、三蔵法師の玄奘寺に詣った後、台湾原住民を住居・風俗・文物とともに野外展示する九族文化村を見学、ヤミ族の踊りを見て牡丹園で昼食をとり、バスで一路北上しましたが、夕刻から台風の余波で雨となったため、夕食後の台北市内の夜店見物は車中からとなりました。同夜から昨年、新築された高層のデラックスな台北凱悦大飯店（ハイアットホテル）に宿泊しました。

第3日は終日、台北市内観光。まず、極彩色の彫刻と建築に彩られた市内最古の龍山寺に参詣、車中から元台湾総督府の総統府、中正紀念堂、国民党本部などの建築物を眺めて待望の国立故宮博物院に着きました。この博物院には、北京の故宮と南京の博物館にあった中国五千年にわたる国宝級の文物約七十万点が収蔵され、一階に甲骨・青銅器、二階に陶磁器・書画、三階に玉器・漆器・琺瑯・彫刻など約二万点が展示されており、とても二時間や三時間では見つくせませんが、博識な陳さんの系統的かつ重点的なガイドによって名品中の名品と言われる青磁の水仙盆なども鑑賞することができ、四階の「三希堂」で飲茶しながら余韻を楽しんだ後、忠烈祠の衛兵交代を見学しました。

第4日の午前中は最後のショッピング、ま

るでデパートのような免税店の台北麗品店でそれぞれ目いっぱいの買物をした後、バスで空港に向かい、帰国の途につきました。

出会い

森中恵美子

台湾平和観音奉安と霊場巡拝の旅に参加したのは、昭和六十二年十月の末であった。

同六十三年とつづけて台北、台中、台南の各寺院に八体の観音さまを奉納している。

観音の道をひたすら歩いた台湾の秋を思い出す時、この度のツアーにご縁をいただき、平和観音さんのご一体にでもあえることをたのしみの一つにする旅となった。

台北から日月潭に向って走りつづけるバスと台中市内に入る。

台中一の古刹、宝覚禅寺に着く。この寺には五番目の観音さんが納められているが、拝することは出来なかった。

しかし、なつかしい弥勒さんを三たび仰ぎみる。「身高八十八臺尺之彌勒大佛」と台湾風の紹介だ。台座には「皆大歓喜」とある。

セメント色のお姿であったが、金箔に大きく輝いていたのには驚いた。

金ピカの布袋さんである。なんとなく、もとのお姿がよいなと思ったのは私だけか。

境内にある、日本人遺骨安置所に参るのも久しぶりだった。花も香も絶えぬ墓前に感謝の祈りを持つ。日本へつづく空が青い。

日月潭の一夜が明けて、文武廟へ。華やかな彫刻美は、何度訪ねてもたのしませてくれる。台湾独特の占いも吉と出て旅も上々。

つづいて玄奘寺に至る。南洋杉が美しい。本堂には西遊記でよく知る、唐の三蔵法師の霊骨が祀られていることで高名な寺だ。

ここに六番目の観音さんが納まっている。

本堂の裏階段の静かさをのぼると、ほの暗い祭壇の中央にそのお姿はあった。

当日の壮厳な開眼会式と思いあわせて胸のうちが熱くなる。同行のみなさんもよろこびの手を合せて下さった。

一体でもと願った思いのかなう台中の一日を、謝謝你（シェシェニー）。

向って左から大八、恵美子、節子氏（龍山寺）

九族文化村

天正千梢

日月潭に程近い位置に九族文化村があり、ヨーロッパ風パレスと青々とした芝の中に、色とりどりの花が競い咲いているのを眺めた目には、ヤミ族・アミ族・タイヤル族・サイセット族・ブナン族・ピナン族・ルガイ族・パイワン族・ツウサウ族と台湾原始民族九族の住民が六十二ヘクタールの地に配置されて

いるのが異様に感じられた。

高床式の家、石を両脇に積み上げた屋根、円い屋根、細長い屋根、テレビで見たことのある風景や若い男女が楽しく踊っているのをまのあたりにすると、二十世紀の文明の中でミクロの世界が研究されている今、きれいな山に囲まれてこの地に残されている九族文化村は、地球上の宝として長く保存してほしいと願うのは私一人ではないと思います。

九族の見分けつかない文化村
日月潭いざよい月を満喫し
文武廟　諸葛孔明読みなおし

日本を振り返る

奥田　みつ子

海外旅行は（と言っても中国二回と今回の台湾しか知らないが）ガイドによって、その国の印象が著しく異なるのではなかろうか。

今回のガイド、陳さんは日本に長い間暮らし、高等教育も受けた人らしい。実に豊富な知識の持ち主で、日本人の私が知らない日本の格言、忘れている日本の歴史などを交えて、説明される。また、台湾の歴史などをガイドの職業柄だけでない熱心さで語られる。

そして、「私はこの国で生まれ、この国の土になるのだから、この国のことを詳しく知りたいのです」と勉強の理由を話す。

「台湾は今まで独立の経験がないのです」それまで、ユーモアも交えて精力的に話していた陳さんの顔に、一瞬、翳が走った。

喜んでいいのか母国語が二つ
独立の闘志を秘める皺の数

果たして、私は日本のこと、日本の歴史をどれほど、知っているのだろうかと、改めて考えさせられた旅行だった。

台湾の旅

山本　希久子

満月を浮かべて静か日月潭
陽の光いらかに満ちて文武廟
難しい漢字　隣国で覚え
ふれ合うて温い九族文化村
ふるさととする友が居る旧日本

肝っ玉優先

西出　楓楽

台湾の観光バスに揺られながら、ふっと日本にいる錯覚にとらわれる。走っているバス・トラック・乗用車・バイクの大半が日本製の上、毎度おなじみ渋滞ののろのろ運転とあれば、それも無理からぬことであろう。

けれど、日本に比べやたら多い軽バイクはほとんどノーヘルメットだし、二、三人乗りはざら、時には四人乗りという猛者もいる。それらが車の大洪水の中を右に左にスイスイ泳いでゆく。そのまた間を縫うように、中年のおばさんがホイホイ横断している。こんな風景は、日本ではちょっとお目にかかれない。

「この国の人は、自分に都合の悪い法律は守りませんから、青信号でも安心してはダメですよ。事故に遭っても補障はありません。道路では、車優先でも歩行者優先でもなくて〝肝っ玉優先〟なのです」

これはガイドの陳さんの最初の注意。

楽しかった旅を思い出すたび、かの国の人々の〝肝っ玉〟の無事を祈らずにいられない。

故宮忘れ得べき

東野大八

故宮博物院前での一行

中国五千年の歴史の遺産である秘宝約七十万点近くを収蔵するという、台北の国立故宮博物院の広大な階段を約三年ぶりで昇った。

北京紫禁城の故宮博物院にも、まだ百万点所蔵とPR中だから「あるところにはあるもんだ」と陶人加藤唐九郎が僕に言えば、傍らから陶芸評論家の小山富士夫が「北京より台北の方が陶磁器は本命だよ。ここには宋の汝官窯や清官窯の古月軒が四百点もある」と言いだす。陶芸新聞十余年の編集を手がけた僕の夢は、かくてそれから北京から台北へと飛んだ。そしてその夢よ再びの今度の旅だ。老いの額を厚い硝子窓に何度ぶっつけたことか。

台北のこの博物院は、蔣介石が抗日戦で北京—南京—重慶—昆明—南京へと持ち歩き、結局、一九四八年毛沢東の中国人民軍に逐われ秘宝との都落ちの旅をやっと台湾で終ったわけだ。この件につき皮肉屋の魯迅いわく、「国民党は人間より宝物を大事にするから、みんな宝物の行く方へ避難すれば生命が助かる＝〝偽自由書〟」

中国の宮廷の後宮は、皇帝一人当り后・夫人・嬪・世婦・女御の序列で百二十三人も一セットで食いついている女地獄であるから、明清両朝二十四帝は総じて若死の方で身が持たん。秦の始皇帝が徐福に命じ、東方の蓬来国日本へ数千人の船団を組ませ、不老不死の霊薬を求めさせた例もある。宋の順帝ではないが、「未来永劫二度と王家に生れたくない」と、その玉座を逐われるに当り、こんな悲痛な言葉を残しているが、この中には宮廷の女地獄への、男一人の孤独な生理への哀歓が漂っていることは否めない。

いずれにしてもこの博物院の古玩（骨董）の多宝格のおびただしい一品一物ごとに、宮廷人の人間臭が漂っているのには胸が痛む。

さて、僕たち一行が、当院の階段を上った日の新聞『自由時報』（民国80年9月25日付）に「蔣宋美齢が昨日松山軍用機場から、私物97行李を携えアメリカに向った」というえらく憤慨した大きな記事が載っていた。当年90歳のこの老女の、どえらい携行荷物に果たしてどれだけの秘宝が隠されていたのか。この分だと故宮博物院ニューヨーク別院でも開く気かもしれん。とにかくこの事件によって歴史的な、蔣介石一門四十三年間の台湾生活は終りを告げたわけだ。

この事件と言い、故宮博物院の収蔵品の一つ一つにもしみじみと歴史の悲哀というものに惻々と胸打たれる想いだ。

奥原雨人

漢薬はガマの油を真似て売り
名月は中国のもの日月潭
文化には高砂族も鮮おさめ
博学のガイド　ハナハトから学び

田中　叶百句集

蟹の泡

小出智子

昭和二十八年生れの作家、田中叶さんの句集鑑賞を書かせて頂くことにときめきを覚えます。鮮やかな朱の表紙に若さが象徴され、句集名の『蟹の泡』はいかにもこの作者らしいと思ったことです。六十一年に来阪された時、一度お目に掛ったことがありますが、背の高い好青年で落ち着いた挨拶をされたのが強く印象に残っています。

正面に山ありゴミを焼いている

山という大きなものを見据えて、ゴミを焼く作者の姿を彷彿とさせ、陸奥の大自然の中に生きているのがはっきりと見えます。

父病んで睾丸の見える時がある

新しい住所で蟬が鳴いている

ともすると顔を背ける事柄をこんなにさりげなく、可愛らしく詠われるのも作者の人柄でしょう。この句を作られた頃でしょうか、お父さまのご病気を気遣って、弘前市のNTTの社宅に居られたのを「父と一緒に暮らすことにしました」と、新しい住所からお葉書を頂いたことがありました。とても親思いの方だと思ったことです。

ひまわりが伸びて社宅というところ

ひまわりを配して、若い家族の佇いをこれだけの言葉で余すところなく詠われて、読む者を頷かせています。

一歳の児はスプーンの丸さかな

児と写すいつもこれしかないポーズ

お子さんを抱く感触がスプーンの丸みのようだという。浅くなく、さりとて深くもない丸みが、なんともいとおしく、一つのポーズで貫く父親としての自覚を窺うことができます。

妻がいて児が泣き本を読んでます

立ち読みで見た症状にあてはまる

児が病んで蛇を殺したこと思う

霊柩車まだ曲がらずについてくる

加害者で巻尺の端持たされる

どの句にも作者の思いがあり、愛があります。作者の個性と言えるものです

便利になったとはいえ、やはり青森は遠い。それだけに、平素、叶さんの作品に接することは少ないのですが、以前から感じていたのは、真実性、独創性、純然さを求めている作家だということでした。これからもそれを貫かれることを願っています。

叶さんは百句集を出されたことによって、ご自身を振り返ってみられる機会を得られたと思うのです。それが今後の作品にどのようにプラスしてゆかれるか、楽しみでもあります。川柳の次の時代を担ってゆかれる一人だと期待は大きいのです。

寝屋川市民川柳大会

とき　11月3日(祝)　正午開場　午後1時半締切

ところ　寝屋川市立総合センター
(京阪寝屋川市駅からバス①番乗り場から④番で総合センター前下車)

兼題　「やわらかい」　里　小路選
「塔」　小出　智子選
「指輪」　小川　速水選
「枕」　山本　礫選
「命」　梶川雄次郎選
「文化」　橘高　薫風選

会費　1000円(作品集・テレカ呈)

賞　◎各題2句(席題なし)
各題秀句に賞品と色紙

主催　寝屋川市文化連盟

後援　川柳ねやがわ

■各地句会だより

岸和田川柳会

芳地狸村

岸和田市に川柳のグループができたのは、今から四十三年前の昭和二十三年、市内の十名ほどの川柳人が集まったのが始まりです。

当時、『阪南新聞』の文芸欄掲載の句を取材に来ていた文芸担当記者の福元白南風さんが、「例会を開いて初心者を指導して頂いては」と提案されたのが始まりです。翌二十四年三月、「岸和田川柳会」と名付け、高橋操子先生を会長として発足し、野田町の先生宅で月例会が開催されました。参加者は高橋ご夫妻、静一路、南風郎、白南風、星登の諸先生で、現在この方々は一人も会に残っておられません。その後、操子先生のご努力でぼつぼつ川柳を志す人々が増え、現会長の武助氏も二十七年に月例会に初出席されたそうですが、当時は用紙にも困り、句報もガリ版で大変、苦労され、操子先生と二人三脚で現在まで会を支え、発展に尽されました。そして操子会長が平成元年一月末に亡くなられた後、武助氏が二代目会長に就任、初代会長の路線を守って岸和田川柳会を運営、毎月の例会、文化祭参加市民川柳大会、岸和田城まつり等を開催し、今日に至っています。

高橋操子先生の句碑が、昭和五十一年十一月に岸和田市久米田寺に建立されました。

ちっぽけな善意でもよし心満つ　操子

の句は先生の人間を愛する温かい心の現れであり、折りあるごとに「人間は死ぬまで勉強や。正しい人間の道を歩み、真実の句を作らなければ川柳をしている値打ちがない」と、私どもに常に諭されていました。熱心に一人一人の個性を考え、分かりやすく、時には厳しく指導してくださいました。そんな先生の教えをうけついで、川柳を愛し、真実の句を作ることを目標に、楽しく明るい川柳会になるよう、会員一同、努力しているところです。

月例会は毎月第四木曜日の午後六時から岸和田市福祉センターで開いており、川柳塔社の西田柳宏子、阿萬萬的副理事長、河内天笑、月子常任理事、福浦勝晴理事のほか、他柳社の半井甘平、内田一弥、深日白光子先生に選をお願いし、遠方からも他柳社の方々に参加を得て月例会を盛り上げて頂いています。毎月発行する句報は、去る九月で三百十七号を数えました。

年一回の市文化祭参加市民川柳大会には、西尾栞主幹、橘高薫風理事長はじめ副主幹・副理事長・常任理事・理事の皆さんや他柳社の先生方のご支援とご協力を得て今年も十月二十七日、市民会館で第四十一回市民川柳大会を開催、多数のご参加を頂きましてありがとうございました。今後もこの大会へ一人でも多くの方々のご参加をお願いし、また、月例会にも気やすく来て頂くよう心からお待ちしております。

花地和墨

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月**25日**締切・30句以内厳守。所定の原稿用紙に清記をお願いします。　**編集部**

川柳クラブわたの花　片上　英一報

母になる予定日は明日髪洗う　シマ子
夕映えにあすを信じてくもの糸　春子
何とかなる明日へ思いをかえて見る　初子
毎日を明日に回す蟬時雨　幸枝
油蟬明日へ脱皮の息づかい　君江
速達の明日を信じて待つながさ　トシエ
考えのつかないことは明日にする　暁子
鳴きくれて蟬は明日を疑わぬ　みき子
虹を見る明日はいつも新しい　朝子
〝明日こそ〟私の好きな言葉です　弥生
今日明日に出掛ける旅の空模様　明子
バーゲンの明日を狙う貯金帳　しのぶ
定年をむかえる明日のカレンダー　ますみ
明日から明日からだと今日も暮れ　俊子
ねて起きて明日もいのちあるように　その
明日会える着て行くものは何にしよ　龍襄
明日があると思うならこそ欲も出る　泰成
明日がある夢を大きく今日を生き　龍
下請に明日の定めがわかりかね　丈夫
明日からやめるたばこがうますぎて　英一
タイガースおまえは明日を信じるか　雄
影のある女で熱い恋に生き　しげる
汗匂い麻幹のような昼の月　弘直
絡ませた腕が照れてるフルムーン　正子
痩腕をたたいて啖呵切ってみる　美津留
昼下り猫もあくびをうつされる　隆
流行にのらず野菊の好きな妻　一風
炎天を流れる蟻の労働歌　章
サラ金が明日だ今日だと喧しい　鬼遊

岸和田川柳会　芳地　狸村報

憶測で話して噂に尾ひれつき　こう
憶測がはずれて独楽がまわらない　小紋
憶測が煮つまってきた妻の午後　月子
憶測でものを言うなと亡父叱る　柳宏子
夫婦でもルール違反許されぬ　牧子
浅知恵の違反は直ぐに露見する　二南
真っすぐなキュウリ自然に反してる　文時
パンチパーマ違反覚悟で突っ走る　勝晴
争点をうまく引き出すまとめ役　狸村
宗教の争いにさえ血の匂い　萬的
母さんも少し浮かれる祝い事　ひで
チンドン屋うかれて踊る訳でない　甘平
親のいぬ里だんだん遠くなる　さよ子
魚釣りの醍醐味遠くても走る　浪速子
遠くても母が住むから帰る里　通彦
遠ざかる背なへゴメンと不肖の子　冨志子
姑の耳の遠さは信じない　白光子
遠くからながめています好きな人　恵空
縁遠く紫ばかり好む女　一弥
通勤に時間がかかるマイホーム　武助
埴輪の目宇宙の果てを見るごとし　天笑

川柳化粧櫓　植村客遊子報

指切りは嘘だと知っている小指　岳詩
駄菓子屋の老婆に遇えたくにの町　サワ子
戦友会背筋のばしてはでを着る　大鷹
それなりに恵まれながらこぼす愚痴　遊峰
余白なお燃える火種を持っている　朱玉
天気予報　予報するのは神でない　葉香
ぼけてから気丈な母も涙する　礎石
三八銃と玉音放送聞いた夏　悲子
玉の汗したとも知らぬ呱々の声　三青
老体は食べてる割に力抜け　永楽
年寄と若いの気持ちぐはぐに　はる女
土用の丑　老いも鰻で精をつけ　春蘭
ご隠居がやたらに動き嫁困る　美代
飲めぬ酒飲んで酔いたい時もある　嘉
灼熱のプールうごめき涼を呼ぶ　茂章
自画像は短い首を長く描く　姫女
枝豆の殻が山なす塩加減　はる子
芸なしに一つだけあるお人好し　好花
口喧嘩してもご機嫌すぐもどる　三重
〝建て前〟が本音に変る縄のれん　一典
貴琴で尾張名古屋の場所は持ち　治夢

ネクタイへ僅かな季感しめている　客遊子

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

青春にかえり応援する野球　スミ子
男にもかけこみ寺が欲しくなる　節子
原爆忌鳩の水浴び見て飽きず　静江
やりこめて悪い後味だけ残る　庸佑
友情を繋いで千の鶴にする　恵美子
腹立ちを書いては消して投書せず　行平
限りあるいのちを思う風の宿　正坊
地酒よし毛がにも美味し北の宿　〆女
宿の下駄履けば旅情の音たしか　よ志子
窓際となり友情も目をそらし　春風
気短かで西瓜の種をプイと吐く　紫香
友情を金で済ませた透き間風　萬的
たこ焼を片手に入る踊りの輪　杜的
蟬の声聞いて茶店の冷やし飴　芳子
約束の指が重荷になってくる　英子
火の粉浴び逃げた話を伝えよう　栄子
半袖が西瓜半分たいらげる　しげお
巡拝を重ね罪の荷軽くなる　武庫坊
畦道へ河内音頭が風に乗る　年代
荷ほどきを渋りたくなる送り主　二南
耕うん機夕焼浴びて今帰る　漠沓
割り勘という友情を温める　冬葉
童心にかえり手を振る川下り　茶の子
お荷物にならぬと今日も米を研ぐ　透太
軽い靴履いて重荷を捨ててくる　諷云児
露天風呂鮎釣る人が見える宿　白渓子

サークル樗樗　友碇　雅子報

色鉛筆自由に虹が描けそう　今日子
捨て犬に家族の情がわいてくる　美子
鉛筆を時どき舐めた亡父のふみ　智恵子
鉛筆も喜怒哀楽を共にして　ます子
結び目が解けて吹き出す春の風　三四子
人情も少しは分かる年になり　輝子
許し合うたび結び目が増えてゆく　美緒
負けそうで心の鬼と手を結ぶ　泰子
強がりがそっとおみくじ結んでる　雅子
勉強せず鉛筆ばかり削ってる　千代女

川柳東大阪　森下　愛論報

晩年の坂はいたわりもっている　湖風
親に背いた二人にきついきつい坂　孤舟
侮った坂に手痛いおくれとる　柳宏子
あと継ぎのない名人の深いしわ　美子
名人にさせた清貧だってある　勝美
名人のへそは少うし曲がってる　度
子供らも大変なんだ塾通い　文秋
夏の化粧女は大変だとおもう　晋吾
大変なとき子がいない夜の不安　隆
サァー大変布団の地図に子は慌て　愛論
過信した一気はいつも墓穴掘る　猪太郎
屁理屈を一気に喋る孫の口　辰蔵
書道展一気呵成の字が読めず　雅士
口あけて笑う集いはきっとギャル　翠公
ふとある日ギャルの心に悪が棲み　真柳

演技派のギャルにきびしいドサ回り　白屯
お互いの年を坂では隠さない　二南
ホッとする頃が危ない夫婦坂　頂留子

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

空き家でも時を忘れぬ花が咲き　秀香
初採りの桃だと娘から宅急便　ふさえ
いらだちを花一輪に癒される　伊久栄
握手した数程票は集まらず　すみれ
選挙カーうぐいす嬢の谷わたり　吟平
祝宴の用意が出来ていた次点　志重
選挙カー女性の数を見逃さず　恒心
年よせてふるさとの友つのる思慕　㊀美恵子
ふるさとは懐かしものよ山や川　甫正

佳句地十選（9月号から）

神谷　凡九郎　選

序列もう始まっている三歳児　精子
不用心なところもあっていい女　三枝子
すっぽん鍋　女の箸を割ってやる　しげお
一匹の蠅がいてまだ来ない蕎麦　叶
人生は無休と笑う日曜日　静子
五歳の理屈　兜を脱いだのは大人　寿美
倖せは夫婦ゲンカの出来る人　明人
芝居見てうな丼食べて五十銭　三郎
煙突は男　言い訳などしない　美房
鬼一〇〇匹飼って女の真っ盛り　森子

ふるさとは心やすらぐ母の味　山人
古里の山川草木みな温い　半仙
ふる里の小道懐かし湖底村　邦人
星祭り母思い出す芋葉露　江山
そして秋潰しのきかぬ生一本　賛平

尼崎小園川柳会　立谷勇次郎報

木挽歌聞くと心に灯がともる　修水
達筆の掲示寄付金恥ずかしい　弘治
オジンギャルに乗せられ更ける歌酒場　伊三郎
カラオケの友がだんだん増えてくる　夢之助
大根の輪切りふつふつ煮えている　紫香
世界中人それぞれに歌を持つ　いわお
童歌テレビの母は動かない　向西
片乳房切って女でまだいたい　六浦
切札があって正面さけている　十四郎
髪切って出直しをする五十坂　歌子
古希が見えカラオケマイクに息が切れ　勇次郎
達筆の便りに返事書きそびれ　ミサ子
しとやかな女が見せる男舞　キク子

川柳後楽吟社　従野　健一報

懺悔まだ千の仏を彫りつづけ　草風
大欠伸何か悩みはないですか　拓治
話はずんで遠い景色にいる二人　義親
人のため世のため尽くせば若返る　たけ志
美術館眼にご馳走をして帰り　柳五郎
言葉には出さぬ本音が滲み出る　哲郎
使わねば未完の根回し切れかかり　博友
飲み干して男本音に少し触れ　浄美
九十がそこ山ほどのしたい事　吟平
宿題を今日もあしたへ送り込み　金吾
缶ビール一本老いの遠花火　美智子
野の花と語る与作のちからコブ　正秀
風呂上りひいきチームの美酒に酔い　桃風
球児の瞳キラキラ光り夏の雲　玉水
一筋の煙故郷はのどかなり　佐加恵
躓いた石へ拳をふりあげる　保男
逆風に向って歩くおとこ下駄　健一
銀婚の指輪で芋の皮をむき　青銅
向日葵が睨むと太陽笑い出す　秋月
指輪よりピアスが好きと妻は言い　吉則
やがて虹働く汗が心地よい　照路

川柳高知　川竹　松風報

近く住み親子それぞれもつ自由　竹萌
東京がこんなに近い夜行バス　京子
車窓から太平洋へ深呼吸　さち
逢いたいと書いて素早く封をする　春枝
独り言いうて自分をなぐさめる　菊野
寝たきりの祖母に添い寝の預金帳　功
松葉杖はげまし合いつつ今日を生き　春童
長寿本読んでその気にさせられる　幸泉
紅一つ贈られ社会へ出る娘　有佳
目薬を入れた涙を見やぶれず　千恵子
メルヘンの六法守る針の山　朱坊
母の手にかかると針が生きてくる　佳風
針を刺すように言うから気に入らず　憲一
腹心が持っていたのは含み針　圭風
献血の針から命救われる　松風

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

定年へ時計のベルト穴をつめ　四郎
あと何日孫帰る日のカレンダー　タミ
太閤の夢も修復名護屋城　朴竜
故郷の美景を客に教えられ　弘
背中踏む今年の孫は重過ぎる　幸夫
若いのが来るとテレビも小さい声　虹汀
鳴かぬ蟬生れたばかりか美しい　ハル
耳穴に虫が一匹居るらしい　高明
鬼面の八月の眉つり上がり　義美
優しさがピンと胸打つラブレター　喜久亭
老いの坂薬を友に生きている　治幸
曳山の向う鉢巻男たい　紀一
順番がきても私はまだ死なぬ　ちよ
優しさを他人より貰う老い独り　ふさ子
止り木に我が存在の小天地　正敏

川柳岩出　小倉　アサ報

産声の裸老舗を背負ってる　和子
鰻重をほおばる父の玉の汗　精子
安らぎが欲しい余生の宮参り　昌子
口ぐせは裸一貫たたき上げ　紳一郎
宮大工死しても名だけ言いつがれ　達子
うなぎ好きなのに高いと鰯食べ　幸子
この暑さ一つ脱ぐだけ裸なり　正直
赤ちゃんの裸みんなの人気もの　瑞穂

うなぎ屋が出番待ってる土用うし　春子
宮大工苦心の作をなでて見る　千鶴子
宮仕えなみなみならぬ苦労です　千代子
嘘の無い裸の水に居る世界　喜市
友情は裸心の奥で咲く　悦男
手づかみの鰻するりと取り逃す　保志
何故かしらお宮へ鳩が寄ってくる　英子
代々木から腕こだまする宮大工　綾子
故里はやっぱりいいな宮太鼓　与呂志

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

真心の赤い糸から救われる　八重子
うちの孫真珠のような瞳です　保子
真面目すぎ人も私もつかれ果て　松子
真実を話せる人が二人いる　富美子
真実はお月様には話される　ゆき
ワープロでこの真心は通じるか　玲子
真実を知って広がる青い海　千春
親が喚ぶ真理の道を真直ぐに　朗子
真実をチラリのぞいた庶民の目　寿々子
真を問うバブルの山が崩れ出す　恵子
喉ならす猫は真心見抜いてる　花子
真上見るアゴの無防備気づかせぬ　日枝子
逆もまた真か逆上りに挑む　千代
やや錆びて真実鉄の貌となる　荒介
母の真価は天へ昇ってから解る　瑞枝

岩美川柳会　羽津川公乃報

海と生き男のロマン捨てられず　民子
目を閉じて見るふる里の青い海　照女
望郷の海は亡母なる顔で待つ　美代子
太陽が沈むノルマへ焦る靴　美恵子
太陽の笑顔を眺め布団干す　嘉津江
まっとうに生き太陽に逆らわぬ　公乃
火の海も子のためならば飛び込める　芳江
海に散った恋がサンゴに身を変える　八千代
太陽を背にして謀反くわだてる　單車
太陽に向かうともろい牙がある　忠良
太陽の手前もあって嘘つけず　大漁
日本海の波で養殖漁が太る　たけし
太陽の陰から文句ばかり言う　螢

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

しじみ鍋ことりと鳴った夜のしじま　度
真夜中を島の初発へ荷拵　章
読み耽りもう夜半かと栞入れ　しんじ
母の記憶いつ目覚めても針仕事　三男
食欲が徐々に回復して喪明け　欣之
下心あって食欲ないお膳　一風
食欲旺盛月の輪熊は冬支度　勝美
食欲へ手ぬきをしない母の鍋　夕花
塾通いおにぎり持たす二食分　雅士
食欲をじっと抑えて星にらむ　律子
食欲にソッポむかせて居る持病　頂留子
食欲にギブアップする皮下脂肪　正子
青田刈りのドアーが誘うあまい詩　まさお
ドアひとつ隔ててみんな城を持つ　英一
ドアに声掛けると今日は負けになる　悦郎
ウエルカム　ドアはいつもあけてある　重人
すがってはみたがドアが開かない　泰
厚化粧落して月に会うている　美津留
汗匂うおがらのような昼の月　弘直
まんまるい心でみればまるい月　朝子
ふるさとの井戸の名月見に帰る　美幸
満月の真下老人ホームの灯　隆
ふる里へ戻れと言った昼の月　雀踊子
じいちゃんに勝つばあちゃんが嫁に負け　シマ子
負けて勝つことも覚えて世を渡る　かつみ
負けてやるつもりで撒いた塩の量　滋啓
姑さんに勝をゆずって平和なり　春子
満身の力で勝った息使い　二南
夜半の声虫の声だけ耳につき　茂樹

川柳ささやま社　遠山可住報

しあわせを運んでくれた花便り　とよ子
大金にほど遠いけど腹に巻く　恵美
熱のある手を折り紙がなぐさめる　美智子
ひとしきり粘って上座へ押し出され　つや子
思いきり練っても届かぬ亡姑の味　ヒサ子
負けて勝つ根性を練る冬の部屋　和子
練りすぎた策へ自ら落ちてゆく　貞子
生命の粘りが峠いくつ越す　靖子
嫉妬かも知れぬ微熱がおさまらず　とみ子
熱さめた愛だがその後気にかかる　百合子
情熱に炎えて陽気な妻の笛　テル
自然には勝てず対策練り直す　越山
三百度の熱も目減りの五十年　文平

冷や飯が腹にたまっている粘り　可住

西宮北口川柳会　林はつ絵報

虫の声秋の夜長を持てあまし　キク子
湯上りの麦茶の量が減って秋　富喜子
本積んで秋がだんだん深くなる　透太
ゆきつけの店に並んだ秋だより　ミサ子
万歩計散歩の径を変えて秋　白渓子
晩夏動かず秋の草花うろたえる　武庫坊
教会の尖塔秋の風白し　みつ子
裸婦像の乳房を秋が吹き抜ける　正坊
曼珠沙華母の白髪の目立つ風　〆女
言いすぎた後悔のあり髪洗う　能子
少女多感髪の先まで物思う　年代
断髪の鏡ふと若き日の艶想う　千世子
値の高い薬効くよな気の述い　江美
うす味で高血圧のがまんする　トミエ
高みから人間界を見る仁王　房子
気位の高さ団地の爪弾き　柳影
高層ビル並んで町が枯れてゆく　英子
あの高いポプラ母校と母若い　て る
ボス猿が今日も一番高い木に　求芽
水煙の高さに夢がある匠　芳子
雑草を逃れて孤高の花桔梗　春蘭
声高な電話へ勝ったなと思う　しげお
高い樹の影で安心して眠る　たず子
ほら吹いた虚しさ酒で埋めてる　宏子
水いらず茶の間に丸い風が吹く　諷云児
残り火を吹いて余生は華やかに　よし津
森を吹く風にも明日がわかろうか　はつ絵
優待パスちょっと会釈して降りる　杜的
愛してるかすかに聞いた花の芯　いわゑ
ぽろり出る言葉の端が我が本音　紫香

尼崎小園川柳会　立谷勇次郎報

引出しで亡父の財布徴びている　十四郎
旅二日財布も軽く家に着く　六浦
孫の顔財布のひもを緩めさす　いわお
王様の財布小銭を入れてない　紫香
老いの意地ときには淋しいこともあり　修水
下積みの意地が見せてる虹の橋　歌子
意地張ったばかりに立った崖っぷち　澄子
京の膳職人の意地かい間見る　ミサ子
指先でつまんだ塩は母の味　弘治
退職後味にうるさい日を送り　利勝
味な事言うてはるけど野暮な人　キク子
便利さが受けて兵卒のまま終る　隆
便利ならお使い下さい粗大ゴミ　勇次郎

川柳塔わかやま吟社　牛尾緑良報

叱らない父の静かな目が苦手　柳宏子
世渡りが苦手な父の立ち泳ぎ　保州
苦手など言うてはおれぬ朝の靴　栄美子
苦手から先に退治る箸の先　公子
嫁はすぐ苦手な孫を出してくる　紀美女
理数科は苦手文科に的しぼる　瑞穂
泣くよりも辛い演技をする笑顔　アサ
思い出し笑いが夏を締め括る　紀久子
一しきり笑って涙ふっと出る　呑天
目も口も無い紙人形の笑い顔　静代
去る時のにっこり王手かけてくる　輝子
話題となる恋をも一度して見たい　登志代
話題など無くとも側に居る安堵　綾子
話題にもならぬ男の背が丸い　高夫
取って置きの話題で風を巻き起こす　光代
身に覚え有って話題を変えたがる　二南
花の咲く話題コツコツ耕そう　寿子
今聞いた噂話題にして弾む　三千代
晩酌は話題豊富で飽きぬ妻　精子
温かい話題を包むにぎりめし　好笑
ふるさとの話題で心暖める　克子
泡ほどの重み週刊誌の話題　正博
分けられた株に芽を吹く蘭の意地　鉄治
形見分けおだやかにかつ狡猾に　和成
嘘本当見分ける鏡持っている　和子
悲しみを分ける枕が二つある　信子
千体の仏と分けるにぎりめし　英子
苦しみを分けてやわらぐ夫婦坂　豊太
野仏に分け合ういのち見守られ　由紀子
○×の答えで仕分けできますか　武雄

城北川柳会　吐田公一報

潔い血が女の誇りだったとさ　秀夫
試歩の日の大地を一歩一歩ずつ　静歩
これ以上積めない積木おもしろい　典子
苦労知らず日本の行末案じられ　千世子
交際もせずに隣の高い塀　史風

地のまんま心を宥す友が居る　満津子
家族の笑顔願うキッチン今日も立ち　温子
御先祖に私語の願いもかける盆　佐津乃
輪の中ではみ出している血のめぐり　昭子
鼻血よく出した学生頭はげ　寿美礼
いつか地に帰る命を慈しむ　ふみ
去った娘へ胸の風穴ふさがらず　きくゑ
見送った尾灯に心ついて行く　白峰
ザクロの実きれいに弾け絵に写す　登美子
野仏に恋の煩悩捨てに行く　八重子
恍惚になったお顔が美しい　倫子
O型の母似でゆったりした娘　達子
雨止んで人が湧き出る戎橋　新一郎
止り木の高さで威張る九官鳥　ただし
イミテーション似合わぬ母にある気品　公一
本心は見せぬブランコ高くゆれ　静子
あざやかな絵筆のあとの夏見舞　春蘭
あちこちを掘れば歴史が顔を見せ　小夜子
夢持とう白い夏の明日がある　右近

京都塔の会　松川　杜的報

ばあちゃんに甘えるこつを子が覚え　芳子
子育てのこつは愛だと昔から　福子
仲直りさせるこつには酒が要る　白渓子
教える方も口では言えぬこつが要り　求芽
火をおこすこつを猿には教えない　武庫坊
こつなどと言うほどでない豆を煮る　年代
金庫開けるこつは妻だけ知っている　百合子
餅屋は餅屋何にでもこつがある　杜的

金網の向うに核が置いてある　透太
夜の蝶の網にかかって見たくなる　英子
肌を焼くための水着の派手な浜　栄
焼き捨てた筈の未練が絡みつく　諷云児
鮎焼いて貴船涼しい風が吹く　紫香
順番につぼみがひらくドレミファソ　〆女
順番を教える親が守れない　ミサ子
電車来た途端順番乱される　圭坊
仁王解体一々順番つけてある　萬的
順番を譲ると空が晴れてきた　正坊
順番をかえるビタミン剤を飲む　しげお
いつか来た道だと思う立葵　水客
盆踊り老母の微熱がまだ続く　花代子
艶やかに汗天神さんのギャル御輿　達子
深爪を剪って亡父想い出す　笑女
波はただ蒼く語らず十和田湖よ　てる
網の目にかかるは何時も雑魚ばかり　巨詩
網の目を逃れられない雑魚の群れ　ただし
フォーカスの網が待ってたスキャンダル　飛鳥
法の網きれいに抜けている美学　歌子
炭買うて七輪買うて秋刀魚焼く　倫子

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

くどくどと言いたい時ががまん時　美智子
デートだな唇赤く染めている　寿満湖
くどくどと言訳をして怪しまれ　康子
塩かげん今日の機嫌が左右する　よしえ
くどくどと言わぬお方でおそろしい　勝見
円満な夕餉に蟹の爪が出る　康志

黒幕が下積みの汗吸い上げる　ひさ子
うちの黒幕奥で一升空けている　節子
塩加減教えて娘嫁にやる　かつみ
円満を家訓にまるい膳囲む　喜美子
くどくどと他人の噂がおもしろい　螢
円満な家で五右衛門風呂がある　石花菜
黒幕がゆれると貉顔を出す　とみお
唇をなめて勝負に立ち向う　秋人
ひょっとして黒幕女かも知れぬ　秋女
黒幕が雑兵たちをおどらせる　御前
四季に合う色を唇知っている　独歩
雨降って円満な日がまた戻る　和枝
何事も上手に忘れ丸く住む　ゆり子
黒幕は教祖さまと同じかな　菩句

いずも川柳会　吉岡きみえ報

三代目金の卵をあたためる　流石
女房の留守でも出来る卵めし　幸一
放し飼い隣家の納屋で産んでくる　草丘
卵売り卵を割ったことがない　雨学
迫られた離婚に印は押すものか　律子
慎重派たらい回しの判の数　まこと
印鑑を押すまではお世辞ありったけ　水煙
印鑑が老母の年金空にする　房子
だまされた女印鑑はなさない　昭二
三文判一つで僕が決められる　茂美
片棒を担いで汗を振り分ける　多賀子
笛の音を聞くと幸せ湧いてくる　蘭水
わたくしの笛では誰も踊らない　肇

長老の笛に合わせて山車を押す　篤子
自分史に進軍ラッパの音を書く　重昭
口笛の中に自嘲があると見た　裕
さあ妻よラストダンスの笛が鳴る　寿美
笛吹きに会って思わずおじぎする　きみえ
次郎との別れ草笛吹いてやる　章峰
明日からは少しはましな笛鳴らす　多輝子
どの笛も一人ぼっちにしてくれる　元之介
笛吹いて胸の空気を入れ替える　桂子
潮騒と渚が作る海の詩　芳正
父母の霊渚径由で来た仏間　青湖
戦いの空しさ渚に黒い波　知恵子
私もガラスの靴を履く渚　寿美子
酸欠になると渚を走り出す　文子
青春が夏の渚に湧きあがる　ちかし
あひるとも知らず温めている巣鶏　代仕男

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

屋上で布団叩いて憂さ晴し　キク子
屋上で星を数える熱帯夜　年代
月が出て屋上虫のシンフォニー　伊三郎
退けどきに屋上で待つ冷めた恋　正一
しきたりの森を王様抜けたがり　園歩
王様の今日たこ焼を所望する　杜的
王様がひとりで菓子を食べている　紫香
王様も絵日記はまだ描いてない　作二郎
型破りの処がいいと言うお世辞　敬
落ちぶれた影に漂う難破船　文夫
レコードを破った足のたかぶりよ　静夢
ほおずきを孫と一緒に芯をもみ　正子
殻破る蟬短命で鳴き終る　六浦
金魚すくい破れて泣いた父の背な　薫
信頼の情けで始末書破られる　澄子
張り終えた障子に指の穴二つ　ミサ子
約束を破ったあとの自己嫌悪　敏之
記録破ると孤独の道が広くなる　武庫坊
コスモスがかすかに揺れる破局の日　〆女
愚痴言うてみても夫は墓の下　栄
炎天下日陰はすでに秋の風　勇次郎
盲点をつかれ自分を見失う　英子
古着にもプライドがある値札付け　芳子
宿題はみんなできたかお父さん　保蔵
秋灯下恋愛ものが面白い　歌子

川柳塔鹿野みか月（9月）　土橋　螢報

如何ともしがたい杭の前で寝る　夕峰
ごきげん如何遠くの便りたぐりよせ　正恵
人間の皆さん檻の外いかが　盛桜
おれのハート盗んで如何なさるやら　諷人
不器用な彼がとっても好きになる　みさ子
私も数えておいてくださいな　きみゑ
髪と爪墓に戦死の兄ねむる　房子
初恋の彼がなかなか眠らない　富恵
空もよう如何なものかと鍬を持つ　久枝
輪の中に金髪もいる村祭り　幸枝
如何ですプライド捨てて笑ったら　くに子
想い出のまんまで彼が去ってゆく　正道
喜々としてボランティアする友とする　しげる
責任をとれと野党に噛みつかれ　明美
ボランティア一人一つの輪の中に　信江
不意の客手抜き料理で愚痴を混ぜ　弘子
如何にもと父の笑顔に救われる　智恵子
朝顔の花を数えてペダル踏む　百合子
デートです彼に誘われ遠出する　三千代
如何にして努力したならむくわれよう　幸江
夜の食卓家族そろってにぎやかい　静江
暇だから昼にシャンプーしています　節子
髪染めて二十一世紀を待つか　八重子
束ね髪亡母の匂いがする小川　隆風
まだ減るのかも心がかりな髪洗う　汲香
髪一本明治の祖母はみださない　睦子
美しく生きるあしたへ髪を梳く　かつ乃
固い頭は獅子舞いが噛んだから　喜与志
彼と呼ぶ人をたくさん持っている　早苗
余命表楽しい色で消して行く　みさ江
数えるのがとても上手な肩たたき　きみ子

おっぱこ川柳会　木村　明人報

逆らっていると流れに遅れそう　迷観子
壁掛に下手な川柳威張ってる　明人
夕立に宿を貸してる地蔵堂　吟笑
夕立の後はスカッと虹の橋　よしみ
泣けてくる涙を星にのぞかれる　マサエ
振り上げた降ろすコブシに要る勇気　ひかり
稲光り空が割れたと孫の言う　放任
眼を皿に乗換え乗継ぎやっと着き　伽名子
匿名で美談にのこる多額寄付　ふみ

選挙では一番イヤな町議選　迷　貫
人生は必ず壁にブチ当る　小四菜実子
子猫来てテレビゆうゆう夏休み　スミエ
夕立だ話のつづきまた明日　かおり
控え目な母の日常話してる　チカエ
夕立でデートの場所を取違え　いさむ
我が家計誰か補てんをしてほしい　正　雪

静岡川柳塔　永倉　僕川報

責任感何度も錠を確かめる　弧　猛
孫台風去って寡黙な老い二人　正　秀
咲く花の笑顔包んでいる蕾　金　雄
誤解する情熟消えた老いの坂　吾
内緒事聞いて口には鍵を掛け　た　ま
年金が増えて仏に礼を言う　た　き
夏休み電話料金跳ね上がり　つ　ね
一徹の父へ妥協の余地がない　き　ん
一言に返る恨みの多いこと　まつゑ
妥協してストレス溜まる日の散歩　静　代
スペアキー預けてあなた信じます　久　子
流れ出す油へ海は妥協せず　柳　華

川柳藤井寺　高田美代子報

ポンポンと小鼓冴える薪能　ときお
食べたくないポンポン痛いと子は方便　宗　一
世の中が皆駈足で息が切れ　昌　子
駈足で過ぎる余生を惜しむ老い　キミ子
名騎手を背にし駿馬は駈けたかろ　みのる
駈け抜ける足音を聞くマイペース　昭　子

グランドを駈ける栄光つかむまで　比呂志
外科病棟　夢は元気に駈けている　三　郎
駈けっこのビリを案じたままで逝き　与呂志
戦場を駈け一匹の鬼となる　一　屯
駈けてくる和紙人形に汗を見る　柳　太
駄馬駈けて今日を生き抜く貌となる　治　子
幸せな風は斜めに駈け抜ける　森　子
ぼんやりと敵の手口が見えてくる　利　武
ぼんやりと思い出してる終戦日　てつお
追憶に月もかすんでロマンめく　政　代
ぼんやりと意識の底の桜貝　トミ子
ぼんやりの亭主うるさい女房にささえられ　智　久
ぼんやりと釣を見ている春の川　作　秀
ぼんやりに見えて油断のならぬ奴　志　洋
ぼんやりとしてはおれない棒グラフ　三　夫
ぼんやりし皆に越された出世道　修　六
時にはぼんやりみどりに溶け込もう　寿美子
ぼんやりにファウルボールがとんで来る　たかし
ぼんやりと生きるしぐさも忘れがち　きよし
ぼんやりと過ごしていても腹は減り　繁　男
ぼんやりと星降る夢を見つづける　しげお
真相がぼんやり見えた点と線　寿　美
本当の悪がぼんやり見えてくる　美　房
ピンボケで私も美人の仲間入り　悦　子
ぼんやりと座る日多くなる残暑　吸　江

翠　洋　会　井上　照子報

うさぎ小屋にも極楽の余り風　正　坊
涼しげに着こなす母と夏芝居　千　歩

約束した涼しい瞳信じよう　さと美
秋風が吹けばコオロギ恋をする　東　雲
さわやかな秋風に舞うしだれ萩　すすむ
秋風に隣のさんま乗って来た　ひろ子
秋風が喋る言葉を選ばせる　光　子
秋風が気にかかります恋心　綾　子
秋風に号をつけると暴れ出す　拓　生
庭に灯をつけて自負する中の上　兼治郎
好きやねん道頓堀の灯も寄席も　宣　司
灯を消して今日の反省して眠る　凡　子
山小屋に吊れば風雅な裸球　蛙
家中の電灯つけて独り居る　みつ子
心の灯信じて母は待っている　宏　子
近頃のゆうれい太い足がある　良　江
冥界をすこし覗いてきた男　英　一
幽霊が妻に内緒で逢いに来る　透　太
幽霊の棲むマンションを買いたたく　恭　昌
お化け出る話団扇で叩かれる　正　雄
ゆうれいになる汗だくのアルバイト　登志実
幽霊になって出るほど惚れてない　楓　楽
幽霊が騒がし過ぎて出られない　しげお
幽霊の影は戦車と共に来る　春　子
お話をするみほとけに灯を点し　鬼　遊

川柳塔まつえ吟社　恒松　町紅報

ポイントを少しずらして良い夫婦　米　子
ポイントへ駅の時計は正確で　雀踊子
ポイントを狙うレンズを拭いている　かおる
ポイントをきれいに散らす夏花火　義　良

低い鼻わたしのポイント真ん中に　きみえ
ポイントをおさえてからの見せどころ　登志子
家の味変えた嫁は栄養士　鶴丸
ニンニクの味できまっていた謀叛　重昭
過疎の味ほめて過疎には住まぬ肚　たつみ
いぶし銀　味でいうなら燻製か　友子
色彩のバランス味を引き立てる　一葉
究極の味を求めて旅に出る　拓
人並みへまだ不足言う罰あたり　満江
人並みの絵に炎の彩が欲しくなる　雄々
人並みに育てたはずの子の不満　ちかし
人並みに育てた老母の束ね髪　房子
人並みのことなら私もして見せる　早苗
人並みの暮しにテレビ二台ある　小鹿
用件を忘れるほどの長電話　静恵
よくもまあ筆不精などと長電話　芳枝
雨女電話で予報確かめる　多賀子
淋しさにあちこち電話掛けまくる　みえ
電話口丁寧すぎて聞き違え　静江
一本の電話わたしを眠らせぬ　文子
うっかりと吐いた一言尾を引いて　畔
うっかりと乗ってしまった口車　太泡
うっかりと網にかかった蝶の悔い　長三
うっかりと帰り忘れた昼の月　寿美子
年齢をうっかりしてた腰の骨　与根一
うっかりと実印出してから不運　叮紅

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

炎えている屋台骨には冬がない　芳枝
エアコンへ布団着たまま眠りこけ　聖子
エアコンを毛嫌いしてます自然主義　ちよえ
生きたくて切られたうなぎ駄々をこね　はるみ
養殖のうなぎ運命知ってるか　歳栄
子育てもすんで自由な屋台骨　民子
そんな日も後へは引けぬ屋台骨　鈴江
生かされてうなぎは河で昼寝する　かつ子
エアコンのブームにげたか扇風機　ヒデ子
ふり返る程のことなく夏も過ぎ　悦良
エアコンが留守でないよと言っている　博利
窓越しの涼風エアコンに立ち向い　清泉
見栄張って付けたエアコンはっくしょん　白汀

川柳ねやがわ　高田　博泉報

おだてられ乗って梯子をはずされる　庸佑
母ちゃんの天下になってから平和　一芳
流れ星慌てて祈る願いごと　亜也子
駐車場山を神秘にして置かず　覚然坊
坊さんは滅多にかけぬサングラス　眉水
星に未練残し旅する山頭火　雅文
黙とうが流れを変えた甲子園　三郎
いいムード壊す無粋なサングラス　時弘
泣いた顔見せぬお前は影法師　高栄
平和憲法だから自衛隊を志願する　勇太郎
青い空汚すまいぞえ軍用機　波留吉
黙祷に蟬鳴き止まぬ終戦忌　光子
打ち水へ小さい秋を告げて虫　一途
定年にきれいだなあと思う星　えいめい
色めがねで物を見るなとさとす父　頂留子
お隣があおぐ扇子で涼もらう　あいき
知合いの知合いが出る甲子園　藍子
二センチの隙間を残し駐車プロ　菜月
平和っていいな女がみなきれい　速水
違反キップ妻に悟られないように　かすみ
意地少し張っているようなサングラス　勝一
ふところ手解けば思案が崩れそう　吉之助
お住職さんと同じ病気の話する　あやめ
戦争をテレビで体験する平和　半蔵門
老いた星あっさり捨てる若い妻　良三
いくさなど知らぬ茶の間の置時計　度
平和だな警察犬もあくびする　紫香
縞馬よ暑くないのか美しい　薫風
満天の星よ逢いたい人がいる　礫
駐車場ベンツの横が空いている　おさむ

おっぱこ川柳会　木村　明人報

冗談が出てからペット上機嫌　迷観子
老いて尚燃ゆるものあり髪を梳く　明人
行詰りやっぱり老母の知恵借りる　ひかり
台風が秋の涼しさ連れて来る　よしみ
楽すれば高くつきます農繁期　正雪
山育ち清楚さだけは負けぬ萩　吟笑
花の種隣の庭で威張ってる　チカエ
大丈夫かと声かけられて出るお風呂　スミエ
カッポウ着付けた娘に色気さし　放任
萩が咲く月とじっくり語りたい　マサエ
可憐花秋の誇りとみだれ萩　ふみ
ダルマさん遂に片目で終りそう　迷貫

時間割ないが時には徹夜して　伽名子
暖かい妻の言葉を背に受けて　いさむ
目の色を変えた紙切れ腐り出す　かおり
盆踊り心浮かれて振る団扇　（小4）菜実子
心根がキレイな嫁で今日の幸　白柳子

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

カラオケにスナック年が若くなる　敏之
天才が汚い恋を抱いている　澄子
物言いがついてカメラに裁かれる　すみ
定期便のらぬ人情の吹きだまり　十四郎
松茸が出たぞ一番乗りをする　歌子
夏やせもばても知らない妻の箸　勇次郎
ひやかしの手相図星をついている　夢之助
杖ついて石段昇る老いの坂　向西
松葉杖両方使ってサッカーの子　いわお
杖つけば杖もつ人が目に入る　保蔵
隣から杖ついて来る曽孫見に　昌子
孫みんな集うて温い長寿杖　弘治
やれやれと杖と一緒に家に着く　六浦
挨拶もゆっくり交わす白い杖　紫香

聴障川柳　稲田豊作報

旅立ちの準備に樒植えました　豊作
メッセージつけて風船空の旅　文古
家族旅行留守番電話活躍し　末子
わが旅路今日から古稀の靴をはく　八恵子
一泊の旅常備薬もお供する　美乃留
捨てて来た恥もあります旅に出て　静子
ついの旅いつになるかとふと思い　真女
青空へ自由ふくらむ旅支度　鏡香
カブの孫寝袋持ちて四国一周　みつる
まだ磨き合わねばならぬ夫婦旅　三香
世界中旅してる気でテレビ見る　柳香
川柳も一緒に流転の旅をする　進一
耳君と一緒の旅がしてみたい　行江
祖母の旅孫の頭を撫でて出る　たみ
有りあまるお金で旅がしてみたい　健太郎

南大阪川柳会　金井文秋報

無知だから乗り越えられた山もある　楓楽
生活の知恵たんともつ無知な老母　公一
我が無知をわかっていても腹が立つ　章久
世渡りの術には無知な芸の虫　寿美
あたたかい話がはずむ無知と無知　度
無知だから辞書と切っても切れぬ仲　文江
無知ですと言って世間を丸く生き　憲太郎
無知な程素直に受ける弥陀心　清水
火祭りの闇こめかみを清浄に　作二郎
不意に来た訳はうすうす感じさせ　庸佑
暗転の不意にちちはは化けて出る　美幸
神のいたずら不幸は不意にやってくる　直子
不意に来て愉快ゆかいと飲んで去に　頂留子
不意に来て母を叱って祖父帰る　覚然坊
砧打つ響も消えて過疎進む　柳宏子
足踏んで東京弁で叱られる　哲矢
ウナ電を打たねば急場凌げない　二南
後味の悪さ悔いてる平手打ち　勝美
安全地帯で有力者を選んでる　凡子
有力なコネを頼りにして辷り　重人
有力視されて消された残酷史　萬的
蟻なりに力を信じ合っている　智子
有力なライバルが居て励まされ　岩信
有力な味方が居ない立候補　シメ子
有力者頼み新聞種になる　トミ子
遺産分けの時にわかった贋の軸　文秋
類似点合ったふたりの逃避行　冬葉
シベリアで病みおとろえて猿に似る　新造
似顔絵の男に似てる髭を剃る　雀踊子
真物は値と相談の類似品　柳伸

川柳はびきの　塩満敏報

負けたくはないので夜も駆けている　美代子
冒険もし給え地球まだ青い　重人
恋はまだ成らぬと見えて秋あかね　絢子
母の忌が遠い過去も連れてくる　吐来
数千億おどる紙面に冷めている　ダン吉
運を天に汗を流してからのこと　胡村
果てしない空のむこうの虹を追う　みつこ
信楽のショックぼちぼち忘れられ　美津留
汚職続発平和日本の暑い夏　昇
父の汗知らずに育つ塾通い　ケイ子
君の名に重ね合わせる過ぎた春　かつみ
ケセラセラ人生丸く過ごしたい　キミ子
新記録作る世界の足駈ける　利武
プラン立てプランで終る夏休み　夏秋
糸とんぼ今年も見かけほっとする　伴子

恥じらいを見せて女は姦しい　たけし
子の家の見える距離の安堵感　泰子
駈けめぐる河内音頭で終る夏　悦子
真夏でも黒い衣裳の悔み客　健三
石橋を叩いてる間につきが逃げ　志洋
高原で一句作ってハイキング　シマ子
今日こそと思う論議に口ごもり　忠宏
還暦が人畜無害と言ってます　敏

川柳大阪　高須賀金太報

切り札が役に立たない妻の口　まつお
年寄りは悪商法の鴨にされ　亮太
無造作に束ねた髪が涼を呼ぶ　徹舟
すぐバレる嘘を入れとく箱がない　柳弘
釣り糸が細すぎ美女に逃げられる　美津留
爪を研ぐ闘志が残るボールペン　我勝
まだ炎える残り火なのに水を打ち　与呂志
逃げ道をひとつ残してあるなさけ　重人
ファジーとは無縁なとこにいる世代　川童
消しゴムのちびりは僕の糧なのさ　洛酔
缶ビール供えてヒロシマの話など　比呂志
授業料たんと納めた芸らしい　敏
天国へ納める銭を溜めている　笑風
顔きかし損失補てんしてもらう　権八
アップでは撮ってはならぬ妻の顔　本蔭棒
もう一度生まれてきてもこんな顔　一歩
小道具をどうされますのソノお顔　凡九郎
顔が効く男は静かに座ってる　天平
ハイレグで短い足を長く見せ　司

長話いいのよ家は全自動　末坊
ミニパンツこれ見よがしの長い足　三吉
長いからゆっくり歩くかたつむり　鉄心
ぼくだって紅顔の美少年だった　金太

サークル檸檬　友碇雅子報

年金の通知は冬の音で来る　泰子
豊作に雀おどしの音がする　ます子
真ん中でもてる顔してみせる　千代女
風鈴の音静かになり秋の風　登美子
真ん中でたくましくなる三人子　美子
そわそわと待ち合せした日も遠くなり　輝子
そわそわと家事おろそかに旅じたく　美緒
真ん中はどうなっているこの地球　キミ
丸木橋の真ん中であう赤い鬼　智恵子
ラッシュアワー真ん中あたりすいてそう　今日子
宿坊の闇夜の中に臓の音　雅子
不協和音そのうち馴れて苦にならず　三四子

打吹川柳会　奥谷弘朗報

鍬洗う平和に赤い日が沈む　野草
平和ボケ交通戦争引き起す　ひさ子
白旗を掲げて妻といる平和　仙岳
世は平和　男性専科の化粧品　白峰
妻も子も元気平和だなと思う　温子
平和とはいいな赤紙もう来ない　静歩
平和だな家族みんながよく笑う　みほの
平和呆け安定剤を呑んでいる　雄々
丸腰で平和となえて攻められず　善政

大自然平和を乱す普賢岳　勝見
平和などゆめものがたり四面楚歌　みをき
悪を生む平和に酔っている政治　小鹿
日の丸の国旗の中にある平和　節枝
日本の平和憲法揺れてます　信子
足元だけは平和な風が吹いている　節子
帰省客去んで平和な日に戻る　幸子
この平和散った友には相済まぬ　康子
折鶴が平和願って今日も増え　孝恵
つつがなく今日も夕餉に手を合わす　喜与志
当り前と奢る平和が恐ろしい　玲子
姉がきてときどき平和かきまぜる　とみお
一年が過ぎて平和な盆がくる　螢
核の無い世界平和を願うだけ　弘朗

川柳塔とっとり　岩原喬水報

生きるのも熱い寒いと言いながら　行男
生きかたはどうあろうとも母であり　艶子
生きている証朝には目が覚める　侑里
もう少し呑み足らないで生きてやる　秀和
生きるため少し不正もやってきた　粗粒
夫婦です知恵貸しあって生き伸びる　山人
つまずいた石が生き方変えさせる　旋風
点滴が生きる望みの音で落ち　喬水
生き方が父の背中に書いてある　圭一郎
妻の愚痴暑さに加え熱をおび　砂山花
熱烈に燃えた球児の夏は逝く　政子
冷房で熱い支援の檄飛ばす　輪多朗
まだ燃える熱あり胸に抱いている　一枝

老いらくの恋だが熱くなってくる　多可志
熱帯夜雪女でも出てほしい　享
ソロバンではじけぬ熱い親心　よしお
陽を恋うて石ころだって熱くなる　螢
酒だけは強く仕事はさっぱりだ　友夫
さっぱりと別れマスコミから逃げる　静生
身辺はきれいさっぱりして辞める　帆雀
義理返しさっぱり縁が遠くなる　俊路
出直しへさっぱり長い髪を切る　由多香

川柳たけはら　森井　菁居報

午前六時ラジオ体操苦手です　小4千枝
ひとしずくコップに落ちた涙です　小6史子
面影よ入道雲はたくましき　蘭幸
戦から戻り戦は口にせぬ　菁居
生きてたら此処にあらずの日々でしょう　房子
足元を飛んで何処へ行く蛙ぞ　麻代
初なりの胡瓜もぎとるうれしさよ　ヤスエ
七夕のこより作りを喜ばれ　一枝
欲捨てたつもりで欲にしばられる　比呂子
盆灯籠くるくる過去は戻らない　喜美子
真っ当に生きても虹に追いつけぬ　静佳
きまったら他人に見えるおぼろ月　浪子
初盆や一入寂し蝉時雨　夏喜
嘘言うも病める人には許される　喜久恵
海水着つけた女の露天風呂　勲
世渡りに資格試験という関所　清水
八十八体の地蔵に願う白い闇　栄恵
ゲート玉はじき出される鬼に見え　愛子
麦茶がぶがぶ下請けの汗となる　笑子
今日一日咲いて悔いなし夏のバラ　淑子
面影がまだ南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏　一路
亡父の靴玄関に置く寡婦の知恵　ふさ枝
「エデンの海」鶴田もボクも光ってた　静風
いい人と言われたくない時もある　伸子
子の寝顔妻の寝顔も熱帯夜　白狐
少し鎖からのがれた女の美しさ　千代美
ドライフラワー淋しい彩に見えてくる　汎美
土曜日も休みでパパが疲れてる　蝸牛
時間よ止まれこのままの年でよい　年子
本家とか今年も墓の草をとり　改己

むらくも句会　藤井　明朗報

ほととぎす一声高く闇に抜け　正朗
敬老会名簿生き抜く勲章だ　芳子
高台に住む夢いまもまだ抜けず　常子
天高し月へ想いを語りかけ　ヤス子
好きだった高嶺の花に添えぬ縁　はる代
この頃の女は強い肩パット　義良
この頃の大手銀行の不都合さ　千里
子を持ってこの頃母の気持知る　百代
この頃は着物たんすに寝せたまま　仲子
うれしさとさみしさ少し敬老会　カツ子
敬老日くるとほんとの秋になる　一葉
敬老会よい老人になる誓い　林蔵
無事着いた発信音が三度なり　ふさえ
人生の荒浪無事に老いの道　寿
面白いひと言白けた座の笑い　節江
無事だろか年賀状での遠い友　昭子
失敗談　他人事だから面白い　八重子
帰省の子無事の電話を待ちわびる　さくら
縁遠い娘の鼻が高すぎる　幸夫
火遊びのやけどが高くつきました　雀踊子
解けていくパズルの鍵の面白い　保子
束の間の絵空を見せる虹高し　秀子
子が真似る背なは厳しさ見せておく　翠晶
信号に頼っていても貴い事故　昌子
三猿主義まねて余生を丸く生き　三津江
ヤッホーと言えばお山が真似をする　幸子
ひとまねの九官鳥にだまされる　峰雪
敬老日　孫のあんまが特に効く　明朗

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

九か月蹴るにもくせのある胎児　哲矢
九回の裏で自分史書き直す　石舟
雪舞台太鼓を打てば降ってくる　薫
向日葵と数歩退って対話する　蕗児
お囃子の太鼓は師匠により違う　明光
頂上を目指す勇気と退く勇気　慶子
引退をしてから関取よく喋り　器水
うたがいが反省ばかりで深くなる　吉太郎
三回忌仏間を抜ける隙間風　一笛
頼らずに気ままな旅をしたい老い　富子
ライバルの空席を見て落着けず　つえ子
みなやさし退社をすると決めてから　英子
国訛りとても上手な九官鳥　とく子
えりも岬　雨の霧笛を夜に聞く　登代子

柳界展望

編集部

★竹原川柳会は『川柳たけはら』10月号として創立35周年大会号を発行するとともに、**9月8日**付で学生句集『竹の子』を刊行した。昭和42年の第1集につづく第2集で、64名の作品550句が掲載されている。平成1・2年の年度賞次のとおり。

塾通いこれも私の為ですか　瀬川亜貴子

落ち葉一枚秋が少しずつ増える　小島　史子

★第2回全国中高年川柳大会の入選者表彰式が**9月15日**、東京・銀座の三笠会館で開かれ、越村枯梢氏（同人・名古屋市）が秀逸第1席に入賞、表彰された。

老人の森にみどりは絶やすまい

★第5回堺市民芸術祭川柳大会は**9月29日**、堺市立栂文化会館で118人が参加して開かれ、同人の岩佐ダン吉、誌友の池森子さんがそれぞれ「海」「肌」の課題で秀句賞に輝いた。

海に向う僕は小さいなと思う　岩佐ダン吉

雨から雪に変る肌を寄せてから　池　森子

★堺番傘川柳会創立65周年記念川柳大会が**平成4年3月20日**、堺市民会館大集会室で開かれる。宿題と選者は、スリル＝杉森節子▽よもやま＝玉野可川人▽風景＝木野由紀子▽渡る＝加藤翠谷▽なさけ＝森中恵美子▽生きる＝榎本聰夢▽この頃＝西尾栞▽希望＝梶川雄次郎

▽句集刊行△

■田中叶（同人・青森県）はこのほど「川柳塔あおもり句集」第3集として田中叶百句集『蟹の泡』を川柳塔あおもりから刊行した。

▽寄贈句集△

■島一休止・句文集『仮面のつぶやき』（讃文社刊・価3500円）

▽訃　報△

■市川鈴魚氏（元本社同人・岐阜市）は9月20日逝去された。

▼削　除▲

■**10月号**＝P53上段の丹下美津子（松山市）さんの4句中、「小利口に動いて足を踏みはずす」「寡婦の句にいつか涙の句が消える」は9月号掲載句の二重投句であり、ご本人の申し出もあったので削除します。

▽訂　正△

■**10月号**＝P2エッセイ本文17行目「プラハ」→「**プハラ**」、P7・18行目「味方塚」→「**身**方塚」、P38上段18行目「結跏跌坐」→「結跏**趺**坐」、P44上段5行目「吉川哲夫」→「吉川哲**矢**」、P46中段4行目「渡部さとみ」→「渡部さと**美**」P63上段12行目「娘ぐ娘」→「**嫁**ぐ娘」。

（編集部）

新同人推薦

田中　薫
―薫風・紫香・正坊・武庫坊推薦

岡本　吉太郎
―薫風・正坊・静雄推薦

梅田　宣司（せんじ）
―薫風・鬼遊推薦

藤井　正雄
―薫風・鬼遊推薦

11月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 行方・退く・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
堺川柳会	4日(月)午前11時集合 追う・静か・ゴミ・自由吟	堺市博物館（弁当持参） 〒593 堺市堀上緑町2－9－2　河内天笑
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時半から 小雨・化粧・結ぶ	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から インテリ・息・意地・痛む	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
八尾市民 川柳会	10日(日)午後6時から 櫛・スタンド・杖・守る	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 鳥・苦い・散る・自由吟	**西宮市高木センター**　阪急西宮北口駅北出口から歩10分 〒663 西宮市高木東町9－4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
南海 川柳会	15日(金)午後6時から 仕打ち・追究・チャンス・満足	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 十一・因縁・教える・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
南大阪 川柳会	19日(火)午後6時から 怠る・恐い・粗末・尖る	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(木)　正午から 円滑・棚・ぼんやり・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3－8－8　川島颯云児 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
はびきの 市民 川柳会	24日(日)午後1時から 靴・高い・バック・(質)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
岸和田 川柳会	28日(木)午後6時から 洗う・依頼・うそ・円	岸和田市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7－36　植山武助
川柳 東大阪	29日(金)午後6時から ピエロ・頑固・一途・疑う	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3－21　片岡湖風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚

※川柳ねやがわは11月3日（日）寝屋川市民川柳大会〈98頁参照〉
※富柳会は11月3日（日）富田林市民川柳大会〈40頁参照〉
※京都塔の会は11月17日（日）秋の吟行句会〈45頁参照〉

編集後記

★仕事の関係もあって、私の家へは毎日、五通から十通の郵便物が届く。急ぐ場合は速達便をお願いしているが、それがあまりアテにならない。確かに送ったという原稿が着かないので、もう一度、送付を頼んだところ、翌日午前中に後の便、午後に一週間前に投函したものが着いた。日付印があるのではっきりしている。

★アタマにきて、所轄の郵便局に抗議したところ、配達課長とやらがかけつけ、陳謝した上、〝問題〟の封筒を持って帰った。普通便の場合は発送した局の日付印だけだが、速達便はそれを受け付けた局の日と時刻のスタンプがあるので、追跡調査によってどこで遅延したかが分かる。二一〇円也の価値があるわけだ。

★信じない人が多いかも知れないが、郵便が確実で速いことは、これでも日本は世界屈指だそうである。便便がルーズで有名なのはイタリアで、フランスの新聞『ルモンド』が「イタリアの郵便業務はチベットと並んで世界最低」と書いたところ、アメリカの雑誌『タイム』が「それではチベットに悪いじゃないか」と抗議の記事を載せたという話を何かで読んだ。

★今回の台湾ツアーで、9月26日に台北のホテルから出したエア・メールは、3日ぐらいで着くという話だったが、実際に到着したのは9日後の10月5日で、これでも速いほうかも知れない。以前に中国旅行をした際、北京からの郵便は着いたが、洛陽から出したのは遂に届かなかった。（正）

☆小説を読んでいて、時々ギクッとする文章に出会うことがある。「いったい夫婦のつながりとは何なのだろうか。この退屈な日常のもろもろを共有しているってことなのか。喜びや悲しみや苦しみよりも、日常の倦怠感を共有して、それに一緒に耐えていくことが夫婦の第一条件なのか」

☆いつも何かしたい事、しなければならない事があって、あまり退屈したことがない私は、何べんもこの箇所を読み返した。確かに喜びや悲しみ、苦しみの時には、善悪は別として、意識は充実している。しかし、銀婚も過ぎて、平穏無事、平々凡々の日が続けば、多かれ少なかれ、生活はマンネリズムに陥る。

☆昔から人は変化、刺戟を求めて旅に出た。夫婦一緒でも、また一人は留守番をしても、それぞれに何か得るものがあり、一時的にせよ、多少は違った二人になっているはずだと思うのは甘過ぎる考えであろうか。

☆五月号に零余子（むかご）がマンションのベランダでできるか試してみると書いたら、何人かに結果を聞かれたが、二十個ほど採れた。大きいのでも一センチくらいだったが、茹でて鄙びた味を楽しんだ。（み）

◇美しい花が咲いていました。花を見付けると誰でもつい採って帰りたくなるものです。でも花はそこに咲いているのが一番美しいのだと思います。花を見て、美しいと思う人は、その人の心が美しいからで、採らずにそのまま咲かせておく人は、その人が優しい心の持ち主なのだと思います。また、美しいから採るんだという人は、エゴイストで美しいとも何とも思わない人は、きっとまだ一度も鏡を見たことのない人だと思うんですが…。

◇阪急ブレーブスという球団が以前ありまして、球団の花、福本豊選手は盗塁世界新記録を達成しました。背番号7の盗塁王の足には当時、一億円という巨額な保険がかかっていましたし彼は新記録達成の日も、子供のカンガルーの皮で作った靴を履いていました。この靴の目方は四百グラムとのことでした、ハイ。

◇編集後記に、私だけがケッタイなことばかり書いて紙面を汚していますが、枯木も山の賑いだとご容赦願いたい。八月号西尾栞主幹の「ばけたらあかん」を、繰返し繰返し読んでは鉛筆を削りながら、路郎語録の〝君、川柳は情熱だよ〟に励まされています。（し）

作品募集

1月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）八木千代選

課題吟（3句）
「悟る」高杉鬼遊選
「数字」宮園射月芳選
「始末」栗谷春子選

初歩教室「売場」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

2月号

課題吟「卵」「手帳」「仕える」

初歩教室「散歩」

本社11月句会

日時　11月7日（木）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1―1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点西南角

おはなし　宮口笛生

兼題「青い」後藤正子選
「偽る」高須賀金太選
「移す」稲葉冬葉選
「王手」板尾岳人選
「成功」西尾栞選

席題　1題　当日発表　各題2句以内
会費　500円
投句　柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社12月句会　7日（土）

兼題「忍ぶ」「作法」「注ぐ」「鋭い」「墨」

夜市川柳募集

第6回「ひらく」　森本夷一郎選
ハガキに3句　11月末締切
投句先　〒593 堺市堀上緑町5-9-2
河内天笑方　堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「自慢」　橘高薫風選
ハガキに3句　11月10日締切
投句先　〒540 大阪市中央区馬場町3―43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　11月24日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「留守」　橘高薫風選
ハガキに3句　11月15日締切
投句先
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2―20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料56円）
半年分　三千八百円（送料共）
平成三年十月二十五日印刷
平成三年十一月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六六）六六―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成三年十月二十五日 印刷
平成三年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七七四号 川柳塔 十一月号
定価 六百円（送料 五十六円）

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

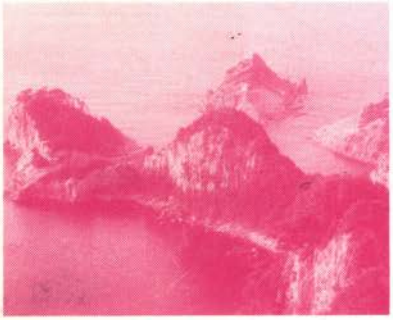
売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

豊津住宅株式会社

本　社　豊津住宅KKビル
〒564 吹田市泉町5丁目28—27　TEL（06）330—0102

豊　津　店
〒564 吹田市泉町5丁目11—14
TEL（06）330-0006㈹
FAX（06）388-6102

関大正門前店
〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL（06）388-6166㈹
FAX（06）388-6886


白島海岸

潮騒のリズムに
身をゆだねて
心地よいくつろぎを

国立公園 隠岐の島

施設のごあんない
収容人員　45名
客室　13室
舞台付広間　42畳
駐車場　乗用車10台
冷暖房完備

旅館 金峰荘（きんぷそう）
〒685 島根県隠岐郡西郷町
TEL（08512）2-1427 FAX（08512）2-2330

雑誌 05703—11